

名歌で
たどる
日本の心

スサノオノミコトから
昭和天皇まで

小柳陽太郎 他「編・著」

すぐれた先人の詠よまれた歌を集めて若い人たちの手にとってもらいたい、それは私たちの長い年月の願ねがいでした。とりわけこの数年、あれほど誇り高く生きた先人の足跡、世界の人々から限せんげんりない羨望せんぼうの目で見られてきた日本、それがどうしてこのような乱れた世の中になってしまったのか。私たちはこの現状を見るにつけ、一刻も早く日本人本来の生き方、考え方、あの美しかった日本人の生活を取り戻さなければいけないと思われてなりません。だが、そのことは大人だけではなく、今ではむしろ心ある若い人たちが、これでいいのかと真剣に考えはじめているのではないでしようか。ではそのためにはどうすればいいのか。それにどう応こたえたらいいのか。

いうまでもなくこの「失われつつある歴史」を回復させるためには、歴史の書物を紐ひも解といて、歴史の真実をあきらかにするのは当然のことでしょうが、それと同時に大切なことは、歴史に登場する人の心にふれること、その人の心を私たちの心でしっかりと受けとめ、それを「感じる」ことではないでしようか。こういう歴史があつたという知識はもちろん大切ですが、いま若い人たちに知ってもらいたいのは、この世の中にこんなにはすばらしい生き方を貫いた人がいたということ、日本という国はこのような「ますらを」によって守り伝えられてきたということを感じてもらふことです。いま日本の教育でいちばん求められているのは歴史上の人物の心と私たち

の心とのふれあい、すなわち歴史に対する概念的な把握ではなく、その歴史の中に登場する人物に直接ふれることなのです。

では歴史上の人物に直接にふれる、とはどういうことか、どうすればそのようなことができるのか。それは——それこそ日本でしかできない、じつに恵まれたことなのです——その人が詠んだ「和歌」を読めばいいのです。私たちの祖先は遠い遠い神代の時代から現代に至るまで、五七七七という一貫したリズムの中に、二千有余年の長きにわたってよろこびも悲しみも、そのすべての感情を託して生きてきました。しかも私たちもまた、ほんの少しの手解きを受けさえすれば、自分で歌を詠むこともできるし、その経験を通して、自分で直接にその先人の歌にこめられた作者の思いを味わうことができ、今の代にありながら遠い祖先と情感の世界を共有することができます。この世界のどの民族にも、どの国家にも到底、想像もできない比類のない世界に私たちは生きてきたのです。

たとえば戦国時代の武田信玄や上杉謙信という名前は子供たちでも知っている。しかし武田信玄には、

軍兵は物言はずして大将の下知（命令）聞く時ぞいくさには勝つ

という、いかにも武將らしい力のこもった歌があるかと思うと、

霞かすむより心もゆらぐ春の日に野べの雲雀ひばりも雲に鳴くなり

と春霞はるがすみがかかると、もうそれだけで「心もゆらぐ」という、自然に溶け込んだ美しい歌もある。私たちはこの歌を通して、これまで知らなかった信玄の心を、それこそ「直接に」知ることができるとは、そして上杉謙信もまた、

武士もののふの鎧よろひの袖かたしを片敷かたしきて枕まくらに近ちかき初雁はつかりの声

という自然に溶け合った陣中かりねの仮寝かりねの一夜を美しく詠よんでいる。戦国時代というあの殺伐きつぱつとした時代の中でも日本の武將ぶしょうたちは「優雅」の世界を忘れなかった。美しい「日本の心」が生きていた。このように私たちは歴史上の人物が残した「和歌」を通して、その人の心こころにふれることができる。私たちの心の中に直接に歴史をよみがえらせることができるのです。私たちはなんと恵まれた民族みんぞくだろう、そう思われてなりません。

もう一つ、この信玄と謙信の歌については、次のようなことがいえるのではないでしようか。
明治天皇の御製ごせい（天皇のお歌のこと）に、

こともなくしらべあげたる言の葉の花にぞにほふ国のすがたも

という一首があります。「こともなく」とは、特別の意識もなく、ありのままに。「しらべあげたる」とは美しい調べて詠むということ。日本とはこういう国だと意識して詠んだり、武将のあべき姿を示すというのではなく、ただ素直に実感が詠まれた歌には「国のすがた」が「言の葉の花にぞにほふ」、花がにおうように日本の国の国柄が感じられる、ということでしょう。この信玄や謙信の歌も「武士道」とか「日本精神」などというような概括的な言葉ではなく、それこそ「花がにほふ」ように、「国のすがた」そのものが詠まれている。私たちはその歌をありのままに味わえばそれでいいのです。歌を通して歴史上の人物と私たちの心がふれあうというのはそういうことなのです。

こうして私たちは「和歌」を通して戦国の武将たちだけではない、遠い古代の英雄、吉野朝時代、文字どおり危機に瀕した皇統（天皇のご血統）を護持するために生涯をささげた武将たち、幕末の動乱を生きた数多くの志士たち、それら多くの先人たちが、どんなに深い思いを胸に生涯を終えたか、それら、かけがえのない人物像にふれることができるのです。だがいま教育の世界からは完全に排除されてしまっているこれら先人たちの心とのふれあい、それを何とか実現するたてではないものだろうか。そういう願いをこめて私たちはこの一冊を世に出すことにしたのです。こうして遠くは神代の須佐之男命が八俣の大蛇を退治して、櫛名田比売と新婚の宮を営まれたときのお歌、

八雲立つ出雲八重垣妻いづもやへがきつまごみに八重垣つくるその八重垣を

から、昭和天皇が最晩年、崩御の前年の秋、無量の感慨をお詠みになった

あかげらの叩く音するあさまだき音たえてさびしうつりしならむ

という御製まで、その悠久ゆうきゆうの日本の歴史の中でぜひとも手にとっていたきたい歌を私たちの心に浮かぶままに、この一冊に編集させていただきました。したがって、この書物の表題『名歌でたどる日本の心』の「名歌」というのは、一般に歌壇で高い評価をうけている著名な歌というのではなく、日本の国の「いのち」とともに末長く語り伝えられるべき歌という意味をこめて使わせていただいたのです。

しかしそれは必ずしも、いわゆる「国を思う」とか、「国を憂うれえる」というような歌を集めたものではありません。この中にはもちろん、恋の歌も自然を詠んだ歌もたくさん出てくる。しかしそこに「国」という言葉はなくても、それこそあの明治天皇のお歌のように「こともなくしらべあげたる言の葉」の中に「国のすがた」が「にほふ」ような歌を取り上げるようにつとめました。

ただその中でとくに歴代の天皇の御製については、できるだけ多くのお歌を収めさせていただきました。それはこのような歌集の中では他と異なった特色といえましょうが、それは一般にこ

の国の根幹こんかんたるべき皇室について語るとき、天皇のご存在の本質、天皇ご自身のみ心とはあまりにもかけはなれた論議に終始している現在の憂うべき風潮に鑑かんみ、ここでぜひとも心にとどめるべき御製を加えさせていたきたいと考えてこのような編集になりました。ささやかな書物ですが、この一冊がが遠い世の人と今の世に生きる若者の心を結ぶ一つの掛け橋になればと念ずるばかりです。

小柳陽太郎

名歌でたどる日本の心

目次



一 上古・明日香時代

17

- | | | | | | |
|-------|----|--------|----|---------|----|
| 須佐之男命 | 19 | 豐玉比売命 | 20 | 日子穗々出見命 | 20 |
| 久米歌 | 21 | 神武天皇 | 22 | 伊須氣余理比売 | 23 |
| 弟橘姫 | 24 | 倭建命 | 25 | 仁德天皇 | 27 |
| 黒日売 | 27 | 雄略天皇 | 28 | 大葉子 | 29 |
| 聖德太子 | 30 | 巨勢三枝大夫 | 31 | 舒明天皇 | 32 |
| 有間皇子 | 33 | 中大兄皇子 | 34 | 額田王 | 35 |
| 天武天皇 | 36 | 童謡 | 36 | 大伯皇女 | 37 |
| 大津皇子 | 38 | 持統天皇 | 39 | 柿本人麻呂 | 40 |
| 高市黒人 | 43 | 志貴皇子 | 44 | 元明天皇 | 45 |
| 東歌 | 46 | | | | |

二——奈良時代

49

聖武天皇

51

山上憶良

54

遣唐使の母

59

狭野茅上娘子

61

大伴氏の「言立て」

65

佛足石歌

71

光明皇后

52

大伴旅人

56

海犬養宿禰岡麻呂

59

橘諸兄

62

防人の歌

67

山部赤人

52

高橋虫麻呂

58

遣新羅使人の歌

60

大伴家持

63

阿倍仲麻呂

70

三——平安時代

73

桓武天皇

75

小野小町

77

菅原道真

80

西行

84

『梁塵秘抄』

87

伝教大師

75

在原業平

78

和泉式部

82

源頼政

85

式子内親王

88

読人知らず

76

紀貫之

79

崇徳天皇

83

平忠度

86

四——鎌倉時代

91

藤原定家

93

土御門天皇

98

龜山天皇

101

源実朝

94

順德天皇

99

冷泉為相

102

後鳥羽天皇

96

明恵上人

100

花園天皇

103

五——建武中興・南北朝・室町時代

105

後醍醐天皇

107

後村上天皇

111

宗良親王

114

後土御門天皇

117

武田信玄

120

豊臣秀吉

124

光厳天皇

108

北畠親房

112

長慶天皇

115

後柏原天皇

118

上杉謙信

121

菊池武時

110

楠木正行

113

後花園天皇

116

後奈良天皇

119

別府長治・照子

122

六——江戸時代

127

後水尾天皇 129

桜町天皇 132

田安宗武 134

光格天皇 139

貞心尼 143

島津齊彬 147

橘曙覽 150

有村次左衛門 156

西郷隆盛 159

伴林光平 162

久坂玄瑞 167

野村望東尼 172

和宮 178

淺野内匠頭長矩 130

桃園天皇 132

賀茂真淵 136

高山彦九郎 140

平賀元義 144

鹿持雅澄 148

月照 153

蓮寿尼 156

村垣淡路守 160

宮部鼎藏 165

真木保臣 169

孝明天皇 173

津川喜代美 179

靈元天皇 131

山県大弐 133

本居宣長 137

良寛 141

徳川齊昭 146

大隈言道 149

吉田松陰 153

佐久良東雄 157

有馬新七 161

平野国臣 166

高杉晋作 171

三条実美 176

西郷千恵子 180

七——明治時代

183

三条西季知 185

樋口一葉 188

楫取道明 191

正岡子規 195

橘周太 201

『山桜集』 204

石川啄木 211

副島種臣 186

野中千代子 189

田中正造 192

伊藤左千夫 198

乃木希典 202

大須賀松江 209

明治天皇 212

福本日南 187

与謝野鉄幹 190

天田愚庵 193

広瀬武夫 199

東郷平八郎 203

青木繁 210

昭憲皇太后 216

八——大正・昭和時代

219

長塚節 221

会津八一 225

若山牧水 231

田代順一 237

島木赤彦 222

大正天皇 227

三井甲之 233

黒上正一郎 238

佐佐木信綱 224

貞明皇后 229

川出麻須美 235

河村幹雄 240

九 — 『いのちささげて』

南方熊楠 241
与謝野晶子 246
牛島満 249
窪田空穂 252
斎間万 253
本間雅晴 256
斎藤茂吉 258
井上孚麿 261
香淳皇后 269

273

吉野秀雄 243
松尾まつ枝 247
下村海南 250
大鹿卓 253
菊地剣 253
坂根庸子 257
高柳勝平 260
白井傳 263

山本五十六 244
栗林忠道 248
阿南惟幾 251
高見楯吉 253
保田與重郎 255
丹野きみ子 257
村岡虎雄 260
昭和天皇 264

凡例

- 一、「和歌」の漢字に付した振り仮名は「正仮名遣い」とし、「作者名」および「本文中の漢字」の振り仮名は現代仮名としました。
- 二、「作者名」に複数の表記がある場合や、「和歌の表記」について資料により違いがあるものは、編者の判断で表示しました。なお「作者名」で読みが不明なものは、振り仮名を付けずにそのままとしました。
- 三、和歌の「配列の順序」は原則として「作者の没年」を基準としましたが、没年の不明な場合等は編者の判断によりました。
- 四、作者の「年齢」は「数え年」としました。
- 五、「万葉集」の和歌には、読者の便宜をはかって「国歌大観」の番号を表記しました。
- 六、生存者の方々の作歌は選択の対象から外させていただきました。

一——上古・明日香時代



早

くから「大八州（日本列島）」ではお互いの心を伝えあう「言葉」、四季のうつろいの中でさまざまな形をともなって展開する「生活」、森羅万象に神々を見出す「祭祀」などの文化が広く行きわたっていました。

その中で、他にぬきんでた財力・武力、そして霊的な力をもつ皇室のご先祖、いわゆる大和朝廷によって統合への歩みが進められ、国家の統一がなされてきたのです。奈良時代の初期に編纂された「古事記」、「日本書紀」には、その建国に至る過程が古い伝承とともに記されていますが、本書にも収められている「神武天皇のご東征」「倭建命の熊襲・蝦夷平定」などの物語は、国家統一の過程で展開した歴史的なさまざまな事実が核になって形成されたものでしょう。さらに大切なことはその物語の中には数多くの歌が詠まれていることです。とりわけ倭建命のご東征の折に詠まれた数々のお歌は、日本民族の後世に伝うべき不滅の絶唱でした。

わが国の最初に記されている歌、五七五七七の「和歌」は神代の昔、皇祖神、天照大御神の弟、須佐之男命がお詠みになった「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を」というお歌でした。この短歌の形が受け継が

れながら今日に至っているのです。

六世紀の末頃、都が大和の東南、明日香の地にあつたため、歴史上では明日香時代と呼びますが、その頃から日本は大きな歴史的転換期に入ってゆくのです。まず百済からの仏教伝来は文化的な大事件でしたが、その時代の危機のただなかにあつて、日本人のあるべき姿を示し、国運を正しく導いてこられたのが聖徳太子でした。その太子のご事業が、いかに当時の人々に強烈な感銘を与えたか、本書のお歌に偲ばれるところですが、その危機を乗り越えた大化改新の前後の頃から、「万葉集」の「第一期」の世界が始まるのです。その後、壬申の乱を経て天武天皇の御世に、柿本人麻呂を中心とした「第二期」の時代がひらけてくる。天武天皇は律令体制の基礎を固め、「古事記」、「日本書紀」の編纂に着手して、古代日本のゆるぎない国家像をおつくりになった偉大な天皇でしたが、人麻呂の代表的な歌が、その天武天皇の皇子、草壁皇子（皇太子）、高市皇子への挽歌（死者を弔う歌）であつたことを思えば、人麻呂の果たした役割は万葉第二期という時代に与えられた国家的な使命を表現することであつたといつても、過言ではないと思われまふ。

須佐之男命
すさのおのみこと

八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を

神話に登場する須佐之男命は皇祖神（天皇の先祖神）天照大御神の弟君であるが、暴風雨を象徴する暴ぶる神であり、父君、伊邪那岐命から命じられた「海原を治めよ」というお言葉に背き、高天原（天上の国）を治めておられた姉君、天照大御神のもとでもまた激しい乱暴を繰り返したため、ついに高天原から追放されることになった。

こうして出雲の国（島根県）に降り立った命は、その国の肥の河（斐伊川）の河上で、童女を中にして嘆いている老夫婦に出会う。聞けば、八俣の大蛇が毎年やって来て娘を喰べるのだという。事情を聞いた命はただちに決断、その娘、櫛名田比売を救うべく大蛇を退治、肥の河は斬り裂かれた大蛇の血で朱に染まった。命はその折、切り裂いた大蛇の尾から太刀（天叢雲の劍・草薙の劍）を得て天照大御神に献上、さらに出雲の「須賀」の地に至り、「わが御心すがすがし」とおっしゃって、櫛名田比売との新婚の宮をおつくりになった。この一首はその、すがすがしい思いの中でお詠みになった勝利と新婚の歡喜の歌である。

初句の「八雲立つ」は、雲が幾重にも天を覆って湧き立つ姿。三句目の「妻ごみに」は、妻をこもらせるために、「八重垣つくる」は多くの垣にかこまれた、立派な新居をつくるの意。妻を住まわせるために建てたこの新居をつつむ壮大な雲よ、という歌である。この歌はわが国最初の

和歌と伝えられ、後世に和歌のことを「八雲の道」と呼ぶのはこの『古事記』の神話に由来する。

豊玉比売命
とよたまひめのみこと

赤玉は緒さへ光れど白玉の君が装し貴くありけり
あかだまはを緒さへあかりたまのきみがよそひたふと

日子穂々出見命
ひこほほでみのみこと

奥つ鳥鴨著く島に我が率寝し妹は忘れじ世の尽に
おくつうかもと著くしまにわがみねし妹はわすれじよのついに

天照大御神の御孫、邇邇藝之命が高天原から、「筑紫の日向の高千穂」に天降られた（天孫降臨）あと、邇邇藝之命・日子穂々出見命・鶉葺草葺不合命の、いわゆる「日向三代」の御世が続く。この二首の歌は、その邇邇藝之命のみ子、日子穂々出見命と海神の娘、豊玉比売命との相聞（恋愛）の物語である。

日子穂々出見命（山幸彦）は、兄君、火照の命（海幸彦）と争い、敗れてはるかな海原のかなたの綿津見の宮のもとに逃れ、海神の娘、豊玉比売と結婚。三年の月日が流れたが、ある日、命の深いため息を聞きつけて事情を知った海神から鹽盈珠、鹽乾珠（海水を満たせたり引かせたりする呪力をもった玉）を授けられて命は鰐の背に乗って帰還、兄君、火照の命を降伏せしめた。

その後、豊玉比売はみ子をお産みになるために、夫、日子穂々出見命のもとに來られたが、命が約束を破つたため、比売はお産みになつたみ子を置いて、「海坂を塞ぎて」海と陸との界を閉ざして、海神の宮にお歸りになつてしまふ。

だが比売は夫が約束を破つたことは恨みながらも「恋ふる心に忍びず」恋しさを抑えきれないで、お詠みになつたのが一首目の歌である。「赤い珠玉は美しく、それを貫いている緒までも光輝いているが、白い玉のようなあなたの装いはそれにもまして貴く美しく忘れられない」の意。

二首目はそれをうけて日子穂々出見命がお詠みになつたもの。「奥つ鳥」は鴨の枕詞。「あの鴨が降り着く海神の島で契りを結んだ妻のことはこの世の終わりまで忘れない」という、いずれもはるかな海原を背景にした激しい相聞の歌である。こうしてお生まれになつたみ子が鶉茸草茸不合命、日本初代の天皇、神武天皇の父君であつた。

久米歌

みつみつし 久米の子らが 粟生には 葎一莖 そねが莖 そね芽繋ぎて
撃ちてし止まむ

みつみつし 久米の子らが 垣下に 植ゑし山椒 口疼く 吾は忘れじ
撃ちてし止まむ

神倭伊波礼毘古命（このみこと）

神倭伊波礼毘古命（神武天皇）は九州、日向の地から大和（奈良県）へご東征になり、瀬戸内海を経て浪速（なにわ）に上陸、大和の国、登実（とみ）に蟠踞（ばんきよ）していた豪族、登実毘古（とみびこ）と戦われたが、兄君、五瀬（いっせ）の命（みこと）はこの戦いで傷を負って戦死。命はその後、紀伊半島を迂回、熊野を経て南から大和に入り、ふたたび登実毘古と戦ったときに、命の親衛隊久米部（くめべ）が歌ったのがこの「久米歌」である。

「みつみつし」は「久米」の枕詞、天皇のご威光に輝く久米部の兵士の意味であろう。一首目の「粟生（あはふ）」は粟畑（あわばたけ）、「韭（からみ）一莖（ひとし）」はその粟畑に生えている一本の韭（なら）、その韭を「そね芽繋ぎて」根こそぎに引き抜くように、「撃ちてしやまむ」撃ち滅ぼさずにはおくものかの意。

二首目では、自分たち、久米部の屯営（とんえい）の垣根（かき）に植えた山椒（さんしょう）の実を口にすれば、「口疼（くちび）く」ひりひりと痛み痺（しび）れるように、敵から受けた恨みの忘れがたいことを激しい言葉で述べている。いずれも強敵を前にして撃滅せずんばやまじという強烈な決意の歌である。

この戦いに勝利を収められた神武天皇は、大和の「畝火（うねび）の橿原（かしはら）」の地に初代の天皇として即位、日本建国の日を迎えられたのである。

第一代・神武天皇

葦原（あしはら）の密（しけ）しき小屋（を）に菅（すが）置（たみ）いやさや敷（し）きて我が二人（わ）寝（ね）し

桓原建国のあと、神武天皇は大和国の東南、三輪山の近くに住む伊須気余理比売を皇后にお選
びになったが、天皇がはじめて皇后のお住まいに赴かれたときのお歌である。その家は葦の葉の
茂った狭井河のほとりにあった。「葦原の密しき」の「密しき」の意味については諸説があるが、
荒れた、粗末な意か。「菅畳」は菅で編んだ敷物、「いやさや」はいよいよさやかに、清らかに
の意味であろう。天皇はその粗末な小屋で、伊須気余理比売とすがすがしい一夜をすごされたの
である。サ行の音の繰り返しすがすがしく響く。日本初代の天皇の、皇后によせた愛の歌であ
る。

伊須気余理比売

狭井河よ雲たち渡り畝火山木の葉さやぎぬ風吹かんとす

神武天皇には伊須気余理比売を皇后にお立てになる前に、すでに日向の国に妃がおられたが、
その妃との間のみ子、當藝志美々命は、天皇崩御のあと、継母、伊須気余理比売を妻とし、すで
に神武天皇との間にお生まれになって天皇のあとをお継ぎになるはずのお子さま方、三人の義弟
を殺そうと企んだ。それを知られた皇后が、建国直後に起きたこの国家の重大危機をお子さま方
に知らせるためにお詠みになった歌。

「狭井河よ」の「よ」は「から」の意。狭井河の方から雲が立ちのぼって、いま私のいる畝火山

の木の葉が激しくざわめき、嵐はそこまで迫っている——。自然を借りて、国を襲う危機の到来を告げる、切迫した息づかいが聞こえてくるようなお歌である。

おとちらばなりめ
弟橘姫

さねさし相模さがむの小野おのに燃ゆる火の火中ほなかに立ちて問ひし君はも

遠く九州に赴き能襲くまそを征伐した古代の英雄、倭建命やまとたけるのみこと（第十二代・景行天皇の皇子）は、帰京後さらに東国へ軍を進められたが、そのとき、走水海はしりみずのうみ（現在の東京湾・浦賀水道）の神が暴波あらなみを立てて命の船をはばもうとしたので、その神の怒りをしずめるために、妃、弟橘姫は身を翻ひるがえして海にお入りになった。

この歌はそのとき、姫がお詠みになった歌である。命が相模さがみの国（神奈川県）でその地の豪族によって火攻めにあわれたとき、燃えさかる炎の中で、私の身を案じて呼びかけてくださったあなたよ、の意。「火中に立ちて問ひし君はも」と命の深い情愛に思いを馳せてお詠みになった愛恋せきつの惜別の歌である。「さねさし」は「相模」の枕詞。「問ふ」は案じて呼びかけるの意。

なお『古事記』には、この歌に続けて、それより七日あと「その後の御櫛海辺みくしうみべたに依よりき。すなはちその櫛をとりて、御陵みささぎを作りて治め置きき（弟橘姫の御櫛が海岸に流れついた。そこで倭建命はすぐにその御櫛をとって、皇后のお墓をおつくりになり、御櫛をお納めになった）」という一文がある。

短い言葉ながら、弟橘姫の捨身しやしんによせる命の思いの深さを偲しのばせる一節である。

なお弟橘姫については、皇后陛下が平成十年、その御著『橋をかける』の中で、幼い日、このお話をお読みになったとき、子供ながらに「愛と犠牲という二つのものが一つに感じられた」という忘れがたい経験をお述べてになっている。

倭建命やまとたけるのみこと

尾張おわりに直ただに向むかへる 尾津おつの崎さきなる 一つ松 あせを 一つ松 人にありせば
大刀たち佩はけましを 衣着きぬぎせましを 一つ松 あせを

東征を終えられた倭建命は大和へ戻られる途中、尾張（愛知県）の美夜受比売（命のお妃）のもとに身をよせられた。その後、神劍、草薙の劍（本書19頁参照）を美夜受比売のもとに置いたまま、北方伊吹山いぶきやまの神を退治しようとなさったが、その驕りおごのためか山の神に惑まどわされて、戦い破れ憔悴しょうすいの御身おんみのまま、尾張にお帰りになることなく直接大和へ向かわれる。これはその途上、桑名（三重県）の尾津の岬で海のかたに尾張の方を偲しのびながらお詠みになったお歌である。

「直に」は、まっすぐに。尾張の方にまっすぐに向いている尾津の崎の一つ松よ、「あせを」は「吾兄あせよ」でお前よの意。もしお前が人ならば「大刀佩けましを 衣着せましを」太刀も佩はかせたいのに、衣も着せたいのにと、肉親のような親しみをこめて呼びかけられたお歌である。尾張

に残した美夜受比売への思慕と草薙の剣を残してきた痛恨の思いが、「一つ松」への愛情と重な
つて読む人の心を打つ。

倭は 国のまほろば たたなづく青垣 山隠れる 倭しうるはし

命はそれよりさらに南下、現在の亀山の西、鈴鹿山脈のかなたに、懐かしい倭をはるかに望む
能煩野の地にお着きになった。そのときはもはや都に帰り着くこともできないようなお身体だつ
たが、その最後の思いを託してお詠みになったのがこのお歌である。

わがふるさと大和は「国のまほろば」、「まほろば」の「ま」は接頭語、「ほ」はすぐれたとこ
ろ、「ろ」も「ぼ」も接尾語、大和はもつとも美しいところだの意。「たたなづく青垣」は畳み重
なるように続いている青々とした美しい山脈、「山隠れる 倭しうるはし」は山々にかこまれて
いる倭の国の美しいことよの意。

命はそのとき「愛しけやし 吾家の方よ 雲居起ちくも」という片歌（五七七形式の歌）もお詠
みになっている。「懐かしいわが家の方から雲が立ちのぼってくる。しかし私はもうそこに帰り
つくことはできない」という望郷の思いをこめたお歌。命はさらに美夜受比売に一首の歌「嬢女
の 床の辺に 吾が置きし つるぎの大刀 その大刀はや」を残して、この地で生涯を終えられ
た。「はや」は詠嘆を表わし、ああその太刀よの意。記紀では、このあと命の魂は八尋白千鳥
（大きな白鳥）となって大空のかなたに飛び去っていかれたと記されている。

第十六代・仁徳天皇

山県やまがたに蒔まける菘菜あそなも吉備人きびひとと共にし摘めばたのしくもあるか

黒日売くろひめ

倭方やまとへに西風にし吹き上げて雲離れ退き居りとも我忘れめや

倭方やまとへに行くは誰たが夫つま隠水こもりづの下よ延はへつつ行くは誰たが夫つま

仁徳天皇は難波（大阪府）に都を営まれたが、高殿にのぼって民家に炊煙が立っていないのを見て三年の間、租税を免じるという仁政を施されたことで有名。天皇は吉備の国（岡山県）の黒日売を寵愛されたが、日売は、皇后、磐之姫の嫉妬を恐れて国に帰ってしまふ。この歌は天皇が思慕の思いに耐えず、皇后の目を欺いて吉備に赴かれたときに詠まれたものである。「山の畑に蒔いた菘菜（青菜）を摘むという平凡なこともお前（吉備人）と一緒にすれば楽しいことよ」という愛情に満ちたお歌。

次の二首は、天皇が都にお帰りになったときの黒日売の歌。一首目の「雲離れ」は西風に乗っ

て遠く都に帰られる天皇を見送る悲しみを、遠ざかる雲に託して詠まれたもの。「倭方に西風吹き上げて」大和の方に西風が強く吹き上げて雲が離れてゆくように、遠く東の方に去っていかれた天皇、だが「退き居りとも」遠く離れていても、どうしてお忘れ申しあげることがありましようかという意。

二首目の「隠水の」は草木に覆われて見えない水のように、「下よ延へつつ」はその下を先へ先へと流れてゆく意。「人目につかないようにひそかに大和に帰ってゆくのは誰の夫でしようか、私こそあなたを夫とお慕い申しあげているのに」という気持ちであろう。遠ざかる天皇のお船を慕う思いが切ない。

第二十一代・雄略天皇

籠もよ み籠持ち 掘櫛もよ み掘櫛持ち この丘に 菜摘ます兒 家聞かな
名告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居れ しきなべ
て われこそ座せ 我れこそは 告らめ 家をも名をも(一)

『万葉集』全二十巻の巻頭に置かれた歌。『万葉集』の第一頁はこの春光あふれる雄略天皇の御製から始まる。

天皇は山の辺で春の若菜を摘む名もない女性に親しく問いかける。「籠よ、立派な籠をもち、

土を掘る掘串よ、その立派な掘串をもつて、この丘で若菜を摘んでいる乙女よ、あなたの家はどこ、お名前は何か、私はこの大和の国すべてを治めている天皇である。私の方からまず名告ろう、私の家も私の名前も」。女の手にもつ籠を「み籠」、掘櫛を「み掘櫛」とそれぞれ語頭に「み」を添えて呼びかける親しみの表現、「菜摘ます子」の「す」という敬語に示された、あたたかな節度のある言葉づかい、そこから一転して自分は大和の国の天皇であるという堂々たる名告りに移り、「おしなべて」「しきなべて」とたたみこむような力強い言葉で、結婚をうながす激しい気迫そこに示された「天皇」と「名もない民」とのふれあいに、この国独自の君臣の間の素朴な情愛が見事に表現されている。「おしなべて」「しきなべて」の「なべて」は靡びかせての意で、天皇の威光の盛んなことを示す。

雄略天皇のご在位はほぼ五世紀の頃、中国の史書の、いわゆる「倭の五王」の中の「倭王武」にあたる方と思われるが、当時の日本の国力がいかにかくましく、内外に及んでいたかは最近の考古学・歴史学の示すところである。その中心に立つ英雄、雄略天皇こそ、『万葉集』巻頭にふさわしいお方であった。

(伝) 大葉子

韓国の城の上に立ちて大葉子は領布振らすも日本へ向きて

『日本書紀』によれば、第二十九代・欽明天皇二十三年（五六二）、朝鮮半島におけるわが国の拠点、任那は新羅によつて滅ぼされた。その後も凄惨な戦いが続くが、その折、日本軍の猛将、伊企灘が捕らえられ袴を脱かされて尻を日本に向け「日本の将よ、わが尻を食らえ」と大声で叫べと強制される。だが伊企灘はそれに耳を傾けることなく、「新羅の王よ、わが尻を食らえ」と絶叫して殺され、並みいる将兵たちに深い感銘を与えた。

この歌は、『日本書紀』では、そのとき、夫とともに捕らえられた伊企灘の妻、大葉子が詠んだ歌と記されているが、歌詞によれば韓国の城の上に立つて、遠い日本に向かって領布を振つて別れを惜しむ大葉子の姿を第三者が詠んだ歌ではあるまいか。とすれば「韓国の城の上に立つて、大葉子は夫、伊企灘の死を悼みつつ日本に向かって領布を振つて別れを告げていることよ」の意であろう。「振らす」という敬語の中に人々の大葉子への畏敬の気持ちが表示されている。「領布」は古く婦人が正装のときに肩にかけていた白い布のこと。古代の朝鮮半島で戦つた将兵の心情を偲ぶ貴重な一首である。

聖徳太子

しなてる 片岡山に 飯に飢て 臥せる その旅人あはれ 親無しに 汝生り
けめやさす竹の 君はや無き 飯に飢て 臥せる その旅人あはれ

聖德太子は第三十一代・用明天皇の皇子、第三十二代・崇峻天皇弑逆すしげんという国家存亡の危機に際して、次に皇位におつきになった第三十三代・推古天皇の摂政として「憲法十七条」のお教えを中心として今後の日本の国のあるべき姿、人としての生き方の基本をお示しになり、日本史上不朽の業績をお残しになった方。

この歌は太子が斑鳩いかるが（現在の法隆寺の地）の西南、片岡山においてになったとき、道のほとりに倒れていた飢えびとに呼びかけられたお歌。太子がその名前をお聞きになっても答えないので、食べ物を与え、御身おんみにまよっておられた衣を脱いでお掛けになり、「安く臥せこや（安らかに休みなさい）」とおっしゃって、この歌をお詠みになったという。『日本書紀』の伝えるところである。

「しなてる」は「片岡」にかかる枕詞、その片岡山に飢えて行き倒れになっている旅人よ、「親無しに 汝生りけめや」おまえは親がいなくて生まれてきたのではあるまい。「さす竹の 君はや無き」、「さす竹の」は「君」の枕詞、「君」は諸説があるが、ここでは「妻もいないのか」ととるべきか。「親無しに」以下の切々たるお言葉、「その旅人あはれ」の繰り返しが人々の心をどんなに強く打ったか。人々はお歌の中にお詠みになったみ心を、太子を偲ぶこの上もないよすがとして、若干の言葉を替えつつも『万葉集』をはじめ、後世までこの歌を語り伝えている。

巨勢三枝大夫こせみつえのたけ

斑鳩いかるがの富とみの小川の絶えばこそわが大王おほきみのみ名忘らえめ

聖徳太子がお亡くなりになったのは推古天皇三十年（六二二）二月二十二日、御年四十九歳であつた。そのときの国民の嘆きがどんなに深かつたか。それは『日本書紀』につぶさに記されているところ、「父母を亡へるが如くして、哭き泣つる声、行路に満ち……」、人々は「日月、輝を失ひて、天地既に崩れぬ。今より以後、誰をか恃まむ（誰を頼りにして生きていこうか）」と嘆いた。ここに取上げられた挽歌（死者を弔う歌）は、太子のお側に仕えていた巨勢三枝大夫が詠んだ三首の中の一首。この太子がお住まいになつていた斑鳩の地を滾々と流れている富の小川、その「小川の絶えばこそ」小川の水の絶えることがあつたら別として、そのようなことが決してありえない以上、永久に太子のお名前は私の胸から消えることはない、赤心（まごころ）を吐露した歌である。

第三十四代・舒明天皇

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば
国原は 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし国そ 蜻蛉島 大和の国は

(二)

この歌は先の雄略天皇の御製をうけて、『万葉集』開卷、第二に置かれた舒明天皇の御製であ

る。舒明天皇はのちの天智天皇および天武天皇の父君であられたが、天智・天武の御世は周知のごとく、柿本人麻呂を中心にして万葉が大きく花開いたとき。それを思えばそのお二方の天皇のお父上、舒明天皇の御製はまさに万葉の時代の幕明けを告げる歌であつたといつていい。

「とりよろふ」は諸説があるが、とりわけ立派な姿を具備したの意か。「国見」は君主が高いところに立って国の姿をご覧になり、国の命の豊かならんことをお祈りになる儀式。この歌はそのときのお歌で、「大和の国には多くの山々があるが、なかでも天の香具山に登って国見をすれば、広々とした平野には、かまどの煙があちらこちらから立ち上っている。広々とした水面には、かもめが飛び交っている。すばらしい国だ、この大和の国は」の意。天皇の目に映つた大和の風光をお詠みになつた壮大な「大和賛歌」である。

有間皇子ありまのみこ

磐代の浜松が枝を引き結び真幸きくあらばまた還り見む(一四二)

家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る(一四三)

有間皇子は第三十六代・孝徳天皇の皇子。第三十七代・斉明天皇がそのみ子中大兄皇子(のちの天智天皇)らとともに紀の湯(和歌山県白浜)に滞在しておられた留守の間に、蘇我赤兄の悪辣

な陰謀によって、帝位をうかがっているという無実の罪に問われ、護送されて中大兄皇子の取り調べを受けたあと、藤白坂ふじしろのさか（和歌山県海南市藤白）の地で処刑された。十九歳の短い生涯であった（斉明四年・六五八）。

一首目は護送されて行く途中、海辺の松の枝を結んで無事を祈られた歌。「真幸まさききくあらばまた還り見む」は幸い無事であったなら、またここに立ち帰ってみようの意。磐代は紀伊半島の西岸、南に中大兄皇子らが滞在されていた紀の湯を間近に望むところであった。

二首目は「家にいるときは食器に盛って食べていた（神様にお供まなえしたという説もある）ご飯を椎の葉にのせて食べなければいけない」という深い嘆きの歌。「草枕」は「旅」の枕詞。すぐれた資質をもっていた皇子だったがだけに、この悲劇に対する当時の人々の同情は深く、「万葉集」に長忌寸意吉麻呂、山上憶良等が詠んだ追悼の歌が収められてその生涯を偲んでいる。

中大兄皇子（第三十八代・天智天皇）

わたつみの豊旗雲とよはたぐもに入日いりひさし今夜こよひの月夜つくよ清明あきらけくこそ（二五）

この歌は中大兄皇子、のちの天智天皇が播磨はりまの国の印南国原いなみくにのはら（明石から加古川にかけての平野）の沖でお詠みになったもの。年月は示されていないが、お詠みになったところからしても、全体にみなぎる緊張感からしても、おそらく百濟くだら救援のため、斉明七年（六六二）、天皇をはじめとす

る国の中枢を占める人々が、こぞつて九州に赴かれた、その遠征の折ではあるまいか。

「わたつみ」は海の神、転じて海。「豊旗雲」は豊かに大きくたなびいた雲。海上はるかにたなびいている豊旗雲に入日がさしている。五句目の原文の「清明已曾」の読みには諸説があるが「清明あきらけくこそ」と読むべきか。「こそ」は願望の助詞ともとれるが、ここでは「清明あきらけくこそあれ」の「こそ」で強意の意、今夜の月は皎々こうこうと海原を照らすにちがいない、という強い確信の表現であろうと思われる。

額田王ぬかたのおおきみ

熟田津にきたづに船乗りせむと月待てば潮しほもかなひぬ今は漕こぎ出いでな（ハ）

額田王は『万葉集』の前期における代表的な女流歌人。はじめ大海人皇子みこ（のちの天武天皇）に召されて十市皇女とおのひめみこをもうけたが、のちに兄の中大兄皇子の寵ちやうを受ける。

この歌は、前の中大兄皇子のお歌と同じく、斉明七年、百済救援の途中、伊予いよ（愛媛県）熟田津いわたの石湯いわた（松山市の道後温泉）の行宮かりみやに滞在中に詠まれたものと記されているが、一首にみなぎる緊張感から見て、いよいよ九州へ向けて最後の船出をされたときの作ではあるまいか。「熟田津で船に乗ろうと月の出を待っていると潮も満ちて機は熟した。さあ漕こぎ出いせうよ」の意。

夜の船出には欠かせない「月」と「潮あ合あひ」、そのすべての条件が整って、いよいよ「全軍出

発！」という満ち満ちた氣迫が歌全体にあふれた絶唱である。

なお、この歌は『万葉集』の左註には齊明天皇の御製と記されているが、ここでは額田王が天皇のお気持ちになつて詠んだものと考えるのが通説である。

第四十代・天武天皇

み吉野の 耳^{みみ}我^がの嶺^がに 時なくぞ 雪は降りける 間^まなくぞ 雨は零^こりける
その雪の 時なきが如^{ごと} その雨の 間^まなきが如^{ごと} 隈^{くま}もおちず 思^{おも}ひつつぞ来^こ
し その山道^{やまみち}を(二五)

童謡^{わらうた}

み吉野の 吉野の 鮎^{あゆ} 鮎^{あゆ}こそは 島^{しま}傍^べも良^よき え苦^くしゑ 水^{みづ}葱^{そう}の下^{した} 芹^{せり}の下^{した}
吾^{われ}は苦^くしゑ

天智天皇の病^{びょう}が篤^{あつ}くおなりになつたとき、急激な時代の変化に危機を感じられた東宮(皇太子)、大海人皇子は出家。妃、鸕野讚良皇女(のちの持統天皇)とともに吉野にお入りになつたが、これが導火線となつて天皇崩御のあと壬申の乱^{じんしん}が戦^{いくさ}われた。その後、勝利を収められた天武天皇

飛鳥淨御原宮で即位になったが、一首目のお歌（『万葉集』所収）は、吉野に身をひそめるために遠い山道をたどられたすぎし日の苦しい思い出をお詠みになったお歌である。吉野の耳我の嶺はいつも、「時なきがごと」「間なきがごと」雪や雨が降っている、そのようにやむときなしに、「隈もおちず」道々の曲り角ごとに、もの思いにふけりながらたどってきたあの吉野の山道よ、という回想のお歌である。

この天武天皇に、当時の人々がいかに深い同情をよせていたか、それは二首目の『日本書紀』に収められた「童謡」に示されている。「童謡」とは民衆の中で歌われていたもの、神が人の口を借りて政治を批判するものともいわれているが、この吉野で名高い鮎は「島傍も良き」川の中の島辺にいるから幸せだろうが、私は水葱や芹の生えた水田に身をひそめているような境涯なので苦しいことだと、皇子（のちの天武天皇）の身になりきってわがごとくのように「え苦しむ」「吾は苦しむ」と繰り返して皇子の心中を偲んでいる。「え」は「ああ」という感動詞。このような苦しみの中から、律令体制の基礎を築き、さらには「古事記」「日本書紀」などの国史の編纂をはじめ後世に残る輝かしい天武天皇のご治世が生まれたのである。

大伯皇女

わが背子を大和へ遣るとさ夜深けて暁露にわが立ち濡れし（二〇五）

おつのみこ
大津皇子

百伝ももづたふ磐余いはれの池に鳴く鴨かもを今日のみ見てや雲隠がくろなむ(四一六)

大伯皇女

うつそみの人にあるわれや明日あすよりは二上山ふたかみやまを兄弟いろうせとわが見む(二六五)

大津皇子、大伯皇女はともに天武天皇のみ子、母も天智天皇の娘、大田皇女おおたのひめみこ、同母の姉弟であった。大津皇子は国政の中枢に参加、すぐれた資質にめぐまれて将来を期待されていたが、天武天皇崩御ののち、謀反を企てたという容疑によって二十四歳の若さで刑死。有間皇子につぐ悲劇であった。

第一首は大津皇子が伊勢いづせの齋宮いづせのみや(伊勢神宮に奉仕した未婚の皇女)であった大伯皇女をひそかに訪ねたあと、夜も更けて都に帰る弟を見送る姉大伯皇女の詠んだ歌。「私の弟を大和に帰そうとして見送っているうちに、夜も更けて明け方の露にすっかり濡れてしまったことだ」の意。何か不吉なものを感じながら、草葉に朝露あさつゆがおくまで、その場を離れがたく見送っている皇女の思いが伝わってくる。

二首目は詞書ことばがき(和歌などに付けられる前書き)に「大津皇子、被死みまからしめ給ひし時(死刑に処せら

れたとき)、磐余いはれ(奈良県桜井市)の池の陂つつみ(堤)にして涕なみだを流して作りませる歌」とある、大津皇子の辞世の歌。「私は磐余の池に鳴く鴨を見るのも今日を限りとして死んでゆくのだろうか」の意。「百伝ふ」は「磐余」の枕詞。

三首目の「うつそみの人にあるわれや」まだこの世に生きているこの私は、これからは弟の墓所である二上山を弟として見続けながら生きていくことだろうか、の意。二上山は大和平野の西、金剛こんごう、葛城連山の北端。とりわけ夕日ゆふひがその山の彼方に沈むときの皇女の悲しみが偲しのばれるお歌である。

第四十二代・持統天皇

春過ぎて夏来たるらし白妙しろたへの衣乾こしたり天あまの香具山かぐやま(二八)

持統天皇は天武天皇の皇后。壬申の乱以来、つねに天皇のかたわらにあって政治を補佐してこられた。天武天皇崩御ののち、女帝としてご即位になったがその後、皇太子日並皇子ひなみのみこ(草壁皇子)が亡くなられたため、その皇子、持統天皇の皇孫輕皇子かろのみこ(のちの第四十二代・文武天皇)がご成長になるまで皇位におつきになった。歌は「春がすぎて夏がやって来たらしい、天の香具山に白衣が乾してあるのを見れば」の意。天の香具山は持統天皇が営まれた、日本におけるはじめての本格的な都「藤原京」から指呼しこの間(近い距離)にあるが、「天の」という言葉が添えられている

ように、古代から仰がれてきた神山であって、その神聖を象徴する「白」と初夏の山を彩る「緑」が映えて美しく、一気に詠みくだされた勢いも力強い。

柿本人麻呂
かきのものひとまろ

阿騎の野に宿る旅人打ち靡き眠も寝らめやも古思ふに(四二〇)

東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ(四八)

日並皇子の命の馬並めて御狩立たしし時は来向ふ(四九)

柿本人麻呂は『万葉集』を代表する歌人というだけでなく、日本の和歌の歴史を通して最高の歌人というべきか。生没年は不明だが、古代国家の上昇期にあたる持統天皇・文武天皇の時代(六八七―七〇七)に宮廷に出仕、多くの宮廷儀礼歌を詠んでいる。石見国(島根県の西部)で没したといわれている。万葉歌人としては第二期の和歌隆盛期にあたり、その歌風は雄大な構想のもと、修辞にも巧みなものが多く、調べは重厚で伝統と独創とが見事に統一された不朽の名作が多い。ことに挽歌(死者を哀悼する歌)と相聞歌(恋の歌)が傑出している。『万葉集』には、人麻呂の歌は「人麻呂の作」と明記されているものと、他人の作も含むと思われる「人麻呂歌集」の歌

に分かれるが、前者だけでも九十首に近い作品が残されている。

この三首は、軽皇子が^{かるのみこ}大和の国の東方、安騎野^{あきの}（奈良県宇陀郡）で御狩をされたときに、随従して詠まれたもの。長歌に続く反歌（長歌のあとに添える短歌）、四首のうちの三首である。安騎野は軽皇子の父君、亡き草壁皇子^{くさかべのみこ}がかつて御狩をされたゆかりの地であった。草壁皇子は天武天皇と持統天皇の間に生まれ、期待されて皇太子となつたが即位を見ずに^{こころきよ}薨去。人麻呂自身、側近にあつて奉仕し、その霊前に心こもる挽歌（長歌並びに二首の反歌）を捧げている。この歌は人麻呂が亡き父君を追慕する皇子の立場に身をおいて詠んだものである。

一首目の「旅人」は「狩」に加わつた人のこと。「打ち靡^{なび}き」は身体をのびのびと伸ばして横たわるの意。「眠も寝らめやも」は、眠ることができようか、眠れはしまい、今は亡き草壁皇子の昔のことが思われて、の意。

二首目、「炎」はここでは東の空に輝く曙の光のことか。反歌四首の中でもとくに名高い歌である。東の方の野にあげぼの光がさしそめるのが見えて「かへり見すれば月傾きぬ」振り返ると月はずでに西の山の端に入ろうとしている、いよいよ御狩の朝を迎えたのだと、緊張の中に壮大な自然が見事に詠まれている。

三首目、日並皇子は御父、草壁皇子のこと。「馬並^なめて」は馬を並べて、「来向ふ」はまさに目の前にやって来るの意。歌は「亡くなった皇子がすぎし日に馬を並べて御狩に出発された、その時刻が今やってくる」の意。そのはりつめた緊張感が父子お二人の狩の場面に重ねあわせて表現されている。

淡海あふみの海夕波うみゆふなみち千鳥どりな汝なが鳴なげば情こころもしのに古思いにしへほゆ(二六六)

天離あまざかる夷ひなの長道ながぢゆ恋こひひ来きれば明石あかしの門かどより大和やまと島見しまみゆ(二三五)

小竹ささの葉ははみ山やまもさやにさやげどもわれは妹いも思おもふ別わかれ来きぬれば(二三三)

一首目、「淡海あふみの海」は琵琶湖のこと。「夕波ゆふなみち千鳥どりな」は夕波の立つところに千鳥が飛び交っている状態で、人麻呂の造語という。千鳥よ、お前が鳴くと「情こころもしのに」心もうちしおれて、栄えた昔のことが思われることだと、今は廢墟はげきよとなった天智天皇の都・近江大津宮おうみおおつのみやの址あとで、かつての盛時を偲おもんでいる。

二首目、「羈旅たひの歌八首」と題詞だいしにある中の一首。「天離あまざかる」は空遠く離れているの意味から「夷あふみ(辺境の地)」にかかる枕詞。「都を遠く離れた辺地からの長い道のりをひたすら都を恋しく思おもいながらやって来ると、明石の海峡からあの懐かしい大和の山々が見えることだ」の意。人麻呂は明石海峡から望む東の方、金剛、葛城の連山を「大和島」と呼んだのであろう。その大和がやうやく近くなつたよろこびが、はずむような調べで詠まれている。

三首目、「石見国いわみのくにより別れて上り来る時の歌」という長歌に続く反歌二首の中の一首。この題詞は人麻呂が石見の国に赴任していた官吏であることを物語っている。「み山もさやに」は、山

全体がざわめくばかりにの意。「笹の葉は風にそよいで山全体がざわめいているが、そのざわめきの中でいま別れてきた妻をひたすら思っている」という切迫した表現である。「さ、さのははみやまもさ、やにさ、やげども」と繰り返す「さ」の音の美しさも心に残る。

高市黒人たけちのくろひと

古いにしへの人にわれあれやささなみの故ふるき京みやこを見れば悲しき(三三)

櫻田さくらだへ鶴鳴たづき渡る年魚あゆち市がたしほ潮干しほひにけらし鶴鳴たづき渡る(二七二)

高市黒人の生没年は不詳だが、持統天皇・文武天皇の頃の歌人。柿本人麻呂よりも少し遅れて出仕したといわれている。「万葉集」に収められた十八首はすべて旅の歌で、印象鮮明、格調の高い自然詠を特質としている。

一首目は「近江おうみの旧堵きゆうとをい感傷たみて作る歌」の題詞で詠まれた二首の中の一。首。「旧堵」は旧都の意。「古の人いにしへのひとにわれあれや」の「や」は反語で、自分は古の人なのだろうか、そうでないの意。近江の京きやうが栄えた昔の人であるかのように、荒れた都のあとを見ると悲しいことだ、と壬申の乱以降さびれた天智天皇の都のあたりの様子をしみじみと詠んでいる。「ささなみ(楽浪)」は琵琶湖の西南の沿岸一帯の地名。

二首目、「櫻（桜）田」は現在の名古屋市南区桜台町のあたり。「年魚市潟」も、桜田近くの低地帯で、昔は入り海であった。「潮干にけらし」は、潮が引いたらしいの意で、潮が引けば餌を求め鶴が舞い集う。歌は「年魚市潟の潮が引いたようだ、桜田の方へ鶴が鳴きながら渡っていく」の意。「鶴鳴き渡る」が二句と五句で繰り返されていて、大空をよぎる鶴の羽ばたきが聞こえてくるような忘れがたい一首である。

志貴皇子

葦あしべ辺へ行くく鴨かもの羽はがひに霜しも降ふりて寒ふき夕ゆふべは大和やまとし思おもほゆ（六四）

石いはばしる垂たる水みの上のさ蕨わらびの萌もえ出いづる春はるになりにけるかも（二四一八）

志貴皇子は天智天皇の皇子、奈良時代最後の第四十九代・光仁天皇こうにんの父君。み子、湯原王ゆはらののおおきみとともに和歌にすぐれ、とりわけ自然観照けんしょうに秀ひいでた歌を詠み『万葉集』に六首が収められている。

一首目は慶雲三年（七〇六）九月、文武天皇が難波の宮みやに行幸みゆきされたときの歌。「葦辺行く」は葦の茂さかっているあたりを行くいの意。「羽がひ」は左右の羽の、たたんだときに重なる部分。難波の海（大阪湾）一帯は葦が茂さかっていることことで知られていたが、その葦の茂さかっているあたりを行く鴨の翼つばさに霜しもが降ふって寒ふい夜よは、妻つまを残のこしてきた大和の国くにがしきりに思おもわれることよ——。旅たびに出

ると誰しも心は家郷に向くのだが、まして霜の降りる寒い夕べはなおさらであろう。その細やかな情景の描写は美しい。「大和し」「思ほゆ」と四、四で八音の字余りとなっていて、望郷の深い思いが伝わってくる。

二首目は、『万葉集』巻八の冒頭の歌で、「志貴皇子の懽の御歌一首」という題詞が付けられている。「石ばしる」は岩の上をほとばしり流れるの意。「垂水」は滝のこと。巻頭の歌にふさわしく、冬籠りの生活からようやく春を迎えて、早蕨が芽を出す春になったことよという歓喜の表現である。滝のしぶきにぬれた早蕨の印象が鮮やかである。

第四十三代・元明天皇

ますらをの鞆の音すなり物部の大臣楯立つらしも(七六)

元明天皇は天智天皇の第四皇女(草壁皇子の妃、文武天皇・元正天皇の母)。このお歌は元明天皇の即位礼または大嘗祭における様子をお詠みになったものなど諸説があるが、ご即位三年後、和銅二年(七〇九)の三月には蝦夷反乱のため派兵のことあり、その頃の張りつめた時代背景もあわせて考えるべきであろう。

「鞆」は弓を射るとき左の臂に巻いて、弦が当たるとを防ぐようにしたもの。「鞆」に弦が当たって発する音を「鞆の音」という。「大臣」は將軍、「楯立つらしも」は楯を立てているらしいの

意。物部の大將軍が楯を立てて陣容を整えているらしい、勇士たちの「鞆の音」が聞こえてくることだという緊張した情景が詠まれている。

女帝ながらに国の運命を担われた毅然とした心が「鞆の音すなり」と「楯立つらしも」という力強いお言葉に偲ばれる。天皇のご治世ではその翌年、和銅三年には藤原京よりもさらに大きい堂々たる都城「平城京」が営まれ、和銅五年には『古事記』が完成するという目覚ましい国力の充実が見られた時代であった。

東歌

多摩川に曝す手作さらさらに何ぞこの兒のここだ愛しき(三三七三)

信濃なる筑摩の川の細石も君し踏みてば玉と拾はむ(三三〇〇)

恋しけば来ませわが背子垣つ柳末摘みからしわれ立ち待たむ(三四五五)

柵越しに麦食む小馬のはつはつに相見し子らしあやに愛しも(三五三七)

東歌とは東国の国風(諸国の風俗)の歌の意である。東国の民によって口誦されたからである

うか、野趣豊かで素朴な調べが忘れがたい。「万葉集」巻十四の全体が東歌二百三十首で成り立っている。東歌の「東」は東海道の遠江国（とむとうみのくに）（静岡県西部）以東、東山道の信濃国（しなののくに）（長野県）以東のあわせて十二カ国の地域である。

一首目、「手作り」は手織りの布のこと。「曝す手作り」のサラが「さらさらに」の序詞となっている。「さらさらに」はさらにさらに、「何ぞこの兒のここだ愛しき」はどうしてこの娘（むすめ）がこんなに愛（いと）しいのだろうかの意。多摩川で手作りを晒（さら）す作業を詠んだ労働歌であろう。多摩川は奥多摩に発して東京都と川崎市の間を流れ東京湾に入る川。

二首目、「筑摩の川」は千曲川（ちくまがわ）。長野県を流れ犀川と合流したのち、新潟県に入って信濃川となり魚野川をあわせて日本海に注ぐ。歌は「信濃の千曲川の小石も、あなたがお踏みになったら、玉（宝石）として拾いましょう」の意。石にも魂（たま）が宿ると信じられていた素朴で懐かしい古代の人々の心にふれる東歌ならではの世界である。

三首目、「恋しけば」は恋しいなら、「背子」はあなた。「垣つ柳」は垣根の柳、「末」はその柳の伸びた枝先のこと。「私を恋しいと思つていただくならおいでくださいませ。私は垣根の柳の枝先を枯れてしまうまで摘みつけて、お待ちいたしましょう」という激しい恋の歌である。

四首目、「はつはつに」はほんのちよつとの意で、小馬が柵越しに麦を「ほんの少し」食べるように、ちよつと会つたあの娘が、「あやに」たとえようもないほど、「愛（かな）しも」いとおいしいことだ——。麦を食む小馬のしぐさが生き生きと描かれていて、農村を背景にした恋愛の一コマが忘れがたい。

二——奈良時代

和

銅三年（七一〇）平城京（奈良）に都が営まれてか

ら長岡京（京都府乙訓郡）に都が移されるまで七十年あまりを奈良時代といえます。奈良時代といえ、すぐ思いだすのはあの、奈良東大寺に代表される絢爛たる天平文化でしょう。聖武天皇の発願によってつくられた東大寺の大仏、毘盧遮那仏、それは仏恩を天下にあまねく及ぼそうとする、壮大なスケールで営まれた国家的な大事業でした。その文化史的な意味は、東大寺の正倉院に収められている聖武天皇のご遺愛の品々が、唐はもとより西域（中国西方、天山山脈地方の国々）からギリシャ・ローマにつながるものまで含まれていることによつて確かめられるのです。しかしその背景には明日香時代から始められた遣隋使、遣唐使にかかわってきた、無数の人々の、世界に類を見ない、文字どおり命をかけた大陸文化の摂取のための民族的国家的努力があったことを忘れてはいけません。

ではこの時代の国の力の根源はどこから来たのか。それと思うとき、すぐ浮かんでくるのは、前期から進められてきた「古事記」と「日本書紀」という二つの歴史の書物が

この時代のはじめに完成されたことです。それはいづれも国の成り立ちを「天地の初め」から説き起こした壮大な歴史であつて、人々に日本国民としての強烈な自覚を促したに相違ありません。従来の「倭」という言葉の代わりに、「日本」という国号を誇らしく使いはじめたのもこの時代でした。この国民的自覚と、あの天平の華やかな文化は不可分の関係にあつたのです。

こういふ時代背景の中で「万葉集」は第三期、第四期を迎え、和歌の世界で文字どおり「天平の華」を咲かせたのです。第三期の中心的な歌人は山部赤人、大伴旅人、山上憶良、そして第四期は旅人の子、長歌、短歌をあわせて四百八十首の歌を残した大伴家持でした。しかしとくに注目すべきことは「万葉集」を構成しているのはそのような歌人だけではなかつたということ、名もない人々の歌、とりわけ東国の庶民たちの歌が「万葉集」巻十四の「東歌」をうけて、さらに「防人の歌」の中に数多く残されていることとです。遠い奈良の時代に、私たちの祖先はこのような奥深い文化を培っていたのです。

第四十五代・聖武天皇

大夫ますらをのゆくといふ道ぞおほろかに念おもひてゆくな大夫の伴とも（九七四）

聖武天皇は光明皇后とともに深く仏教に心をよせられ、天平勝宝四年（七五二）、東大寺の大仏開眼を頂点とする絢爛たる天平文化をお開きになった。この御製は天平四年（七三二）、辺境の防備を強化するために東海道、東山道、山陰道、西海道にそれぞれ節度使（軍事をつかさどる役職）が派遣されたが、そのとき天皇が節度使に酒をお下しになってお詠みになった御製の反歌である。お前たちが今、節度使として赴任してゆく道はこの国の大夫（雄々しい男子）として託された重大な使命を帯びた道である。決して「おほろかに」なおざりな気持ちで、行つてはならない「大夫たちよ」と呼びかけ、お励ましになったお歌である。

聖武天皇といえばすぐ浮かぶのは国分寺、国分尼寺の創設であり、東大寺大仏造営のご事業であるが、その仏教一色と思われる時代のさなかに、国民精神の根幹ともいふべき、「大夫（丈夫）」という言葉が脈々として生きていたこと、しかもそれが天皇の御製の中に詠まれていることの意味は大きい。

聖武天皇には、この他伊勢行幸の折にお詠みになった「妹に恋ひ吾がの松原見渡せば潮干の渦かたに鶴たづなきわたる（一〇三〇）」という御製もある。「妹に恋ひ」は「妹に恋ふ吾れ」というつながりから「吾」の枕詞とされているが、この悠揚ゆたかとして迫らぬ一首にも天皇の豊かなご心情が偲おもは

れる。

光明皇后
こうりやうこうしう

わが背子と二人見ませばいくばくかこの降る雪の嬉しからまし(二六五八)

光明皇后は聖武天皇の皇后、仁慈の心篤く、飢えや病いに苦しむ人々のために悲田院(貧窮者、孤児などを救う施設)・施薬院(同じように貧窮者等に施薬、施療した施設)を設けられた。その皇后が、「わが背子(夫)」聖武天皇に深く心をよせて、「この降る雪」を二人一緒に見ることができればどんなにか嬉しいこととでしようと、あるがままのみ心を、何のかざりもなくお詠みになった歌。慈悲深いことで著名な皇后だけに、その内に秘められた初々しい心が偲ばれて忘れがたい一首である。

山部赤人
やまべのあかひと

天地のわかれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 不盡の高嶺を 天の
原 振り放け見れば 渡る日の 影もかくらひ 照る月の 光も見えず 白雲
も 行きはばかり 時じくぞ 雪は降りける 語り継ぎ 云ひ継ぎゆかむ

不盡の高嶺は(三二七)

反歌

田子の浦うらうち出でて見れば真白にぞ不盡の高嶺に雪はふりける(三二八)

み吉野の象山のまの木末にはここだも騒ぐ鳥の聲かも(九二四)

ぬばたまの夜のふけゆけば久木生ふる清き河原に千鳥しば鳴く(九二五)

山部赤人は『万葉集』第三期の代表的歌人。聖武天皇時代の宮廷歌人として、吉野、難波、印南野(明石・加古川)、紀伊などへの聖武天皇の行幸に従った折の歌が多い。

一首目の長歌は天と地がわかれた古からの富士の姿を大きなスケールで詠んだもの。「神さびて」は神々しい様子での意。「天の原ふり放け見れば」は大空にふり仰いで見ると、「渡る日の影もかくらひ」は太陽の姿も隠れ、「白雲もい行きはばかり」は白雲も(山の威厳に押されて)進むことをためらい、「時じくぞ雪は降りける」は季節に関係なくつねに雪が降り積もっている。この富士の高嶺の雄大な姿をいつの世までも語り継ぎ、言い継いでゆこう、の意。赤人をはじめ私たちの祖先は、駿河にそびえ立つ富士山に、日も月もその光をかくすほどの神性を感じて畏敬の念をこめてふり仰いでいたのである。

反歌の「田子の浦ゆうち出でて見れば」は、田子の浦を通つて広々と視野の開けたところに出てみると、意で、長歌とあわせて崇高雄大な富士山に驚嘆し、感動している赤人の心情が迫ってくる。

二首目と三首目は、神亀二年（七二五）夏五月、聖武天皇が吉野に行幸されたとき、詠まれた長歌に添えられた反歌。「ここだも」はたくさん、「木末」は梢。「吉野の象山の山間の静寂が、突然破れて、木々の梢に、多くの鳥が黒々と群れて鳴き騒いでいることだ」の意。三首目、「ぬばたまの」は「夜」の枕詞。「久木」とは「あかめがしわ」の古名。「しば鳴く」はしきりに鳴くの意。夜が更けて、いま、久木の生えている清冽な流れの川原では、千鳥がしきりに鳴いているという鮮やかな自然の描写が忘れがたい。

山上憶良やまのうえのおくら

いざ子ども早く日本へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ（六三）

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして俣はゆ 何処より 来りしものぞ
眼交にもとな懸りて 安寝しなさぬ（八〇二）

銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に如かめやも（八〇三）

士やも空しかるべき万代に語り継ぐべき名は立てずして（九七八）

山上憶良も『万葉集』の第三期の代表的歌人。

一首目、「山上臣憶良の大唐に在りし時、本郷を憶ひて作れる歌」との前書きがある。大宝元年（七〇一）、憶良（四十二歳）は、遣唐大使粟田真人に伴つて遣唐使少録として唐に渡つたが、その間に、則天武后の周王朝をめぐる争乱、新羅の朝鮮半島統一等の国際情勢の激動を体験して、本国に帰る。

歌は「さあ、みんな、早く、日本へ出発だ。われわれを送り出してくれた難波の御津の浜の松原が待っているぞ」の意。「大伴」は大阪から堺にかけての総称。「いざ子ども。早く日本へ。大伴の御津の浜松……」と三つに切れて、そのはずむような呼吸の中に、任務をまっとうして帰国する憶良の躍動する心が伝わってくる。なお原文では、「やまと」という言葉に、それまで使われていた「倭」に代わって、当時使われはじめた「日本」という誇りある字をあてているのも注目すべきであろう。

憶良は、神龜三年（七二六）、筑前守として大宰府（福岡県）に赴任したが、一首目の長歌と反歌は、その頃の歌。長歌は、子供が大好きな「瓜を食べては」子供たちのことが思われ、「粟を食べては」まして偲ばれる。「何処より来たりしものぞ（子供というものは、いつたどこからやっ

て来たのか」と親子の縁えんの不思議さに驚き、「眼交にもとな懸りて安寝やすみしなさぬ（夜になるとその面影が目先にしきりにちらついて、安らかに眠らせてくれない）」と結ぶ。反歌は、銀も金も珠玉しゆぎよくもどうして子供という宝に及ぼうかと、わが子への思いを強くうたいあげている。家庭生活に強い愛情を注いで生涯を終えた憶良の代表的な作である。筑前守の時代には、大伴旅人の妻の死を詠んだ「日本挽歌」（『万葉集』七九四〜七九九）や有名な「貧窮問答歌」（『万葉集』八九二〜八九三）をはじめ憶良の代表作の多くが詠まれている。

憶良は帰京の翌年七十四歳で世を去った。最後の三首目は、憶良の病が重く、明日知れぬ状態になったとき、見舞いに来た客人に対してお礼の言葉述べたあと、「涕なみだを拭ぬぐひ、悲しみ嘆いて、この辞世の和歌を吟じた、との前書きがある。死に臨んで、「男たるもの、名も立てず、このまま朽ちてよかろうか、否」という、烈々たる思いを詠んだ歌である。

大伴旅人
おおとものたびと

験しるしなき物を思はずは一杯ひとつきの濁れる酒を飲むべくあるらし（三三八）

我が園そのに梅の花散るひさかたの天あめより雪の流れくるかも（八三二）

妹いもと来こし敏馬みぬめの埼さきを還かへるさに独りして見れば涕なみだぐましも（四四九）

大伴旅人は大伴家持の父、山上憶良着任の翌年、神亀四年（七二七）、大宰帥（大宰府長官）として筑紫に赴任した。

一首目は、「何の甲斐もないもの思いにふけつたりしないで、一杯の濁り酒でも飲むべきである」の意。讃酒歌十三首の冒頭の一首。讃酒歌にはこの他「あな醜、さかしらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る（三四四）」と詠み、「賢そうにふるまつて、酒を飲まない人」を「あな醜」「猿にかも似る」と痛罵した歌もある。これらの歌は「妻」を思い、「子」を思う憶良とは対照的に「酒」を至上のものとして、その鬱屈した心情を詠んだ旅人独自の世界であった。

二首目、太宰府の長官であった天平二年（七三〇）正月十三日、部下を集めて盛大な梅花の宴を開き、三十二人が歌を詠んだ。この歌はそのときに詠まれたもの。庭に散る梅の花を「天より雪の流れくるかも」と、天から流れてくる雪に見立て、美しく詠んでいる。「ひさかたの」は天の枕詞。「天より雪の流れくる」という表現に旅人の感性が偲ばれる。

三首目、大宰帥になって、筑紫へ赴任したときは愛妻を同伴したが、妻は赴任直後、神亀五年（七二八）に他界する。天平二年十二月、旅人は帰京することになったが、旅も終わり近く、敏馬（神戸）の埒を通ったときに亡き妻を偲んで詠んだ歌。「九州に赴任する折、妻とともにながめた敏馬の埒を、都に帰る今、一人で見ていると自然に涙が流れてくることよ」の意。

奈良に帰った旅人はさらに三首の連作を詠んだが、その一首は「妹として二人作りし我が山齋は木高く繁くなりけるかも（四五二）」であった。「山齋」は泉水や築山のある庭園の意。九州

に行く前に妻と二人で造成した庭園が木高く繁っているのを見て、亡き妻を偲んで涙している。旅人は、この歌を詠んで八カ月後の天平三年七月、萩の花の咲く頃、妻のあとを追うように世を去った。

高橋虫麻呂

千万の軍なりとも言挙せず取りて来ぬべき男とぞ思ふ（九七二）

高橋虫麻呂は生没年不詳。藤原宇合の常陸守時代（七一九～七二四）にその部下として庇護を受けていたといわれている。宇合は不比等の第三子、藤原四家の中の「式家」の祖。

天平四年（七三二）、宇合が西海道の節度使として派遣されたとき、彼の出發を竜田（奈良県の西北）まで見送りにきた虫麻呂が、宇合に献呈した長歌に添えた反歌である。「言挙」はあれこれ言いたること。「あなたは、たとえ千万の軍勢であっても、あれこれ言わずに討ち取ってこられるにちがいない日本男児であると信じている」の意。

「言挙せず」とは私たちの祖先の信仰を表わした言葉で、私たちの祖先は「日本は神国である。一切を照覧する神があり、神慮にそむかない限り人々は榮えてゆく。すべて神慮のままにあるべきで、言葉に出してとりたてて言うべきではない。言葉には精霊が宿っている。多弁は慎むべきものだ」と信じていた。

遣唐使の母

旅人の宿りせむ野に霜降らばわが子羽ぐくめ天の鶴群（一七九二）

天平五年（七三三）、遣唐使が難波を旅立ったときに、使節の一行の母親が、わが子に贈った長歌に添えられた反歌である。「旅人が一夜をすこす野に霜が下りるなら、わが子を羽で包んで守ってくれよ、大空の鶴の群れよ」と旅行くわが子を思う母親の至情が詠まれている。

舒明天皇二年（六三〇）から平安時代の寛平六年（八九四）まで続けられた遣唐使派遣、それは大陸文化摂取のための、世界に比類のない壮大な国家的事業であったが、その営みの陰にこのよな歌が詠まれていたことも忘れてはならないと思う。

海大養宿禰岡麻呂

御民われ生ける験あり天地の栄ゆる時に遇へらく思へば（九九六）

天平六年（七三四）の作、「万葉集」には「詔に応ふる歌」という詞書が記されているだけ。聖武天皇の詔に応えた歌という以外、作者については一切不明であるが、「御民われ生ける験あ

り」自分はこの国の民として生まれてきた甲斐がある、と一気に詠みくだす、力に満ちた言葉の中に示された天皇の民として生きる誇りとよろこび、「天地の栄ゆる時」という壮大な視野、この「栄ゆる時」にたまたま生きている満ち足りた思いは強烈である。この一首のもつ雄渾な調べは聖武天皇を中心とした奈良時代がいかに力に満ちていたかを見事に表現している。

遣新羅使人の歌

武庫の浦の入江の渚鳥羽ぐくもる君を離れて恋に死ぬべし(三五七八)

わが故に妹嘆くらし風早の浦の沖辺に霧たなびけり(三六一五)

今よりは秋づきぬらしあしひきの山松かげにひぐらし鳴きぬ(三六五五)

『万葉集』巻十五の前半は、天平八年(七三六)、新羅に遣わされた阿倍朝臣継麿以下、使人たちや旅立つ夫を思う妻たちの歌など百四十五首によって構成されている。

一首目はその巻頭に置かれた、旅立つ夫への慕情を詠んだ妻の歌。「武庫の浦」は難波の港から出てゆく船が最初に通過する武庫川の河口あたり。その洲にいる鳥のような私は、「羽ぐくもる君を離れて」羽根で包むように大切にしていたあなたから離れて、今は恋いこがれて死

んでしまいうだという意。

二首目の「風早の浦」は広島県の安芸津町の海岸、「わが故に妹嘆くらし」私の旅先を気づか
つて妻が嘆いているらしい、沖の方に霧がたちこめているのを見ればの意。この歌は作者は違
うが、船が難波の港を離れるときに、使人の妻が詠んだ「君が行く海辺の宿に霧たたば我が立ち嘆
く息と知りませ（三五八〇）」あなたが旅行く海辺の宿りに霧が立ったら、それは私があなたを慕
つて嘆く息だと思つてください、という別離の歌に照応する。古代の人には人々の息づかいほそ
のまま大自然の呼吸に通うものだったのである。

三首目は「筑紫の館に至りて、本郷を遥かに望み、懐愴みて作る歌四首」の中の一首。年内に
都に帰り着くはずだったこの旅も、予想をはるかに越えて「今よりは秋づきぬらし」筑紫の国に
ついた今はもうすっかり秋になってしまったらしい。「あしひきの」は「山」の枕詞、山裾やますその松
かげには「ひぐらし」が鳴いている——。しみじみとした旅情を感じさせる一首である。だが、
この一首にも察せられるようにこの一行には海難や伝染病などの苦難が重なり、大使はその翌年
帰途、対馬で死去。新羅との外交も困難を極めた、つらい旅だったことも、この一連の歌を読む
ときに心にとめるべきことであろう。

狭野茅上娘子きののちがみのおとめ

君がゆく道の長手を繰り畳ね焼きほろぼさむ天の火もがも（三七二四）

作者は宮中の雑用に從つた低い身分の女性であつたが、中臣宅守なかとみのかみもりとの許されない結婚によつて、宅守は越前(福井県)に流罪になつた。『万葉集』の巻十五の後半には、こうして引きさかれた二人が「おのおのいた 各々慟ム情ヲおもひ陳ベテ贈答スル歌六十三首」として残されている(うち、娘子の歌は二十三首)。この歌はその二首目に収められたもの。あなたが流されておいでになる長い長い道を手繰りよせ、畳みかさねて焼きほろぼしてしまふ、そんな「天の火」がないものか。そのような「天の火」があれば、あなたとの隔たりはたちまちに消えて、今すぐにもお目にかかることもできやうものを、という激しい恋の歌である。

この他、娘子の著名な歌として「ひしきた 帰りける人來れりと云ひしかばほとほと死にき君かと思ひて(三七七二)」という激しい思いを詠んだ歌もある。「ゆる 赦されて帰つてきた人が到着したと聞いて嬉しさのあまり、危うく死ぬところでした。あなたかと思つて」という激情も先の歌と同じこの作者ならではの世界であらう。

たちばなのもろえ
橘 諸兄

降る雪の白髪しろかみまでに大君おほきみに仕へまつればたよと貴くもあるか(三九三二)

天平十八年(七四六)の正月の大雪の日、橘諸兄たちばなのもろえが太上天皇だいにじょう(讓位された天皇。第四十四代・元正

天皇のことの御所に参上し、雪掃きの奉仕をして酒をいただいたときに詠んだ歌である。「降る雪の」は眼前の景を用いた「白髪」の枕詞、真つ白な髪になるまで大君にお仕えすることのできたことを思い、その畏さ、尊さを披瀝した歌である。雪が豊年のしるしとしてめでたいものとされてもあわせて読むべきであろう。

橘諸兄はそれより十年前、皇族より臣籍に降下、「橘」の姓をいただいたが、そのとき聖武天皇から「橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいや常葉の樹（二〇〇九）」橘は、実も花もその葉までも、枝に霜が降っていいよ栄えるめでたい木である、という御製一首を拝受、天皇のご信頼がとりわけ篤かった。この歌にはそのような歴代の天皇の民心にお応えする忠誠の思いがあふれている。なお後世、吉野朝の忠臣、楠木一族はこの橘氏の後裔であったといわれている。長い歴史を貫くこの一筋の道統の意味は大きい。

おおとものやかもち
大伴家持

春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげに鶯鳴くも（四一九〇）

わがやどのいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも（四一九一）

うらうらに照れる春日に雲雀あがりこころかなしも独りし思へば（四一九二）

劍太刀つるぎたちいよよ研ぐべしいにしへ古ゆみや清けく負ひて来にしその名ぞ(四四六七)

大伴家持は大伴旅人の長男。「万葉集」第四期の代表的歌人。若くして聖武天皇の内舎人(うどねり)（朝廷の宿直や雑役に従事し、行幸の警護を行なう職）として奉仕したが、天平十八年（七四六）に越中(えつちゅう)守に任ぜられ、五年間の在任中、越中（富山県）の名山、立山を詠んだ長歌「立山の賦（四〇〇〇）」をはじめ、その風土、山川草木を生き活きとうたいあげている。

最初の三首は家持がその越中から少納言となって都に戻ったのちに詠んだもの。その中のはじめの二首は天平勝宝五年（七五三）二月二十三日の作。一首目、霞がたなびいている春の野、そのうらがなしい夕日の光中で鶯の声を聞いた家持は、二首目で、わが家の裏の小さい竹林にかすかに聞こえる風の音を淋しく聞いた。続いて二十五日に三首目を詠み、陽射しがやわらかでのかな春の野の空にあがって鳴く雲雀の声を聞いたもの悲しさを「こころかなしも」と詠み、己れの孤独な心を重ねあわせている。「いささ」は小さい、「かそけき」はかすかな。その繊細な美しい表現は数多い家持の歌の中でもとくにすぐれた代表的連作といえよう。

家持はその後、天平勝宝七年、兵部少輔(ひょうぶのしょうぶ)（軍事をつかさどる役所の次官）として難波に赴き防人の編成に携わり、「万葉集」に数多くの防人の歌をとどめたことは有名である。

四首目は、「大伴氏が先祖代々負ってきた、天皇の内兵(うちのいくさ)（天皇の側近に仕えた兵）としての誇りを忘れずに気をひきしめて備えを怠るな、武門の象徴である劍太刀を研ぐべきである」の意。天

平勝宝八年（七五六）五月、聖武上皇が崩御後まもなく、大伴氏の有力者、古慈悲が朝廷を誹謗したという罪で解任された。危うく難を免れた家持であったが、家持には、天忍日命、道臣命以来弓矢をもって朝廷に仕え、人も知る武門の家であるという大伴一族の伝統に対する誇りがあった。家持は、大伴一族の氏上としての責任感から「族（一族のもの）を喩す歌（長歌。四四六五）」を詠んだが、この歌はその反歌二首のうちの一首である。

その後天平宝字二年（七五八）、家持は因幡守に任ぜられる。その因幡国庁（鳥取県国府町）で、翌天平宝字三年正月一日、国司や郡司たちとの宴で家持は、「新しき年の始めの初春のけふ降る雪のいや重け吉事（四五二六）」新年のはじめに降りしきる雪のように吉いことが続いてほしい、と詠み、この一首を最後として『万葉集』は幕を閉じたのである。政治にも軍事にも大きな功績を残すことができなかった家持であったが、その名を不朽にしているのは『万葉集』である。彼は『万葉集』の編集者と考えられており、『万葉集』の全歌数約四千五百首のうち、彼の歌は四百八十首を数え、最多作者であった。

大伴氏の「言立て」

海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大君の 辺にこそ死なぬ 顧みは
うみゆ しみず しかばね やまゆ ぐさむ しかばね おほきみ へにこそしなぬ かんみは
せじ（長歌の一部・四〇九四）

天平二十一年（七四九）、陸奥国みちのくのくにで発見された黄金が東大寺の大仏に塗るべく献上されたとき、聖武天皇はたいへんおよろこびになり、四月一日、宣命せんみょう（和文体で宣布された天皇のお言葉）を發せられ、その中に大伴氏とその支族佐伯氏さきの祖先せんぞ以来の忠義を称えられ、大伴氏の「言立て」（祖先から守り続けてきた誓いの言葉）を引用された。大伴家の長であった家持は、これに感激して「陸奥国より金を出せる詔書みことりのことばを賀ぐ歌」を詠み、その中に、この「言立て」を歌いこんだのである。最後の一句は、宣命では「長閑には死なじ」となっていたのを、家持が「顧みはせじ」と改作したもの。

「海を行けば水漬く（水にひたる）屍、山を行けば草の生す（草の生える）屍となつても、大君のお側そばで死にたい。後ろを顧みるような卑怯なことはすまい」の意。それは大伴氏と佐伯氏の先祖以来の誓いであった。もともと、天皇の親衛軍として戦つた大伴氏一門には、時代が下つても、新羅との戦いで戦死した大伴談かたりのむらじ、連など多くの人たちが、海に、山に戦死した長い歴史がある。その間に忠誠を尽くしてきた大伴氏を貫いた信念がこの「言立て」であった。

家持は延暦四年（七八五）に没したが、同年に起きた藤原種継暗殺事件との関係があつたとして、一説によればその遺骨は息子永主ながぬしとともに隠岐に配流になつたという。大同元年（八〇六）になつて、本位の従三位に復したが、その生涯は波乱に富み、まさに「海ゆかば水漬く屍」、先祖代々の「言立て」そのままの生涯を終えたのである。

防人の歌

父母も花にもがもや草枕旅は行くともささごて行かむ(文部 馬當・四三三五)

大君の命かしこみ磯に触り海原わたる父母を置きて(文部 造人麻呂・四三三八)

忘らむて野行き山行き我来れどわが父母は忘れせぬかも(商長 首麻呂・四三四四)

父母が頭かき撫で幸くあれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる(文部 稻麻呂・四三四六)

葦垣の隈処に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしぞ思ほゆ(刑部 直千國・四三三七)

防人は日本の辺境を防備する兵士で、天智二年（六六三）、百済救援軍が白村江で大唐の船軍に敗れて以来、増大した半島からの脅威に対し、筑紫、壱岐、対馬等に配置され、諸国の軍団から三年交替で派遣されたが、とくに勇武をもって鳴る東国の若者がこれにあてられた。『万葉集』巻二十に載っている防人の出身地は、現代の静岡県、長野県以東、遠く関東の全域に及ぶ。防人たちは故郷へ帰る保証もなく、出征していった農家の若者たちであった。彼らははるか東国から徒歩で難波に集結し、さらに船で瀬戸内海を渡って筑紫、壱岐、対馬等に向かうというつらい旅

の苦しみに耐えて国家防衛の前線に赴いたのである。「万葉集」に防人の歌として収められているのは、卷十四に五首、卷二十に九十三首、計九十八首である。

一首目の「父母も花にもがもや」とは、父母が花であつたらいいのになあという願望の意。

「草枕」は「旅」の枕詞。「ささごて」は「ささげて」が訛なまつたもので、その花をしっかり手にもつていくのの意である。防人の歌には東国の方言が直接使われている。

二首目の「磯に触り」とは、磯から磯へと伝いながらで、父母を故郷に置いて磯を渡り、海原を渡つて来たことだの意。彼らは、父母を残し、天皇のご命令に従つて、決然として、難波から筑紫に船で渡つて行ったのである。

三首目の「忘らむて」は忘れようとしての意。あまりのつらさにいつそ忘れてしまいたいと思つて旅を続けてきたが、どうしても父母を忘れることはできない、の意。

四首目の「幸きくあれて」は「さきくあれと」の訛り。頭をなでながら父母が「元気でいろよ」と言つた言葉が忘れられないと詠んでいる。これまでの四首、すべていじらしい少年兵の姿が浮かんでくる。

五首目は家を出立する際の歌。「葦垣くまどの隈くまどに立ちて」は葦でつくつた垣根の奥まったところでひっそりと立って、「吾妹子」は妻あるいは恋人、「袖もしほほに泣きしぞ思ほゆ」は袖もしぼるばかりに濡らして泣いた姿が思いたされることだ、の意。

いずれの歌も何の解釈も必要としない。防人たちの悲痛な情意が、千数百年を経てなお私たちの胸を打ち、純朴で健康な農家の若者たちの姿を彷彿ほうふつさせる。東国特有の訛りがかえつて生々し

く迫ってくる。

筑波嶺のさ百合の花の夜床にもかなしけ妹ぞ昼も愛しけ(大舎人部千文・四三六九)

あられ降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍にわれは来にしを(同右・四三七〇)

けふよりはかへりみなくて大君の醜の御盾といでたつわれは

(今奉部与曾布・四三七三)

韓衣裾にとりつき泣く子らを置きてぞ来ぬや母なしにして(他田舎人大島・四四〇一)

一首目の「筑波嶺の」と二首目の「あられ降り」の作者は同一人物である。一首目で、ふるさとの筑波山に咲く百合の花のような妻と夜床に愛し合い、昼もかわいくて忘れられないと、遠い旅先で今のこのように忘れがたく妻を思慕している防人が、二首目では、武人の神である鹿島の神に祈って出征した、その日の決意を心の中でかみしめている。「あられ降り」は「鹿島」の枕詞。「鹿島の神」は常陸の国（茨城県）利根川の河口近くにある鹿島神社、現在の鹿島神宮。ここでは一人の防人の心の中にある、妻への思慕と出陣の決意と、まさに相反する激しい二つの思いが詠まれている。分けることのできない、しかも切実な人間の情である。この激しい二つの思

いが共鳴りしているところに、防人の切迫した真情が偲ばれる。

三首目の「かへりみなくて」は、心にかかることのすべてを振り払っての意。ここでも「大君の醜の御盾」天皇の強い御盾として出陣することであるという、ゆるぎない覚悟が詠まれている。四首目、「韓衣」は「着物」あるいは防人としての官服か。「置きてぞ来ぬや」とは、残してきてしまったことよ。「母なしにして」母もいないのにとあるが、この防人は妻をなくしてこれまでで男手一つで子供たちを育ててきたのだろう。「母なしにして」の一句が心にしみる。

覚悟して出征する以上、心のこりなく任務につきたい、それゆえに、父親、母親、妻、子供への思いを断ち切ろうとする。だが断ち切ろうとすればするほど、断ち切ることができない恩愛の情を心に深くいだいたまま、雄々しく旅立つ防人、そこに人間の切実な情愛と決意がそのままにうたいあげられている。

父母を慕い、妻子を恋い、故郷を思いつつも、その悲しみに耐えてたじろがず、瀬戸内海を渡り、筑紫へと、祖国防護の任に赴いた防人の悲痛な情意は、『万葉集』の巻二十に永遠の命として輝いており、巻二十の防人の歌全体が大連作であるとさえ思われるほど、一つの心が詠まれている。

阿倍仲麻呂

天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出し月かも

阿倍仲麻呂は留学生として養老元年（七一七）、吉備真備らとともに唐に渡り、当時、唐の詩壇の巨匠王維、李白らと交友を深めた。天平勝宝三年（七五二）、帰国しようとしたが、東南アジアに漂着。帰国を断念し長安の都で仕官して世を去った。この歌は帰国しようとして海辺で別離の宴を開いたときに詠まれたといわれている。「天の原ふりさけみれば」空遠く仰いでみると、今はるかな東の空に浮かんでいる月、あの月は遠い日にふるさと奈良の三笠山に出ていた月なのだと、望郷の思いを詠んだ歌。『古今和歌集』巻九に収められている。

佛足石歌

御足趾作る 石の響きは 天に到り 土さへ揺すれ 父母がために 諸人の
ために

釈迦の像をつくって礼拝する前の初期仏教では、釈迦の足跡を刻んでそれを崇拜の対象としていた。佛足石とはその佛陀の象徴としての足跡を刻んだ石である。奈良時代後半、天平勝宝五年（七五三）、天武天皇の孫、文室屋真人智奴かその母（あるいは夫人か）の追善のために佛足石をつくった。この歌はその折に人々が声を揃えて歌ったと思われる歌、二十一首の最初の歌である。いま私たちは父母や衆生の追善のために心をこめて佛足石を刻んでいるが、その功德が「天に

到り、土さへ揺すれ」天にも届き地もゆるがせよ、天地を感動せしめよ、という気持ちで詠んだ歌である。

この二十一首の歌の形式はすべて五七五七七の短歌型式のあとにもう一つ七言句が加わったもの。高鳴る心そのままに歌われたために、このような形になったのであろう。この形式は上代の歌謡の中に時折見られるが、とりわけこの佛足石歌が有名なために「佛足石歌体」といわれている。この二十一首の歌を刻んだ歌碑は奈良の薬師寺に現存して、当時の人々の息づかいを今に伝えている。

三——平安時代

奈良

奈良時代の末期、第五十代・桓武天皇のとき、政治が仏教と深く結びついた悪弊を断ち切るために、都が、はじめは長岡京に、さらに延暦十三年（七九四）、平安京（京都）に遷されました。こうして明治元年（一八六八）東京奠都まで一千年の都が営まれたのですが、その中で、文治元年（一一八五）、源頼朝が鎌倉で幕府を開くまでの約四百年間を平安時代といえます。

この時代の特色としてまず注目しなければならないことは、奈良時代とは異なった日本的な仏教の誕生でした。というのはこの時代のはじめ、天皇から庇護された最澄・空海が開いた天台・真言の二宗派は、奈良の諸大寺が新京に移ってくることを禁じられたということもあって、それぞれ都を離れた、比叡山と高野山という人里を離れた神々のしずまる山岳に寺院（延暦寺・金剛峯寺）を建てたのです。このような環境の中で人々の宗教感情はこれまで以上にこまやかな、自然の中に溶け込んだものに深められていったように思われます。

こうして平安時代の文化は新たな展開を示すのですが、

その初期は奈良時代に続いて唐風の文化が盛んでしたし、詠まれた歌も最初の勅撰詩集「りょううんしゅう凌雲集」をはじめ漢詩が主流でした。しかし平安時代のはじめ、漢字の扁や旁を略して簡単にした「片かな」や、漢字の草書体から生まれた「平かな」が広く用いられるようになって、国文学隆盛の基盤がつくられ、醍醐天皇の延喜五年（九〇五）、「かな文字の序文」をもつ初の勅撰和歌集「古今和歌集」が完成したのです。これを契機にして国文隆盛の基盤がつくられ、さらにこのかな文字を使うのが女性だったこともあって、女性が文学の世界を担うことにより、こまやかな女性的な感情が文学の主流をしめて、その線上に清少納言の「枕草子」や紫式部の「源氏物語」という、世界に誇る大作が生まれてきたのです。こういう女性的な、自然や人間に対するつましい接し方、それは平安時代も終わりに近づいて、平家という武士の世になっても変わることはありませんでした。それは本書に収められている平忠度の二首の歌でもあきらかです。壇ノ浦における平家滅亡の場面にもそのような情感があふれるように感じられるのです。

第五十代・桓武天皇

此の酒はおほにはあらず平らかに帰りきませといはひたる酒

桓武天皇は奈良時代末期の、重くよどんださまざまな弊風を断ち切って平安に遷都。「山河襟たな帯た（山河がめぐりかこんでいる）自然の城」と称えられた京の地に、明治の御世を迎えるまで、じつに千年にわたる都を営まれた方であつた。

このお歌は延暦二十三年（八〇四）、遣唐使、藤原葛野麻呂の出発に際して、天皇が宴席たけなわ酣あにはあらず」この酒は普通の酒ではない、「平らかに帰りきませといはひたる酒」無事に帰つて来るようにとの祈りのこもつた酒であるという意味。平安遷都によつて新たな時代を迎えた最初の遣唐使に託した天皇の思いの深さが偲おもばれる。なおこの遣唐使船の中には最澄さいていと空海くうかいが乗り込んでいたのだが、そのことでも察せられるように、この使節団にはとりわけ新たな中国文化摂取の重大な使命が託されていたのである。

伝教大師
でんぎょうたいし

阿耨多羅三藐三菩提の仏たちわが立たつさまに冥加みやがあらせたまへ

伝教大師は僧最澄のこと。比叡山に延暦寺を創建、桓武天皇のご信賴が厚かった。唐より帰国ののち、天台宗を開く。

この歌は最澄が延暦寺建立こんりゆうのとき、み仏の擁護を祈った歌。「阿耨多羅・三藐・三菩提」の「阿耨多羅」とはこの上もない、「三藐」は正しい、「三菩提」は悟りの意。釈迦がブツダガヤの菩提樹の下で得た「最高の悟りの智慧」を得た仏たちよ、私がいま立っている柚山（木を切り出す山、ここでは比叡山）に冥加（目に見えないご加護）を与えていただきますように、という意味である。「阿耨多羅三藐三菩提の仏たち」以下、一気に詠みくだす力に満ちた表現の中に、作者のなみなみならぬ信仰の強さが読む人の心に迫ってくる。仏への信仰が和歌の形式をとった希有の歌である。

読よみ人びと知しらず

我が君は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりて苔こけのむすまで

『古今和歌集』の巻七「賀歌がの部」の最初に「読人知らず」として収められている。現在の国歌「君が代」のもととなった歌。「さざれ石」が巖いわおとなり、その巖に「苔のむすまで」いつまでも榮えてほしいの意。

ただ国歌とは初句が異なっているため、「我が君」は必ずしも天皇をさすとは限らないといわ
れているようである。しかし鎌倉時代初期の慈円じえんが手にした『古今和歌集』では「君が代」にな
っているし、賀歌の最初に置かれていることからみても、「千代に八千代に」以下の堂々たる詠
みぶりからしても、民間のある個人への寿歌とするのは無理で、やはりこの「我が君」も天皇を
さすと見るべきであろう。

このように名もない人によって詠まれた天皇に対する讃歌が平安の昔から伝えられ、それが現
在まで国歌として歌い継がれていることの意味は大きい。

おののこまち
小野小町

花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに

小野小町は第五十五代・文徳天皇もんてく、第五十六代・清和天皇せいわの頃の人。平安時代前期の代表的な
流歌人。恋の歌が多く、『古今和歌集』の序で、紀貫之きのつらゆきは「あはれなるやうにて、つよからず。
いはば、よきをうな（女）のなやめるところあるにいたり」と評している。六歌仙ろっかせんの一人。

この歌は「美しかった桜の花も降りつづく長雨のために、充分愛めでるいとまもないうちに、む
なく色あせてしまった」という表の意味と、「この身みがこの世で長く生き長らえてゆくうちに、
若い頃のあの美しかった容色も、すっかり衰えてしまった」という裏の意味が、重ねあわせられな

がら、もの憂い情感を美しく表現している。「ふる」は「降る」と「経る」、「ながめ」は「長雨」と、もの思いにふけりながら時をすごすという意味の「眺め」とが掛け言葉になつてゐる。

小町にはこの他、「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを（思いながら寝たのであの人が見えなかつたのさう、夢だとわかつていたなら目覚めなければよかつたのに）」「うたたねに恋しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき（うたたねに恋しい人を見てから、夢というはかないものも頼りにするようになったことよ）」などすぐれた恋の歌が多い。

ありつゝのなりひら
在原業平

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もとなげく人の子のため

在原業平は六歌仙の一人、平安前期の代表的歌人。第五十一代・平城天皇の孫。真情あふれる歌が多い。なお周知のとおり、業平の歌を中心とした伝えごとを集めたものに『伊勢物語』がある。

一首目は心をよせていた人がにわかになつて居を移され、天皇の妃となつて去つていった。その翌年の春、月の美しい夜、思い出の場所に行つて、「月のかたぶくまで、あばらなる（誰もいない、さ

びしい)板敷いたじきに伏せりて」という詞書ことばがきがある。「月も春ももう昔の月や春ではない、私の身だけふはもとのままなのに」の意。

二首目は老いた母親から送られてきた「古いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君かな(年老いてくれば避けられない「死別」という別れがあるので、いよいよあなたに会いたいことです)」という歌に応えたもの。「千代もとなげく人の子のため」いつまでもいつまでも生きていてほしいと願っている子供のために、「さらぬ別れのなくもがな」避けられない死別がなければどんなに嬉しいことか、ただ母上の長寿を祈るだけですという、親を思う心あふれる歌である。

紀貫之きのつらゆき

あすしらぬ我身とおもへどくれぬまのけふは人こそかなしかりけれ

「紀友則きのとものりが身まかりにける時よめる」という詞書がある。友則は貫之とともに日本最初の勅撰和歌集(天皇の命によって撰進された歌集)『古今和歌集』の撰者。その歌の世界で深く交わってきた友則が世を去ったときに詠んだ、心こもる追悼の歌である。「私は明日まで生き長らえることができるのかどうかかわからない、はかない身とは思いうけれども、まだこうして生きているうちは、人恋しさがしみじみと感じられる。まして今日はあの親しかった友、紀友則がこの世を去ってし

まった。その亡き友への思いがひとときわ身にしみることよ」という意である。友則は『小倉百人一首』の中の「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ（この光のどかな春の日にどうして、咲きはこつていた桜の花がこんなにあわただしく散っていくのだらう）」という歌を詠んでいる。

貫之は前述のとおり『古今和歌集』の撰者。平安初期の漢詩文の隆盛のため低迷を続けた和歌の世界に、新たな命をよみがえらせ、その後の和歌隆盛の時代を築いた歌人であった。とくに貫之の執筆にかかる『古今和歌集』の「仮名序」で、日本の中核を貫く「やまとうた（和歌）」は「花になくうぐひす（鶯）」も「みづにすむかわづ（蛙）」も、生きとし生けるものすべてが歌を詠むように、「ひとのこころ（人間の心の真実）をたねとして、よろづのことの葉」となったものである、だからこそ、そこにこめられた「まごころ」が、天地をも動かす、目に見えぬ鬼神をもあわれと思わせ、男女の仲をも和らげ、猛々しい「もののふ」の心を慰めることができるのだと、「やまとうた」の本質をあきらかにしたことは、和歌の歴史上、不朽の業績であった。

菅原道真
すがわらのみちまこと

東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな

山わかれとびゆく雲のかへりくるかけ見るときはなほたのまれぬ

菅原道真是第六十代・醍醐天皇（だいご）の延喜元年（えんぎ）（九〇二）、左大臣藤原時平（ときげん）の讒言（ざんげん）によって右大臣の地位を追われ、大宰権帥（だいさいごんのそち）に左遷。その二年後、配所で没した。その流罪にあたっては、四面楚歌の中、宇多法皇（うた）（醍醐天皇の父君）だけが唯一の擁護者であったため、「流れゆくわれはみくづとなりはてぬ君しがらみとなりてとどめよ（流れゆく水の中の塵芥（ちりあくた）のようになってしまった私を、その流れを塞ぎ止める柵（しがらみ）となつて留めていたきたい）」という一首を法皇に差しあげ、法皇もまたそれに応えようとされたが、藤原氏の策謀によって遮られ左遷は決定したのである。

一首目はいよいよ出発のとき、道真が家に咲いていた、梅の花を見て詠んだ歌。東から吹いてくる風があれば、必ず花開いて遠い西の果て、九州の私のもとに「にほひおこせよ」その香りを送ってくれよ、あるじがいらないからといって春を忘れてはいけなさと、都との別離の悲しみを詠んだ歌である。『大鏡』には、幼ない者は別として、多くの子供たちは同行を許されず、「かたがたに（あれやこれやにつけて）いとかなしくおぼしめして（お思いになつて）」という言葉のあとに、この一首が記されている。第五句は『大鏡』に拠つた。『太平記』では「春なわすれそ」。

二首目は「朝、山から別れて飛び去つた雲が夕方にはふたたび帰ってくるのを見ると、自分もあの雲のように都に帰るときが来るだろうと頼みに思うことよ」の意。大宰府における望郷の歌である。

つれづれと空ぞ見らるる思ふひと天降りこむものならなくにあまくだ

ものおもへば沢の螢もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見るたま

和泉式部は平安時代中期、藤原道長を頂点とした藤原氏全盛の頃に生をうけ、数々の情熱にあふれた恋の歌は、それと表裏する宗教的な心情とともに読む人の心を打つ。なかでも第六十三代・冷泉天皇の皇子、敦道親王との激しい恋の歌は『和泉式部日記』に伝えられて有名である。

一首目は、恋い慕う人が「天降りこむものならなくに」空から降りてくるはずもないのに、ぼんやりと時をすごしていると、いつしか目はひとりてに大空に向いてゆくという意。かなえられないことのない恋へのあこがれと淋しさが美しく表現されている。

二首目は「男に忘れられてはべりけるころ、貴船にまゐりて、御手洗川に螢の飛び侍りけるを見て詠める」という詞書がある。貴船は京都の洛北、鞍馬にある貴船神社。御手洗川は神社に詣でる前に、手を洗い浄める川。その川辺に飛びかう螢、もの思いにふけているとその螢は「わが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る」私の体から離れていった魂ではあるまいかと思われる——。恋の苦しみのために魂が肉体から遊離する、その危うくゆらぐ心が詠まれている。

第七十五代・崇徳天皇^{すとしく}

ここもまたあらぬ雲居^{くもい}となりにけり空ゆく月の影にまかせて

虫のごと声たてぬべき世の中に思ひむせびて過ぐるころかな

保元元年（一一五六）、やがてわが国に武家政治が台頭してくる導火線になった保元の乱が起きたが、結果は崇徳上皇側の敗北に終わり、上皇は四国の讃岐（香川県）に遷られた。だが讃岐でのご生活は訪れる人もなく、三度の食事を差しあげる人がいるばかりだったという。その間、上皇は五部の大藏経^{だいざんきょう}を書写されたが、それを寺社に奉納することも許されず、讃岐ご遷幸^{せんこう}後七年にして崩御。王朝の世界から武家の世界へ、激動する時代の狭間を生きられた悲痛なご生涯であった。

この二首の歌はその悲劇的な晩年にお詠みになったもの。一首目は讃岐松山にお遷りになった上皇が、西へ西へと「空ゆく月の影にまかせて」移り行く月に身を任せるようにたどり着いたこの地、ここもまた「あらぬ雲居」思ひもよらない私の住まい、皇居になったことよとお詠みになった悲しみのお歌。

二首目も「私は秋の野にすたく虫のように声をたてて泣きたいのだが、それも許されず声を押しさえてむせび泣きながら日々をすこすことよ」というお嘆きのお歌である。

西行
さいぎょう

さびしさに耐へたる人のまたもあれな庵ならべむ冬の山里

古畑ふるはたのそばの立つ木にゐる鳩の友呼ぶ声のすこき夕暮

春風の花を散らすとみる夢は覚めても胸のさはぐなりけり

西行ははじめは北面の武士（院の御所を警護する武士）、二十三歳で出家、高野山を中心に修行。奥州、四国など隈なく旅を続け、しばらく伊勢に移住したこともあった。「願はくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月のころ（できることなら旧暦二月の十五日、釈迦入滅の日、しかも桜花の咲きにおう春のさなかに死にたい）」というのも西行の歌であるが、その願いのとおり、文治六年（一一九〇）二月十六日に示寂（有徳の僧が世を去ること）、七十二歳。保元の乱後、讃岐に遷られた崇徳上皇への思いが深かったことも特筆すべきであろう。

一首目は「さびしさに耐えて生きている人が他にいてほしい、同行の人がほしい、そういう人がいればその人と、この淋しい冬の山里で庵をならべて生きていきたいことよ」という意。「さびしさに耐へたる人」という言葉の中に作者の思いがこめられている。

二首目の「そば」は「岨そば」、崖になっているところ。「すごき」は荒こうりょう蓼とした淋しみしさ。「夕暮れどき、けわしい崖に立っている木で友を呼んでいる鳩の声がする」の意。友呼ぶ鳩はまた西行自身みづみの心でもあったのだろう。

三首目は「春風が花を散らす夢を見たあとは、夢が覚めても胸がさわぐことよ」の意。

なお西行が伊勢神宮で詠んだと伝えられている「なにごとのおはしますかはしらねどもかたじけなさになみだこぼるる（ここにどなたがいらっしゃるかは知らないが、かたじけなさに涙が流れてく）」という歌は、一神教の世界では到底考えられない日本独自の美しい宗教感情、自然界のすべて、生きとし生けるものに神の存在を感じて生きていくという情感の表現として忘れがたい。

みなしものよりまき
源頼政

埋木うりきの花さくこともなかりしに身になるはてぞかなしかりける

作者は通称、源三位入道頼政。治承四年（一一八〇）、高倉宮以仁王を奉じて平家打倒のため挙兵、三井寺の僧兵とともに戦ったが敗れて、宇治平等院で自刃。これはその折に詠まれた辞世の歌である。

自分の生涯は「埋木の花さくこともなかりしに」埋もれ木のまま出世することもなく終わったが、「身になるはてぞ」その最期はさらに悲しいことであるよと「身」に「実」を重ねて生涯の

不運を嘆いている。「平家物語」ではこの歌に続けて、「これを最後の詞にて、太刀のさきを腹につきたて、俯ぶしさまに、貫ぬかつてぞ失せられける」と記してその最期を悼んでいる。

たいらのただのり
平忠度

さざ浪や志賀の都はあれにしを昔ながらの山桜かな

行きくれて木の下かけを宿とせば花やこよひの主ならまし

平忠度は平忠盛の子、清盛の弟。一首目は『平家物語』で有名な場面であるが、寿永二年（一一八三）、平家の都落ちのとき、忠度は途中から引き返して、かねてから師事していた藤原俊成のもとを訪れ、今後、勅撰（天皇の命による歌集の編纂）のことがあれば、この中から一首なりともお撰びいただきたいと、かねてから書きためていた歌巻を託した。その後、俊成が撰者となつた勅撰集『千載和歌集』に、当時は忠度が朝敵と見られていたため作者の名を出すことを憚つて「読人知らず」として採られた一首がこの歌である。

「さざ浪や」は「志賀」の枕詞、「遠い天智天皇の昔に営まれた志賀の旧都は荒れはててしまつたが、山桜は今も昔ながらに美しく咲いている」の意。「昔ながら」の「ながら」が近江の長良山の「ながら」に重ねて詠まれている。「故郷花」という題が記されているが、遠い万葉の時代

から詠み継がれてきた「志賀の旧都」を「心の故郷」として懐かしんだ歌であろう。

忠度はその後、一の谷の戦で戦死するが、最後までその箴（矢を入れて背に負うもの）に結いつけられていたのが二首目の歌である。「旅の途中で日が暮れて桜の木の下陰に宿るなら、花が今宵の主であろう、花が主人として私をもてなしてくれるだろう」と、桜の花につつまれて生涯を終わる幸せを詠んだ歌。題には一首目の「故郷花」と同じように「旅宿花」と「花」が入れられている。その最期については『平家物語』の「忠度最期」に詳しい。

『梁塵秘抄』

佛ほとけは常に在いませども 現うつならぬぞあはれなる 人の音ねせぬあかつき暁あけに ほのかに夢に見えたまふ

遊びをせんとや生まれけむ 戯たはぶれせんとや生まれけむ 遊ぶ子どもの声聞
けば 我が身さへこそ動ゆがるれ

『梁塵秘抄』は平安時代末期に民間に行なわれていた歌舞の芸能の歌詞を集成したものの。当時の民衆の息づかいが、そのまま私たちの心に響いてくる。編者は第七十七代・後白河天皇。法皇は源平の争乱のただなかにあつて生涯を終えられたが、このように名もない民衆の心に、深い関心

をおよせになつておられたのである。

一首目、「佛は常に在せども 現ならぬぞあはれなる」仏さまはいつもそこにいらつしやるのだが、お姿をお見せにならないのが身にしみて淋しい。だが「人の音せぬ曉に ほのかに夢に見えたまふ」静かな明け方の夢の中にほのかに姿を現わされることだという意。この歌詞には「常住仏身」「仏は目には見えないがいつもそこにおられるはずだ」という、法理を超えた民衆の心に直接に感じられる宗教的経験が見事に表現されている。

二首目は遊ぶ子供の声を聞いたときの心のときめきを「我が身さへこそ動ゆがるれ」、わが身までがゆらぐような気がするといひ、そう思えば、「自分は遊びをしようとしてこの世に生まれてきたのではあるまいか」とふと思うという意表をつくようなもの言ひに、当時の民衆が戦乱のさなかにあつても、いかに豊かな心をもつて生きていたかが偲おもばれる。

式子内親王しやくしうないしんのう

ながむれば思ひやるべき方ぞなき春のかぎりのゆふぐれの空

玉たまの緒をよたえなば絶えねながらへば忍ぶることのよわりもぞする

式子内親王は後白河天皇の皇女、幼くして齋院さいいん（賀茂神社に奉仕する未婚の女性）におなりにな

つたが、病により退任。その後、藤原俊成について歌道に精進、法然上人ほうねんに導かれて出家、平安末期の動乱の中を生きた代表的な女流歌人であった。

一首目は、いよいよ「春のかぎり」春が去ってゆく日の夕暮れ、はるかに空をながめながら詠まれた春との別離の歌。だが去ってゆくのは春だけではない。そこにはたとえば、かけがえのない人との別離の悲しみのようなものが重ねられているのではあるまいか。「ながむ」はもの思いに沈んでぼんやりものを見やるという意。

二首目の「玉の緒」は命。私の命は「たえなば絶えね」絶えるなら絶えてしまってもいい、これ以上生き長らえてゆけば、じっと耐えているこの気持ち弱ってしまつて、二人の間が人の目になつかかもしれない。そのようなことになれば、あの方がどんなつらい思いをなさることか、それを思えば私の命は絶えてもいいという、切迫した思いの表現。日本独自の、わが身を措おいて相手の幸せを願う「忍ぶ恋」の世界である。

四——鎌倉時代



源

頼朝によって鎌倉で幕府政治が始まった文治元年（一一八五）から、およそ百五十年後の元弘三年（一二三三）、幕府が倒れるまでを鎌倉時代といえます。律令国家が貴族の奢侈と無気力のうちに衰亡した頃、最初に政権をにぎったのは平氏でしたが、その後、さらに剛健な精神によって平氏を滅ぼしたのが源氏、その棟梁、源頼朝によって鎌倉幕府が成立するのです。しかし時を経るうちに、幕府政治は執権を世襲する北条氏が総轄するところとなり、承久の変（一二二一）において、三上皇を配流せしめるという、史上あるまじき暴挙のあと、政権はすべて幕府が握ることになったのです。

しかし、その頃、大陸では元（蒙古）が南宋を滅ぼし、さらに朝鮮半島の高麗を服属せしめ、わが日本に降伏を迫って、二度にわたって遠征軍を送ってきました。この困難に対しては挙国一致してこれに対処、龜山上皇はわが身を投げだして「敵国降伏」を伊勢神宮に祈願され、執権北条時宗の統率のもと、鎌倉武士は見事に戦って、神々の神助（神風）のもと、これを退けることができたのです。ユーラシア大陸を席卷して、全世界に空前の混迷をもたらしたモンゴルの嵐が、ついにこの日本にだけは上陸することができなかつた、そのことが、私たちにとってどんなに幸せだったことか。国内の体制に多くの問題があつたとはいえ、

それを乗り越えて国を守つた鎌倉武士の気迫を思わないではいられません。「武士道」という言葉がはじめて使われたのも、この鎌倉時代のことでした。しかし、その戦後の処理の不手際もあつて政情は混迷の度を深め、後醍醐天皇の蹶起された元弘の変（一二三二）によって幕府は滅亡したのです。

鎌倉時代の文化といえば、何といつても次々に現われて多くの人々に強烈な感化を与えた高僧の出現でしょう。法然・親鸞・栄西・道元・日蓮、その他にも梅尾の明恵などにそれぞれの高僧の人生を見る目の深さ、鋭さ、それが一挙に花開いた、まさに日本思想史のピークを示す、空前の宗教改革の時代でした。和歌の世界でもこの時代のはじめに後鳥羽上皇の院宣いんせんによって編纂された「新古今和歌集」が「古今和歌集」以来の「八代集」の最後の歌集として光彩を放っています。なおこの時代の歌集として忘れてはいけないのは、遠い鎌倉にあつて、独自の歌風をもつて、後世の正岡子規をして万葉以来の「千古の歌人」と絶賛せしめた三代將軍源実朝の「金槐集」です。実朝は鎌倉の鶴岡八幡宮の境内で甥の公暁こうせうによって暗殺され、二十八歳の短い生涯を終えるのですが、和歌におけるその業績は、明治の正岡子規と相応じて、歴史を貫く不滅の光を放っているのです。

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ

定家は藤原俊成の次男、鎌倉初期の代表的歌人。後鳥羽上皇のご信任厚く、和歌所の寄人となり、ついで『新古今和歌集』の撰者の中心として活躍。その後、將軍源実朝の知遇を得て、実朝に歌論書『近代秀歌』を贈った。

定家の没後、その子、為家のあとは二条家、京極家、冷泉家に分かれ、それぞれの歌風をもつて対立。消長はあったが室町時代の中期に至るまで歌壇をリードした。

この歌は『新古今和歌集』に収められたもの。この荒涼とした秋の海辺には、古来「自然美」の代表として大切にされてきた「春の花」も「秋の紅葉」もない。ただ見えるのは漁夫たちの苦葺きのわびしい小屋だけ。大きく広がった海辺の情景、その中の小さな海士の苫屋、しかしそこにこそ、これまで見逃してきた秋という季節のもつ美しい情感がある。平安にはなかった中世の美の世界、その新鮮な自然観が人々の心を打ったにちがいない。

なお『新古今和歌集』ではこの歌のすぐ前に、同時代の歌人、寂蓮法師の「さびしさは其の色としもなかりけりまさき（槇）立つ山の秋の夕暮」、西行法師の「心なき身にもあはれはしられけり鳴立つ澤の秋の夕暮」の二首が収められ、あわせて三首の歌は古来、秋の夕暮れを詠んだ名歌として「三夕」と称えられている。もって当時の人々が求めていた美意識を察することができよ

う。寂蓮の「其の色としもなかりけり」は、槇の木は常緑樹なので特別に秋の色を見せているわけではないが、何ともいいようのない、秋らしい情感が漂っている、という意。西行の「心なき身」とは世をのがれて現世の愛憎の心を捨てたわが身の意である。

源実朝 みなしこのちぢしも

ものいはぬ四方の獸すらだにも哀れなるかなや親の子を思ふ

いとほしや見るに涙もとどまらず親も無き子の母をたづぬる

時により過ぐれば民の嘆きなり八大龍王雨やめ給へ

大海の磯もとどろによする浪わかれて碎けて裂けて散るかも

山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心我があらめやも

源実朝は、頼朝の第二子。建仁三年（一一〇三）、兄頼家のあとを継いで鎌倉幕府の第三代将軍の座についたが、承久元年（一一一九）正月二十七日、鶴岡八幡宮の境内の銀杏の陰に身をひ

そめていた頼家の子、甥の公暁の手によって暗殺され、二十八歳という短い生涯を終えた。その歌集『金槐集』は、実朝が生まれた二十二歳のとき、建暦三年（一二二二）に編まれたといわれているが、後世、正岡子規から「人丸の後の歌よみ」と絶賛されて文学史上高い評価を得ているのは周知のとおりである（本書196頁参照）。

一首目は、詞書に「慈悲の心を」とある。「四方の獣すらだにも」は、あらゆる獣類でさえも
の意で、子を思う親の慈しみの心はじつに深いものだという感慨を詠んだもの。動物に託して、
「親はこれほどまでに子を思うことよ」と人間の親の子に対する愛の深さを詠んだのである。「哀
れなるかなや」という字余りの中に無限の思いがこめられている。

二首目は、詞書に「道のほとりに幼き童の母をたづねていたく泣くを、そのあたりの人にたづ
ねしかば、父母なむ身まかりにし（死んでしまった）」と答へ侍りしを聞きてよめる」とある。両親
を失った孤児に対する実朝の愛憐の情が強く迫ってくる。「いとほしや」という初句切れは、孤
児によせる心の叫びがそのまま言葉になったものだろう。

三首目は、建暦元年（一二二二）、実朝が二十歳の七月、大洪水が襲ったとき、実朝は、民の嘆
き、悲しみに心を痛め、ただひたすらに「八大龍王」（八体の護法の龍神）に祈った。「時により過
ぐれば民の嘆きなり」は、雨も降り過ぎれば民の嘆きとなるという意。八大龍王よ雨を止めてほ
しいと龍王を叱咤するごとき気迫のこもった、力強い調べの歌である。

四首目は、「荒磯に波の寄るを見てよめる」という詞書がついており、「とどろ」は轟きわたる
さまの意。寄せてくる怒濤の動きを、「われて」「砕けて」「裂けて」「散る」と克明にダイナミッ

クにとらえて詠みあげる力は、実朝の天性の表現力であろう。この雄渾な歌の中に、実朝の「心の嵐」を見、その「憂悶」を読みとつたのは、小林秀雄（「無常といふ事」）であつた。

五首目は、後鳥羽上皇の御書をいただいた折の、作者奉答の歌三首の中の一首である。「たとえ山が切り裂かれようと、海の水が干上がつてしまふことがあろうとも、天皇に対してどうして二心をもつことがありましようか」という意。「我があらめやも」という赤心を吐露した実朝の痛切な思いが迫ってくる。

この三首連作の一首目は「おほきみの勅をかしこみちちわくに心はわくとも人にいはめやも」で、「おほきみの勅をかしこみ」は、後鳥羽上皇の御書を拝読してその畏れ多さにの意。「ちちわくに」以下は、千千に湧き立つ思いは他人に語れるものではない、上皇のみ心をわが胸一つに収めるの意。ただひたすらに上皇のみ心にお応えしようとする実朝の忠誠心の表白であつた。

第八十二代・後鳥羽天皇

おく山のおどろが下もふみわけて道ある世ぞと人にしらせむ

我こそは新島守よ隠岐の海のあらきなみかぜこころしてふけ

後鳥羽天皇は、第八十代・高倉天皇の第四皇子。御年わずか四歳で践祚。十八歳でみ位を土御

門^{かど}天皇にお譲りになった。承久三年（一二二二）五月、上皇は、鎌倉幕府の実権を握っていた北条氏の専横に耐えがたく、ついに執権北条義時追討の宣旨^{せんじ}（天皇のお言葉を述べ伝える文書）を發して挙兵された（承久の変）。しかし、圧倒的な幕府軍の前に敗れ、隠岐の島に流され、都にお帰りになることもないままに、十九年後の延応元年（一二三九）、六十歳で隠岐の島で生涯を終えられたのである。後鳥羽上皇は、「千五百番歌合せ」をはじめ歌会や歌合せを盛んに催されたが、建仁元年（一二〇二）には、院御所に和歌所を再興。さらに藤原定家らに『新古今和歌集』の撰進^{せんしん}を命じられた。

一首目の「おどろ」は、イバラなどトゲのある灌木^{かんぼく}が乱れ茂っているところのこと。「おどろが下もふみわけて」とは、人として踏み行なうべき道を見失ってしまった、乱れきった今の世を自分の足で踏み分けてという意。「道ある世ぞと人にしらせむ」は、「まつりごと」が正しく行なわれる世界をこの世に実現したいという強いみ心と、それを国民に伝えようとされたご念願が迫ってくる表現である。

二首目は、隠岐における上皇の絶唱ともいうべき御製。「新島守」とは、隠岐の島の新しい島守のこと。「あらしなみかぜこころしてふけ」は、吹き荒れる波風よ、この私が島守^{しまもり}であることを心にとめて吹けよという意。上皇の隠岐配流はじつにお痛ましいことであったが、この御製には、悲運を嘆かれるような趣^{おもむき}よりは、むしろ、ご信念にもとづいて行動してこられたことへの自負と誇りすら感じられる威風堂々たる御製である。

第八十三代・土御門天皇つちみかど

吹く風のめにみぬかたを都としてしのぶもくるしゆふぐれの空

いそのかみふる野の花に言こととはむかかかなげきやありし昔も

土御門天皇は、後鳥羽天皇の第一皇子、わずか四歳でご即位、十六歳でみ位を弟君、順徳天皇じゆんとくにお譲りになった。それより十二年、承久三年（一二三二）、承久の変によって、父君、後鳥羽上皇、弟君、順徳天皇はそれぞれ隠岐と佐渡に流されておしまいになったが、土御門上皇はこのお企くわだてについては時節の至らぬことと諫いさめられ、挙兵に加わらなかつたためその沙汰はなかつた。しかし孝心厚い上皇は、自分から遠国うづに遷うつされるように強く求められ、土佐（高知県）の畑の地にお遷りになったのである。その後、阿波（徳島県）にお遷りになり、その地で崩御。三十七歳のご生涯であった。この二首の御製は、自ら配流をお求めになったという、ただならぬみ心を偲しのびつつ拝誦すべきであろう。

一首目は、暮れゆく空をながめながら、苦しい思いを胸に、吹く風のかなた「めにみぬかた（遠い空）」に都をお偲しのびになつたお歌。

二首目は、「かかかなげきやありし昔も」このようなつらい悲しみを昔の人は経験したことがあつたのだろうか、「ふる野の花に言とはむ」野辺の草花に問いかけられたお歌である。土佐

での御作。「いそのかみ」は「古る」の枕詞。

第八十四代・順徳天皇

百敷ももしきやふるきのきばの忍ぶにもなほあまりあるむかしなりけり

思ひきや雲の上をば餘所よそこに見て真野まのの入江いりえに朽ちくちはてんとは

順徳天皇は、兄君、土御門天皇のあとを継いでみ位におつきになったが、父君、後鳥羽上皇の皇権回復、幕府征討の方針に協力。戦い敗れたあと、佐渡に配流。天皇はとりわけ歌道にすぐれ、歌については「八雲御抄」、有職故実ゆうそくこじつ（朝廷などの古来の法令などについての学問）については「禁秘抄きんひしやう」などのすぐれたご著作がある。

一首目の「百敷」は宮中・皇居のこと。「ふるきのきば」はその荒れはてた皇居の軒端のきは、「忍ぶにもなほあまりある」は、その軒端に垂れている「忍ぶ草」を見るにつけても、昔の皇室の勢い盛んだった時代のことは思んでも思ひきれないほどであるとの意。皇室の衰えをお嘆きになったお歌である。「忍ぶ草」の「忍ぶ」に「思ふ」が重ねられている。

二首目は佐渡での御作。都からはるかに遠い佐渡の地で「雲の上をば餘所に見て」都をはるかなたに望みながら生涯を終えようとは夢にも思わなかったことよの意。

そのお歌のとおり父君、後鳥羽上皇が隱岐の地で崩御された三年ののち、仁治三年（一二二四）二、順徳上皇もまた佐渡の地で、遠く都に思いを馳せながらお亡くなりになったのである。お歌にお詠みになった「真野」がご火葬の地であった。

明恵上人
みょうえしやうにん

雲をいでて我にともなふ冬の月風やみにしむ雪や冷たき

山の端はにわれも入りなむ月も入れ夜な夜なごとにまた友とせむ

明恵は紀州（和歌山県）、湯浅ゆあきの生まれ。幼くして父、母を失い十六歳のとき京の高雄山たかお神護寺じんごじで出家、華嚴宗けげんを極め、後鳥羽上皇より京洛西方の梅尾山つがのおを下賜されて高山寺こうざんじを建てる。承久の変のとき、北条泰時を戒めた話いましは有名。純真にして熱烈な求道者であった。この二首は次の長文の詞書のあとに詠まれたものである。

「元仁元年（一二二四）十二月十二日の夜、天曇り月暗きに、花宮殿かきゆうでんに入りて坐禅す。やうやく中夜（真夜中）に至りて出観しゆつかんの後（座禅を終えて）、峰の房（花宮殿）を出でて下房（麓の部屋）へ帰る時、月、雲間より出でて光、雪に輝く。狼おほかみの谷にほゆるも、月を友としていとおそろしからず（それほど恐ろしくはなかった）。下房に入りて後、又たち出でたれば、月又曇りにけり。かくしつ

つ（このようにしながら）後夜（午前四時ごろ）の鐘の音聞ゆれば、又峰の房へ登るに、月も又雲より出でて道を送る。峰にいたりて禪堂に入らむとする時、月又雲を追ひ来て向の峰に隠れなむとするよそほひ（様子）、人知れず月の我にともなふ（伴う）かと見ゆれば」

一首目は「雲を出て私についてきてくれる冬の月よ、風が身にしみはしないか、雪が冷たくはないか」の意。二首目も「月よ、山の端に入って休みなさい、私も禪堂に入るから、また明日の夜会おう、親しい友よ」という懐かしい月への心をこめた呼びかけである。

なおこれらの歌は昭和四十三年（一九六八）、川端康成がノーベル賞を受賞したとき、記念講演「美しい日本の私」で紹介され、世界の人々に深い感銘を与えた。

第九十代・亀山天皇

ちはやぶる神のさだめむわが国はうごかじものをあらがねの土

世のために身をば惜しまぬ心ともあらぶる神はてらしみるらむ

弘安四年（一一八二）、元軍がふたび襲来するという報せに国内は騒然となった。山々寺々にお祈りが行なわれること数知れず、伊勢神宮にも「敵国降伏」の祈願のための天皇のお使いが発った。そのとき亀山上皇は、もしもこの日本の国が侵略されるようなことがあれば、自分の命を

お召しになっていただきたいと、身を投げだして国を護るべき決意を御自ら筆をとって願文がんもんにお示しになった。『増鏡』の記すところである。

一首目の「ちはやぶる」は靈力の盛んなの意で「神」の枕詞。神々のお力によってお定めになったわが国は、「うごかじものをあらがねの土」いかなることがあろうとも断じて動くことはない、この大地のように、という確信を披瀝されたお歌。「あらがねの」は「土」の枕詞。

二首目は、世のためには身をも惜しまぬ私の心を「あらぶる神はてらしみるらむ」激しい力で国を護ってくださいさる神々は、必ずや見守ってくださいさるにちがいないと、ゆるぎない確信をお述べになったお歌である。

龜山天皇にはこの他、「命にもかへばやとおもふ心をば知らでや花のやすく散るらむ（国家の安泰のためにはわが命にもかえたいと思う私の心も知らないで、花はどうしてこんなに容易に散ってゆくことであろうか）」という、散りゆく花に無限の思いをよせられた御製があるが、ここでも「世のために身をば惜しまぬ」という捨身しやしんのご決意を「命にもかへばや」とお詠みになっている。

冷泉為相れいぜいたいのすけ

これのみぞ人の国よりつたはらで神代をうけし敷島しきしまの道

冷泉為相は後鳥羽上皇側近の藤原定家の孫、歌人である。母は阿仏尼あぶつに、家領維持の訴訟で関東

に下ったときの『十六夜日記』で有名。歌は「この『敷島の道（和歌の道）』だけは他国から伝わることなく神代から伝わってきた日本独自の道である」という意。

『古今和歌集』以来「うた」とか「やまと歌」といつていたのを、「しきしまの道」といい代えたのは、『新古今和歌集』の和文の序がはじめてであろう。同序には、「この道は「色にふけり、心をのぶるなかだちとし、世をさめ民をやはらぐる道（それぞれ相聞・述懐・治世・愛民の意）」として今に至るまで絶えることなく続いているといっている。この道がわが国独自の道であるとは、『倭歌（やまと歌）』は「神道・儒教・仏法三道ヲ連接シテ恰モ緯（横糸）ニ似タルモノ」という、江戸初期の僧、契沖の国学の歌論に通うものであった。この為相の歌は「敷島の道」のあるべき姿を端的に表わした一首である。平成の今もなお京都の冷泉家では「敷島の道」の伝統を伝えている。

第九十五代・花園天皇

今更にわが私を祈らめや世にあれば世を思ふばかりぞ

花園天皇は、鎌倉末期の政治の混乱の中でご憂念ただならず、日夜学問にお励みになったが、その全貌は『花園院宸記』につぶさに記されている。またみ位を退かれたのち、皇太子量仁親王（北朝・光厳天皇）に与えられた『誠太子書』には天皇としての心構えがこまやかに記されていて、

国の政治についていかにみ心を碎いておられたかが偲ばれるのである。

この御製は、今さら私のことを神に祈ることがあろうか、天皇としてはただ「世にあれば世を思ふばかりぞ」世の幸せを祈るばかりであると自らのお覚悟を激しいお言葉で詠んでおられる。

なお『宸記』の中で「天猶陰る、雨休まざるの間、絶句（四句で構成された漢詩）の詩を作り、いささか内侍所（天照大御神）に申す。その趣き（趣旨は）、たとへ、民に代りて我が命をすつべきの故なり」という一文があるが、このお歌はまさに民に代わって命を捨てる覚悟を天照大御神にお告げになった、『宸記』のお言葉さながらの御製である。

五——建武中興・南北朝・室町時代

鎌

倉幕府が衰微する中で、後醍醐天皇は政權の回復を
決断され、一時は後鳥羽上皇のように、隠岐にお流
されになるといふ悲運もありましたが、護良親王・楠木正
成などの苦戦の末、形勢は一転、元弘三年（一二三三）、
幕府は滅びて政權は天皇のもとに帰ることができたのです。
こうしてその翌年から建武中興の新政が始まりますが、足
利高氏の反逆によってろくも瓦解、延元元年（一二三三
六）の末、高氏は武家政治の再興を計って光明天皇（北
朝）を擁立。後醍醐天皇は吉野に逃れてそこを仮の都とさ
れることになりました。その後、天皇は「玉骨（自分の
骨）はたとひ南山（吉野山）の苔に埋むとも、魂魄は常に
北闕（北方の皇居）の天を望まんと思ふ（『太平記』）」と
いふ悲痛なお言葉を残して吉野の地で崩御されるのです。
しかし戦況は悪化、次の後村上天皇からはさらに吉野の奥、
賀名生に都をお遷しになりますが、この吉野の朝廷（吉野
朝・南朝）と足利氏が擁立する京都の朝廷（北朝）が並立
するといふ異常な状態は、元中九年（一二三九二）、吉野朝
の後龜山天皇が京都にお還りになって神器を後小松天皇に
授けて、南北朝の合一が実現するまで続くのです。この五
十七年間を南北朝時代といえます。

この時代は日本の歴史でも稀な、暗澹たる時代でした。

しかしそのように苦しい時代であればこそ、かえって他の
時代では見られない日本の国柄の真実が、たとえようもな
い美しさで歴史の中に輝いていたといつても過言ではあり
ません。それは当時の歴史を生き活きと描いた、軍記「太
平記」に見事に描かれていますし、後醍醐天皇の皇子、宗
良親王が編纂された『新葉和歌集』にも心打つ多くの歌が
収められています。たとえば『太平記』の中の楠木正
成・正行父子の物語がいかにも後世の、とりわけ幕末の志士
たちの心を動かし、遠く明治維新の原動力になったかと思
えば誰の目にもあきらかです。

その後「南北合一（一二三九二）」から足利將軍が織田信
長によって京都を追われて幕府が滅ぶ天正一年（一五七
三）まで、百年にわたった戦国時代をふくめて約百八十年
あまりを室町時代といえます。その間、都は荒れて皇室の
衰微ははなはだしく、暗澹たる月日が流れますが、その戦
乱の間にも公家や武士たちから庶民の世界まで、連歌や
能・狂言をはじめ、造園・茶道・華道など今もなお世界の
人々を驚嘆させるような、洗練された日本独自の世界が生
まれてきたことを思えば、この時代は単なる乱世ではなく、
底知れない日本文化の力を示した注目すべき時代であつた
といつていいでしょう。

第九十六代・後醍醐天皇

都だにさびしかりしを雲はれぬ吉野のおくのさみだれのころ

臥しわびぬ霜寒き夜の床は荒れて袖にはげしき山おろしの風

こととはむ人さへ稀になりにけり我が世の末の程ぞ知らるる

後醍醐天皇は、第九十一代・後宇多天皇の第二皇子。御年三十一歳で即位、ご在位は二十二年の長きにわたった。天皇は、皇室の衰微を深く憂えられ、天皇親政の政治理想を目指して、北条氏打倒の動きを推進。その後、幾度もの失敗や隠岐へのご配流等苦難の月日を経て、元弘三年（一二三三）、護良親王等の親王方や楠木・菊池・名和・新田等の武将・豪族たちの蹶起により、ついに鎌倉幕府は崩壊、建武中興が成った。だがその後、論功行賞を不満とする地方豪族の反抗や権力を握ろうとする足利高氏との対立により、建武中興はわずか二年で挫折。天皇は、難を逃れるため吉野山に入れ、行宮（旅先の仮の御所）を設けて、悲運の生涯を終えられたのである。

この三首は吉野での作。一首目、「さみだれ（梅雨）の時期は、都にいても心が暗く淋しいものだが、雨雲がたれこめる吉野の山奥にいと、淋しさが一層つのってくる」の意。「吉野のおくのさみだれの」という「の」の繰り返しの中に、身にしみる淋しいご心境が迫ってくる。

二首目も、吉野の行宮での苦悶のご生活を詠まれた御製。吉野の行宮は、まず吉水院に、さらに金輪王寺の実城院にお移りになったが、いずれも粗末な山寺をあてた仮の御所であった。「臥しわびぬ」とは、寝ようとしても寝ることができないの意。霜がおく寒い冬の夜の寢床は、隙間から衣の袖に吹きつけてくる激しく冷たい山おろしの風が身にしみる。都から遠く離れたわびしさ苦悩の切実なご表現である。なお、吉水院でお詠みになった御製には、「花に寝てよしや吉野のよし水の枕の下に石ばしるおと」と天皇の御身でありながら、「吉野の山奥の谷水のせせらぎを枕もとにお聞きになるといふ艱苦を『よしや』と紛らして花に寝る風流にお執りなし遊ばされた」（川田順『吉野朝の悲歌』）御製もある。

三首目は、吉野遷宮より三年、延元三年（一三三八）の御作、前の内大臣吉田忠房、右大弁清忠などの臣下が次々と世を去った頃の感慨を詠まれたもの。吉野にいる私を訪ねる人も稀になり、自分の治世の末路が見えてくるようだと悲痛な思いを詠まれたお歌である。天皇は、その翌年「玉骨（私の骨）はたとひ南山（吉野山）の苔に埋むとも魂魄は常に北闕（遠い北方の都の内裏）の天を望まん」というお言葉を残して波乱に満ちたご生涯を終えられた。

北朝第一代・光厳天皇

治まらぬ世のためのみぞうれはしき身のための世はさもあらばあれ

寒からむ民のわら屋を思ふにも衾ふすまのうちの我もはづかし

光厳天皇は花園天皇の項で記した皇太子量仁親王かずひとのこと。後醍醐天皇、隠岐ご遷幸ののち、ご即位。北条氏滅亡ののち、ご廃位。のち、足利高氏の擁立により北朝第二代の光明天皇が北朝の天皇として即位されたあと上皇におなりになった。

一般には足利専権のため、北朝の天皇方についての理解は希薄なようであるが、この一首目のお歌の「身のための世はさもあらばあれ」わが身のこととはどうあってもいい、治まらないこの世のことだけが憂わしく思われてならないというみ心は、まさに父君、花園天皇のお歌さながらであり、二首目の「寒からむ民のわら屋」粗末なわら屋で寒さをしのいでいる民の生活に思いをよせて、あたたかな衾ふすま（夜具）につつまれてゐる自らを、「はづかし」とお詠みになったみ心は、南朝の天皇方のみ心そのままであろう。

この天皇の大御心おおみこころの一致こそ、のちの南北朝統一を実現せしめた根幹をなすものであった。時がすぎて南北朝時代も終わりに近づいた頃、出家された光厳上皇が吉野におられた南朝の後村上天皇のもとを訪ねられた場面が『太平記』巻三十九に記されていて心を打つが、これこそ日本の国柄くにがらの不思議さであろう。なお今日、皇室では北朝の天皇方は、皇位の順序からは除外されているが、祭祀をはじめすべて歴代天皇と同じ扱いをなさっていることも銘記すべきである。

菊池武時きくち たけとき

ふるさとに今夜ばかりのいのちとも知らでや人のわれをまつらむ

菊池氏は肥後（熊本県）の豪族。隠岐から伯耆（鳥取県）の船上山にお移りになった後醍醐天皇の宣旨をいただいて蹶起。博多の九州探題北条英時を討つべく兵を挙げたが、時に利あらず、武時は嫡子（あと継ぎの子）、武重に後事を託して郷里に帰し、探題の館に斬りこんで戦死した。年四十二歳。これはその辞世の歌である。「自分の命が今宵かぎりとも知らなくて故郷では私が帰るのを待っていることであらう」の意。その壮絶な死は人々の心を打ち、楠木正成は、元弘の変に戦った忠烈の人は多いが、武時こそ「忠厚尤も第一たるか」と絶賛している（『太平記』）。

なお故郷で夫の帰りを待っていた武時の妻は、この歌を見て、「故郷も今宵ばかりのいのちぞと知りてや人のわれを待つらむ（故郷でもあなたの命が今宵かぎりであることを知りました、あなたは私を待っていらっしやることでしよう、私もあなたのあとを追ってまいります）」と詠んで自刃、夫のあとを追ったと伝えられている。

武時にはこの他、阿蘇宮の神前に奉納した「もののふの上矢の鏑一筋におもふ心は神ぞ知るらむ」というすぐれた歌も残っている。「もののふの上矢の鏑」は「一筋に」を導く序詞。「鏑」は射ると鳴り響くようにつくられた矢。

第九十七代・後村上天皇

高御座とばかりかかけて、橿原の宮の昔もしるき春かな

めぐりあはむ頼みぞ知らぬ命だにあらばと思ふ程のはかなさ

後村上天皇は後醍醐天皇の皇子。幼少の身で遠く陸奥、関東に転戦。後醍醐天皇崩御のため、御年わずか十二歳で皇位におつきになった。その後十年、足利の攻撃は激しく、ついに吉野を放棄、吉野の西南、天の川の奥、賀名生に難を避けてそこを皇居となさって、波乱のご生涯をおすごしになった。

一首目はその山深い賀名生の皇居に春をお迎えになったときのお歌。いま「高御座」、天皇の玉座に垂れた帳を掲げて春を迎える、その儀式はまさに、「橿原の宮の昔もしるき」日本建国の昔、大和、橿原の地における神武天皇ご即位のお姿ながらであるというお歌。天皇にはさらに「四つの海なみもおさまるし」として三つの宝を身にぞつたふる」という御製があるが、その苦境のただなかにありながら、微動だにしない、「三種の神器（皇統に伝わる三つの宝、鏡・勾玉・剣）」を守り伝えてきた天皇としてのご自覚、ご確信。それは国家最大の危機において、お示しになった、波静かな四海の中心としての「国柄への信」であった。

二首目は崩御の前年、ご病気がちであった天皇が、当時信濃の伊那におられた兄君、宗良親王

に送られたお歌。「めぐりあはむ頼みぞ知らぬ」兄君にふたたびお目にかかることができるかどうかかわからないものの、「命だにあらばと思ふ程のはかなさ」せめて命さえあればと思う、はかない思いのこの頃ですと、肉親の情愛がしみじみ感じられるお歌である。天皇はその翌年、兄君にお会いになることもないままに崩御。御年四十一歳であった。

北畠親房きたはたけちかふま

かぎりなく遠く来ぬらし秋霧の空にしをれて雁も鳴くなり

九重の御階このへの桜みさぞなげに昔にかへる春を待つらむ

北畠親房は南朝の柱石ちゆうせきとして後醍醐天皇、後村上天皇の絶大のご信頼を受けた重臣であった。延元三年（一二三二）、その子顕家あきいえ戦死のあと、東国、常陸ひたちの小田城にあって奮闘したが、意のごとくならず、のち小田城の西北、関城せきじょうに移り、関城陥落のあと、吉野に帰って南軍の柱石として活躍しやうかい、正平九年（一二三四）、六十二歳で薨去こうきよ。その間、小田城で『神皇正統記』を著述。この書は幼帝、後村上天皇に献上すべく執筆したものであるが、混乱の時代のただなかにあって、日本の国柄をあきらかにしたこの一書の後世に与えた影響は大きく、不朽の業績であった。

一首目は東国で苦闘を続けていたときの作。「私は限りなく遠くに来たらしい。秋霧のたちこ

めた空には打ちしおれて雁も鳴いている」の意。都とはまったく異なつた荒涼とした自然の中に身をおいた淋しさがしみじみと詠まれている。

二首目は吉野に帰つたあとの作。「九重の御階の桜」とは宮中、紫宸殿ししんでんの階段の左側（東方）に植えられた左近の桜のこと。その桜は「さぞなげに」さぞや、昔の御世に帰る、その春を待ちこがれていることだろう、の意。天皇が都にお帰りになる日を待つ吉野の人々の切なる思いを左近の桜に託して詠んだ歌である。

楠木正行くすのきまさゆき

梓弓あづきゆみひきかへさじと思ふよりなき数にいろ名をぞとどむる

桜井で別れた父正成が湊川で討死してより十二年、すでに後醍醐天皇も崩御。楠木正行は南朝の中心的存在をなす武将であつた。正平二年（一二三七）、正行は幕府が派遣した細川、山名の軍勢に大勝。事態を重視した幕府は高師直兄弟を派遣する。その勢あわせて八万余騎。それを迎え討つ正行の軍勢は三千騎。正行は一族をうちつけて吉野の皇居に参内さんだい、後村上天皇の「汝ヲ以テ股肱ここう（最も信頼する臣下）トス。慎ンデ命ヲ全フスベシ」（『太平記』）といつまでもかたわらにいて自分を補佐してほしいという衷情こもるお言葉をいたしたが、死を決意。

その後、後醍醐天皇の御廟に参詣、如意輪堂の壁板に一族各々名字を書き連ねてその奥に書き

留めたのがこの歌である。梓弓は「ひく」の序詞、「ひきかへさじと思ふより」ふたたび引き返すことはない決心したので、「なき数に在る名」死に赴く人々の名前をここに留めておくのだという意。一般には上の句は「かへらじとかねておもへば梓弓」と詠まれているが、ここでは『太平記』の別本に拠った。正行は翌年正月五日、しじょうなわて四條畷で弟正時と刺し違えて戦死、二十三歳であつた。

むねながしんのう
宗良親王

君がため世のため何か惜しからむ捨てて甲斐あるいのちなりせば

思ひやれ木曾の御坂も雲とづる山のこなたの五月雨のころ

宗良親王は後醍醐天皇の皇子、幼くして出家。天台座主ざいす（比叡山延暦寺の最高位の僧職）におなりになったが後醍醐天皇が吉野にお入りになったあと還俗げんぞく（出家した人が俗人にかえること）し、遠江ととおみ、信濃しなの、越後えちご、越中えつちゆうに転戦した。正平七年（二三五二）、征東大將軍となり関東、武蔵こての小手こて指原さしばらに戦う。

一首目の歌はそのとき、部下の将兵たちを「勇戦せよ」と励ましてお詠みになった歌。「天皇のため世のためあればこの身はどうして惜しいことがあるか、捨てて甲斐のある命なのだから」

ら」の意。この歌が後世にどれほど大きな影響を与えたか。今次の大東亞戦争でも、散華した多くの将兵たちの中に、この歌を胸に死地に赴いた人が多かったのは周知のとおりである（本書245頁参照）。親王はその後、信州の南伊那の山深い大河原に居を定められた。

二首目の「木曾の御坂」は信濃から美濃へ出る峠。その木曾の御坂でさえ「雲とづる」雲が蔽う、そういう五月雨の頃、それよりさらに深く外界から遮断されてしまった大河原にいる、このたとえような淋しさを思いやってほしいというお歌である。

こうして長い月日がすぎたが、六十三歳のとき賀名生に赴き、いったん信州に帰られたあとふたたび河内かわちにおいて『新葉和歌集』しんざ（准勅撰集）を撰、のち大河原で薨去。年齢は不詳である。

第九十八代・長慶天皇

星うたふ聲にもしるし千早ぶる神の鏡はただここにます

うつろはぬ人の心のためしとやこの山路やまぢまで残る白菊

長慶天皇は後村上天皇の第一皇子、み位におつきになったときは、後醍醐天皇が吉野にお入りなつてから、すでに三十年を超える月日がたち、南朝はいよいよ苦境に立っていたが、天皇としてのご自覚は微動だにすることなく帝位をお守りになった。この二首はともにその峻烈しゅんれつな思いを

お詠みになつたもの。

一首目、「星うたふ聲」とは、いま賀名生の皇居の庭で歌われている神樂歌（宮中で神をまつられるときに奏する歌）「明星」のこと。その「明星」の中に「今夜の月」はただここにます」という歌詞があるが、天皇はその「今夜の月」を「神の鏡」と入れ替え、「神の鏡」はただここにます」として、三種の神器の「八咫鏡」はほかならぬこの賀名生の皇居にまつられている、ここにこそ日本における正統の天皇のみ位がある、ということをあきらかにされた御製である。天皇は神樂歌の奏されているなか、東の空に輝きはじめた明星を仰ぎながら、このお歌をお詠みになつたのであろう。

二首目はいかなる世にも、「うつろはぬ人の心」色あせることのない操正しい人の心を象徴するもののように、この山の奥まで咲き残っている白菊よ、という凜然たるお歌である。

第百二代・後花園天皇

天地のその神代よりうごきなき我が日の本とまもるかしこさ

明德三年（一三九二）の南北朝合一より三十六年、北朝、光厳天皇直系の後花園天皇がご即位になった。北朝内部でも混乱が見られていただけに、新たな時代の出発としてのご即位であった。天皇は父君、貞成親王の君徳涵養のための、なみなみならぬご熱意の中でお育ちになり、いよいよ

よ乱脈をきわめる足利幕府の専横のただなかであつて、毅然として帝位をお護りになり、朝廷のご威光は日を追つて回復してきたのである。

とりわけ「残民（そこなわれた人々）争ひて採る首陽の蕨、処々廬（草庵）を閉ぢ竹扉を鎖す、詩興の吟は酣なり春二月、満城の紅緑誰がためにか肥ゆ」と漢詩にお詠みになって、伯夷・叔齊が首陽山で蕨を食べて飢えをしのいだように、国民すべて飢えているさなか、詩興にふける將軍足利義政を「満城の紅緑誰がためにか肥ゆ（京の町一杯に花咲き乱れる春の景色、それはいったい誰のためにあるのか）」ときびしくお諫めになったことは有名。それによつてどれほど国民が勇気づけられたか、想像を越えるものがあつたにちがいない。そのゆるがぬご信念はここに掲げた一首、「天地創成の神代から揺るがぬわが国を『日本の国』として守り継ぐことのかしこさよ」という御製にもあきらかである。

第百三代・後土御門天皇

けふいくか天の岩戸も雲とちて神代おほゆるさみだれの空

いにしへに天地人もかはらねばみだれははてじあしはらの国

後土御門天皇は後花園天皇の第一皇子。ご即位より三年、応仁元年（一四六七）、細川、山名両

軍が激突、その後十年を超え、應仁の乱によって京洛は荒廢の地と化した。一首目はそのさなかでお詠みになったお歌。「けふいくか」は雲が天地を蔽った今日まで、長雨がもう幾日降り続いたことだろう、の意。暗澹とした時代を神話の世界と重ねて、あの神代の昔、天照大御神が「天の岩戸」にお入りになって、天地が光を失ったときのような日々が続くことよとお嘆きになったお歌である。

二首目は一転して、いかなる時代になろうとも「天地人」一貫して続くこの葦原の大和の国がふたたびよみがえらないことがあるうか、「みだれ（乱）はは（果）てじ」乱れが果てしなく続くことはない、この国の永遠を信じられる強烈な確信のご表現であった。だが世の乱れは収まることなく、天皇崩御のあと、ご大葬もできぬままに、ご遺体は四十日以上も清涼殿のかたわらの「黒戸」にご安置申しあげたと伝えられている。

なお天皇のご治世の長享二年（一四八八）、後鳥羽上皇をお祭りする水無瀬宮（京都市南郊、天王山の麓）で、上皇をお偲びして連歌師宗祇らによる「水無瀬三吟百韻」が興行された。時代は承久の変に対する反省とともに徐々に変化の兆しを見せはじめたのである。

第百四代・後柏原天皇

あはれにも愚にも見づ籠のうちを出でても鳥のたちかへりつつ

後柏原天皇は後土御門天皇の第一皇子、み位におつきになつても、経費がなかつたため、即位の式をお挙げになつたのはご即位二十二年目であつたという。だがその間にあつても父君、後土御門天皇のご意志を継いで、途絶えがちの朝儀（朝廷の儀式）の復興のため力を尽くされた。それとともに天皇は『列聖全集』所収だけでも三千七百余首のお歌をお詠みになり、「しきしまのみち（和歌）」の修業になみなみならぬ力をお注ぎになつた。

この一首にも小鳥の細かなしぐさ、「籠のうちを出でても鳥のたちかへりつつ」せつかく籠から出ようとしていた小鳥が何を思つてかまた籠の中に入ってゆくあわれさ、生きとし生けるものもつ悲しみ、「あはれにも愚にも」見えるその姿が見事に表現されている。天地万物におよせになる歴代の天皇のみ心がしみじみと偲ばれる一首である。

第五代・後奈良天皇

愚かなる身も今さらにそのかみのかしこき世々のあとをしぞ思ふ

後奈良天皇は室町の戦乱のただなか、衰えた朝儀の復興にただならぬ努力を傾けられた。このお歌は「そのかみの」遠い古の、すぐれた天皇方のあとを慕いつつおつとめになられたみ心を強くお述べになつたお歌である。とりわけ「愚かなる身も」という自省のお言葉が心にしみる。

天皇は天文九年（一五四〇）、諸国に洪水と凶作、さらに悪疫流行のため、病死者無数という惨

状を呈したとき、ご宸筆（天皇ご自身がお書きになったもの）の「般若心経」を諸国の「一の宮」に奉納されたが、その「心経」の奥書きの中に「ことし天下大疫、万民多く死亡におつ。朕、民の父母として、徳覆ふ能はず。甚だ自ら痛む」というお言葉があった。その中の「朕、民の父母として」以下のお言葉は、この「愚かなる身も今さらに」という御製さながらのご心境である。

なお今上天皇が皇太子であられた頃、記者団が皇室と国民の関係について、その理想的なあり方をお聞きしたとき、疫病の流行や飢饉にあたって、民政の安定を祈念された平安時代の第五十二代・嵯峨天皇以来の写経のご精神におふれになったあと、この後奈良天皇の奥書きの一節をお示しになったのは記憶に新しい。

武田信玄

霞むより心もゆらぐ春の日に野べの雲雀も雲に鳴くなり

軍兵は物言はずして大将の下知聞く時ぞいくさには勝つ

武田信玄は戦国時代の甲斐国（山梨県）の武将。強力な統率力をもって支配地域を拡大、のちに信濃、駿河等七カ国に及んだ。なかでも、越後（新潟県）の上杉謙信と信州の川中島で五度にわたって戦ったことは有名である。信玄は、「信玄堤」でも有名のように治水事業につとめ、新

田開発や金山開発等にもすぐれた業績を残し、為政者としての力量も抜群であった。

一首目は「霞がかかってくる」とすぐに心が動かされてしまふ、そんな春の日に野辺を飛び交う雲雀のさえずりが雲間から聞こえてくる」という意である。春のうらかな情景を詠んだ美しい歌であるが、どこかに沈痛な趣があるのは、戦いに明け暮れる武将として、人生のはかなさ、切なさを胸に湛たたえて生きてきたからであろうか。「心もゆらぐ」という言葉も美しく、「雲に鳴くなら」といういかにも武将らしい断定が心を打つ。

二首目は、戦国の世を武将として生きてきた信玄の体験を歌に詠んだものである。「大将の下知（命令）のもと軍兵が黙々と迅速に行動すれば、必ず勝つのだ」という確信がみなぎっている。何の飾りもない荒削りな物言いの中に、いかにも武将らしい力がこもった歌といえよう。

上杉謙信 うえすぎけんしん

武士の鎧よろひの袖そでを片敷かたしきて枕まくらに近ひつき初雁はつかりの声

野伏のぶしする鎧よろひの袖そでも楯たての端はもみな白妙しろたえの今朝けさの初雪

上杉謙信も戦国時代の武将。越後（新潟県）守護代長尾為景の子として生まれ、景虎と名乗つて主家を継ぎ、のちに仏門に入って「不識庵謙信」と称した。関東、越後、信濃を転戦。その間、

武田信玄と川中島で五度にわたって戦ったのは前記のとおりであるが、義侠心に富み、軍略にも秀でた武将であった。皇室尊崇の念が厚く、和歌にも長じ、独特の詩人的直観で戦陣での体験、感慨をすぐれた歌に詠んだ。

一首目は、天正五年（一五七七）、越中（富山県）魚津城に陣を進めたときの作。「かたしき」は、元来、衣の片袖を敷いてひとり淋しく寝るの意であるが、ここでは「陣中、鎧の袖を敷いて仮寝している」と雁の鳴き声か、枕もとまで迫って聞こえてくる」という意。「初雁」とは、秋はじめて渡来する雁のこと。初雁の冴えわたった鳴き声と、陣中を包む緊迫感とが、響きあって緊張した調べをなしている。

二首目は、能登（石川県）七尾城を攻め落としたあと、加賀の湊川（手取川）で織田軍を撃破して越前（福井県東部）に入り野営したが、初雪に見舞われたときの歌。「野伏し」は野山に野宿すること。「野宿している兵士たちの武衣や武器もすべて今朝の初雪で一面真っ白になっている」との意。寒中の陣営を覆った純白の初雪。戦いに明け暮れる謙信や兵士たちにとって、初雪の清浄無垢の美しさは、何にも替えがたいものだったであろう。

謙信は、その直後上洛の準備中脳溢血で急逝した。武田信玄に遅れること五年、四十九歳の生涯であった。

今はただ恨みもあらず諸人のいのちにかはるわが身とおもへば

妻照子てるこ

もろともに消え果つるこそうれしけれおくれ先立つならひなる世に

天正七年（一五七九）、播磨の三木城（兵庫県三木市）は織田信長の配下、羽柴秀吉の猛攻にさらされたが、城主別府長治は容易に降伏せず、ここに後世に語り伝えられた「三木の千殺し」（兵糧攻め）が始まった。そのため長治はついに降伏を決意。城内の兵士の助命と、荒廃した城下の復興のための租税の減免などを約束せしめたくえて、別府一族はすべて自害、武士としての見事な最期を飾った。

一首目は城主長治の辞世。「部下たちや城下の人々の命に代わるわが身と思えば何一つ恨みに思うことはない」の意。二首目は「夫婦とはいえ、遅れ、先立つのが世の常なのに、こうしてあなたと一緒にあの世に旅立つのが嬉しい」と切ない心情を吐露した妻の歌である。

なお長治の弟友之とその妻もそれぞれ「命をも惜しまざりけりあづさ弓末の世までも名を思ふ身は」「頼めこし後の世までのつばさをもならぶるほどのちぎりなりけり」という辞世の歌を遺している。一首目の「あづさ弓」は「末」の枕詞、「末の世まで」はいついつまでもで、「死後にいつまでも残る名を大切にする私は、命を惜しむことなくこの世を去っていくことよ」の意。二首目は「あの世に生まれ変わっても、あなたとは比翼の鳥（雌雄とも一対の翼でつねに一体になって

飛ぶという想像上の鳥) になりたいと願つて生きてきた二人でした」という歌。戦国の武将たちに息づくこのような精神は、遠い古代から受け継いできた日本独自の死生観、「捨身」の心の行きついた一つのピークを示すものではあるまいか。

豊臣秀吉

万代の君がみゆきになれなれむ緑木高き軒の玉松

豊臣秀吉は安土桃山時代の武将。織田信長に仕えて木下藤吉郎秀吉と称した。天正十年(一五八二)の本能寺の変で信長が世を去つたあと、明智光秀を摂津(大阪府北部)の山崎に滅ぼし、全国を平定して天下を統一。天正十三年、関白、翌年太政大臣となり、豊臣姓を名乗つた。

秀吉は、天正十五年九州平定後、京都に聚楽第を造営し、ここに居を移したが、翌年(二五八八)、第七代・後陽成天皇の行幸を仰ぎ、諸大名を集めて自ら天皇に対する深い忠誠心を披瀝し、天下にその勢威を示した。その折の感慨を詠んだのがこの歌である。「永久にこの国を統治される天皇の行幸に、きつと慣れ親しんでくれることであろう、軒先に高く伸びた緑の玉松よ」という意。

この折、後陽成天皇は「わきて今日待つかひあれや松が枝の世々の契りをかけてみせつつ(とりわけ今日の日を持った甲斐があったことよ、いつまでも変わらないお前「秀吉」の忠誠のまゝころを松の

枝の緑の色に示してくれたことを」と祝いの御製をよせられた。この聚楽第への行幸は、南北朝以来の混沌とした政治の終わりを告げる「王政復古」的一幕として高く評価すべき国家の慶事であった。

六——江戸時代

天

正十六年（一五八八）、関白・豊臣秀吉は、後陽成天皇を聚楽第にお迎えして、織田信長によって始められた天下統一の事業が完成したことを天下に示しました。

ここに室町時代以来、混迷を極めた戦乱の時代は終わり、久々に平和がよみがえったのです。しかしそれから四年後には朝鮮に出兵、慶長三年（一五九八）、秀吉は世を去りました。その後、関ヶ原の戦いに勝利を収めた徳川家康が慶長八年、江戸に幕府を開きました。それから慶応三年（一八六七）まで、ほぼ二百六十年の間、それぞれの藩を任せた大名を幕府が絶対的な力で統率するという幕藩体制が続きました。

こうして江戸時代は、他の時代に比べて一見、平穏な日々がすぎたように思われますが、日本本来のあるべき政治を無視した、このような政治体制が永続できるはずはなく、しだいにその欠陥を露わにしていくのです。こうして江戸時代中期以後は幕府批判の声がしだいに高まってきますが、注目すべきことは、これらの人々が武力で訴えるのではなく正しい学問の力で幕府権力をゆるりうごかそうという姿勢でのぞんだことです。こうして国学や儒学が盛ん

に行なわれ、日本の国はどうあるべきか、人々はどう生きてゆけばいいのか、そういう問いかけが国いっばいに満ちあふれていました。

鎖国体制の下で太平の夢をむさぼっていた間に、欧米諸国が東洋に進出し、日本が祖国存亡の危機に立たされたとき、多くの若い志士たちは、そのような学問の力を胸に、命を賭して立ち上がったのです。ペリー来航から十五年、幕府はついに政権を朝廷に返上し、鎌倉幕府以来、建武中興を挟んで七百年の長きにわたって続いた武家政治は終わりを告げたのです。このように江戸時代は、日本の国柄のあるべき姿を求めつづけた二百六十年だったといえるのですが、その間、歴代の天皇方がどのような思いで皇位をお守りになったかは、本書に収めさせていたのだいた、数々の御製にお偲びすることができそうです。とりわけ、幕末の未曾有の危機を一身に受けられた孝明天皇の「澄ましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせじなよらず國民」の一首に、そのすべてが述べられているのではないでしようか。このような捨身の大御心とこれに応えた若き志士たちの奮戦によって、輝かしい明治の御世を迎えることができたのです。

第百八代・後水尾天皇

葦原やしげらばしげれおのがままとても道ある世とは思はず

見ず知らぬ昔人さへ忍ふかなわがくらき世をおもふあまりに

後水尾天皇は江戸時代初期、徳川家康が幕府を開いてより九年目、慶長十六年（一六一一）に即位。寛永六年（一六二九）、天皇が当時、高僧として名高い沢庵和尚に紫衣（勅許によって賜わる紫色の僧衣）を賜わったところ、幕府は朝廷のもっておられた栄典授与の権を剝奪、幕府が定めた法に反しているとして、沢庵を流罪にした。

このことに激怒なされた天皇は突如、位をお譲りになったが、一首目の御製はそのときにお詠みになったものである。「葦原よ、繁りたいなら自分勝手に繁ればいい、この世の中には到底正しい道を求めようもないのだから」の意。その無念の思いにはたまたならぬものがある。だが、それはこの紫衣事件のことだけではなかった。とりわけ当時、幕府が定めた「禁中並公家諸法度」に見られる幕府の国のあり方に対する無知と傲慢には耐えがたいものがある。である。

二首目は天皇ご晩年の御製であるが、「私が生きているこの暗澹たる時代を思うあまりに、『見ず知らぬ昔の人』までが懐かしく思われる」と、苦しい胸中をお詠みになったお歌。なお天皇は

晩年、都の東北、修学院に、自ら庭園を造営されたが、西山の連峰を一望のもとに収め、都の家々を間近に見るその雄大な構想は、苦しみに耐えながらも生涯を貫かれた王者としてのご風格を今の世に伝えている。

浅野内匠頭長矩

風こそふ花よりもなほわれはまた春のなごりをいかにとやせむ

元禄十四年（一七〇二）春、江戸城における勅使下向の饗応の大役を命ぜられた播州（兵庫県）赤穂の藩主、浅野内匠頭長矩は、全力をあげてこれに取り組んだが、指南役である吉良上野介の執拗な苛めにあう。勅使登城の当日、ところは城内松の廊下。吉良のあまりの侮辱に耐えかねた内匠頭は、ついに堪忍ならず脇差を抜き吉良の面を打った。吉良は一命を取りとめたが、内匠頭は即日切腹を命ぜられた。

この歌は切腹を待つ最期のときに詠まれたものである。「風こそふ花よりもなほわれはまた」風を誘って散りゆく桜の花にもまして、はかなく散ってゆくこの身は、「春のなごりをいかにとやせむ」春の名残をどう惜しめばいいのか、なすすべもなく春は過ぎ去っていくのである、の意。その後赤穂藩は断絶。その翌年元禄十五年十二月十四日、大石内蔵助率いる赤穂浪士四十七人は雪の吉良邸に討ち入りついに主君の仇を討ったが、その物語は周知のとおり、『忠臣蔵』として

後世に永く伝えられている。

第一百十二代・靈元天皇れいげん

敷島のこの道のみやいにしへにかへるしるべもなほ残すらむ

夢ながらうれしと見つるたらちねのゑめる面影おもかげいつか忘れむ

一首目は「遠いい古にしえから歌い継つがれてきた和歌の世界『敷島の道』、それだけが古に帰る、はるかな祖先の神々の世界に帰る道しるべとして今の世に残っているのだ」と、和歌の本質についてお示しになったお歌である。だがここで大切なのは「敷島のこの道のみや」の「のみ」であろう。靈元天皇は後水尾天皇の皇子、和歌の道にはとりわけ堪能であられ『列聖全集』に収められた御製は六千首を超えているが、そのように「敷島の道」に精進なさったのは、幼少の頃からその目でご覧になってきた、きびしい朝暮（朝廷と幕府）の関係、その中でお苦しみになっていた父君のお姿、そのご体験の中で生まれた「いにしへにかへるしるべ」は「敷島の道」以外にはないというご確信からであろう。

なお天皇はとりわけ父君への孝心の篤あついお方であったが、二首目は父君のゆかり深い修学院にお出ましになろうとされたとき、夢に生前のお姿そのままに「心よくうちゑませ」たまう父君を

ご覧になった、そのときの御製である。「夢ながらも、ああ嬉しいと思って拝見した父君の『ゆるめる面影』にこやかなお姿、それをいつ忘れるときがあるか」という、亡き父君への強い思慕のお歌である。

第百十五代・桜町天皇

君も臣も身をあはせたる我が国の道に神代の春や立つらむ

第百十六代・桃園天皇

神代より世々にかはらで君と臣の道すなほなる国はわがくに

桜町天皇は靈元天皇の曾孫、桃園天皇はその皇子。桜町天皇ご在位的时候は將軍吉宗の時代であつたが、桃園天皇から次の第百十七代・後桜町天皇の時代にかけては、尊皇論を説いた竹内式部等が処罰された宝曆事件（一七五八）、同じく尊皇思想を貫いた山県大弼（本書133頁参照）が処刑された明和事件（一七六七）が起こり、幕府政治に対する本質的な批判が表面に姿を見せはじめた時代であつた。この重大な時期に桜町天皇は三十一歳、桃園天皇は二十二歳と父子お二方も惜しくも青年天皇として生涯を終えられたが、そのお二方にそれぞれ、神代から一筋に受け

継がれてきた「君臣のあるべき姿」をお示しになった御製があることの意味は大きい。

桜町天皇の御製は、「身をあはせたる」君臣の心が一つに溶け合ったとき、そこにはじめて神代さながらの日本の春がこの世のものとなる、この世に実現するのだ、という意。

桃園天皇は「神代から今に至るまで日本における君臣のあるべき姿、それは『道すなはなる国』、何一つ飾ることなくありのままの心に帰ること、それが日本の国の国柄である」とお詠みになっている。それから明治維新まで百年、王政復古への道筋はすでにこの二首の御製の中に示されていたのである。

なお、桃園天皇には「逢恋（恋に逢う）」というお題で「新まくら待ちえてかはす今宵より世を隔てじと契るうれしさ」という御製もある。待ちに待って今はじめて契りをおかわす新婚のよろこびをお詠みになった瑞々しい一首は忘れがたい。

やまがたに
山県大式

玉鉾の道ある国にたづねきてうてば答ふる柏手の音

曇るとも何か恨まむ月こよひはれを待つべき身にしあらねば

山県大式は享保十年（一七二五）に甲斐国、今の山梨県竜王町に生まれた。十八歳のとき京都

に遊学、のち江戸に出て宝暦十年（一七六〇）、家塾を開き兵学、医学を講じ、学ぶもの數百人、彼を招いて教えを受ける大名も多かつた。しかしその尊皇斥霸そんのうせきは（天皇を尊び幕府をしりぞける）の思想は幕府の忌むところとなり、明和四年（一七六七）、処刑、四十三年の生涯を閉じた（明和事件）。その名著『柳子新論』りゅうしんろんは熱烈な尊皇思想に貫かれ、「常」を守るべき「文」と、「変」に処すべき「武」と、その二つの世界の混同がすべての禍根であるとして、政治の世界のあるべき姿そのものから幕府の存在を否定した。

一首目は「香取神社に詣でて」という詞書ことばがきがあるが、「玉鉾の道ある国」とは遠い古から伝えられた日本の国のあるべき姿、すなわち「神ながらの道」の世界が生きているこの神域という意味であろうか。「玉鉾の」は「道」の枕詞。ここに來て拍手を打てば、その音は打てば答えるように神域になり響くと、その森嚴しんげんな世界が見事に詠まれている。『柳子新論』の、何のためらいもない幕府否定の決断と相應じるような力のこもった歌である。香取神社は今の香取神宮（千葉県）、鹿島神宮（茨城県）とならんで御祭神は「武の神」である。

二首目の詞書は「仲秋無月」。処刑直前、獄中の作である。「はれ（晴れ）を待つことのないこの身には仲秋の名月が雲に隠れようと何の恨みもない」の意。なすべきことをなしとげた悔いのない生涯を振り返る、さわやかな一首である。大式にはこの二首しか伝えられていない。

青雲の白肩しろかたの津は見ざれども今宵こよひの月に思ほゆるかも

信濃なる大野の御牧みまき春されば小草くさこも萌ゆらし駒こま勇むなり

いそのかみふりにし唐からの笛竹を吹き立てて遊ぶ今宵たのしも

徳川八代将軍吉宗の第二子として生まれた宗武は、徳川御三卿の一つである田安家の祖。文武の道に通じ、はじめ荷田かたのありまろ在満ざいまんに学び、のちに賀茂真淵かものまほを師としてとくにわが国の古学に精進した。自ら多くの和歌を詠み、『天降言あもりこと』の歌集がある。宗武はとくに柿本人麻呂や山部赤人を好み、ありのままにその心を詠む古風いにしえぶりに傾倒した。

一首目、この歌には「九月十三日夜」の詞書がある。「青雲の白肩の津を見たことはないけれども、今宵の月をながめているとその情景が思われてくることよ」という意。「青雲の白肩の津」は『古事記』に記された地名で、神武天皇ご東征の折、遠い日向の地から瀬戸内海を通り浪速ななむら（大阪府）の渡りを経てはじめて上陸されたところ。『古事記』には、そこに待ち迎えていた登実とみ毘古びこ（本書22頁参照）の軍勢に大敗を喫し、やむなく南下して熊野に向かわれたという故事が力強い言葉で記されている。

「青雲の」は白肩の津の修飾語であるが、夜久正雄著『古事記のいのち』には、「『青雲の白肩の津』といふロマンチックな地名のもつイメージと、『古事記』神武天皇大和上陸と、『今宵の月』

との三つが、宗武の心の中で完全にひとつに溶けあって、しみじみとした歴史的憶念の世界に私どもの心をさそひこんでゆく」とある。

二首目、信濃の国、大野の御牧は幕府直轄の馬の牧場（長野県伊那郡）。「はるされば」は、春がやってくるとの意。春を迎えて大野の御牧に駒を走らせる宗武。走る駒の様子を敏感に感じ、「小草萌ゆらし駒勇むなり」ああ小草が萌えはじめたのであろう、こんなに勇んでいるぞと人馬一体の躍動するよろこびを表わしている。

三首目、「いそのかみ」は「ふる」にかかる枕詞。「古くなった唐時代の笛竹を吹き立てて、ともに遊ぶ今宵はなんと楽しいことか」の意。詞書には八月十五日の夜、盃をたびたび廻らしながら、笙の笛や箏（いずれも雅楽の楽器）などを吹いて家臣と遊ぶさまを述べている。雄々しくさわやかな武人の姿が感じられる歌である。明和八年（一七七二）没。

賀茂真淵

秋の夜のほがらほがらと天の原てる月影に雁なきわたる

賀茂真淵は遠州浜松の近く、神官の家に生まれた。京都の荷田春満を師として『万葉集』研究の道に入った。のちに江戸に赴き田安宗武の庇護のもと『万葉集』を教え、『万葉考』などを著して国学の基礎を築く。当時の歌風にありがちな言葉のもてあそびや弱々しさを排し、『天地の

ままなる」なお「高く直き心」を詠んだ万葉の「ますらをぶり」を重んじた。

この歌は「秋の夜の天空を広くほがらかに照らす月、その月影の中を雁が鳴きながら渡っている」の意。「ほがらほがら」と繰り返すおらかな調べに続いて、最後を「雁なきわたる」とひきしめており、その明るく力強い表現は上古の歌の調べを伝えている。

明和六年（一七六九）、七十三歳にして没。真淵は多くの門人を育てたが、なかでもその晩年に伊勢松坂で出会った本居宣長もとおりのりながによって、国学はやがて大成する。

本居宣長もとおりのりなが

敷島のやまとごころを人とはば朝日ににほふ山ざくら花

桜花里にも野にも山べにも今をさかりと咲きにけるかな

本居宣長は伊勢（三重県）松坂の生まれ。医師として京都に遊学中多くの古典にふれ、なかでも『源氏物語』に惹かれ、松坂に帰ると診療のかたわら『源氏物語』を講義した。宝暦十三年（一七六三）、宣長三十四歳のとき、賀茂真淵が旅の帰途に松坂に立ち寄ることを知り、宿に真淵を訪ねて一夜の教えを請うたが、この夜の運命的な邂逅かいこうが、宣長の進む道を決定づける。その間の事情は宣長の『玉勝間たまかつま』二の巻に詳しい。こうして宣長は大事業、『古事記』の解説にその一

生を捧げ、三十五年ののち『古事記伝』四十四巻を完成させたのである。

宣長は、理や才にとらわれた当時の学問を批判し、日本人が育ててきた豊かに感じる心、すなわち「感ずべきときにあたりて感じる」という「もののおはれ」を知ること（『源氏物語 玉の小櫛』）、そして『古事記』以来の「神ながらの道」を踏む尊さを伝えた。

一首目は、宣長の肖像画の賛（絵に付けられる短文）に宣長自身が書き記したものである。「敷島の」は「やまと」にかかる枕詞。「やまとごころ」とは日本の国で昔から人々が生きていく上で大切にしてきた心と解していいだろう。「大和心を人が問うたならば、自分はこう答えよう、朝日に照らされて、なんともいえず美しく匂う山桜の花のようだと」との意。それはのちに喧伝されたように、必ずしも潔く散り死ぬことを賛美したものではない。素直で、あるがままの人の心、自然の姿そのものを美しいと感じる宣長の感性であった。

ある秋の夜長、宣長は眠れぬままに春の桜を思い出し、詠みはじめた歌が夜ごとに積もり、ついに三百首にも及んだ。花が咲くのを待ちわび、やがて野にも山にも花が咲き満ち、やがては散っていくまでを心の赴くままに詠んでいる。二首目は、「まくらの山」と名づけたその連作のうちの一首で、よろこびに満ちあふれている。

宣長は享和元年（一八一〇）、七十三歳の生涯を松坂で閉じた。山桜をこよなく愛した宣長は、その遺言に自分の奥津城（墓）に山桜を植えるようにと書き遺した。その山桜は代を継いで今も春になると花を咲かせる。畢生の作品『本居宣長』を著した小林秀雄もまた、こよなく山桜を愛した人であった。

第百十九代・光格天皇

身のかひは何を祈らず朝な夕な民安かれと思ふばかりぞ

民草に露の情けをかけよかし代々の守りの国の司は

天明七年（一七八七）、光格天皇が即位より八年、いわゆる天明の大飢饉によって世の中は騒然としていたが、そのただなか、六月から九月にかけて京都の御所の周辺を、万を超す民衆が「御千度参り」と称する、御所への参詣を繰り返していた。それはこれほどの飢饉のさなか、打つ手を知らない幕府への不信と、最後にすぎるのは朝廷以外にはないという民衆の切なる願いの現われであった。その状況をご覧になった天皇は、それまでの旧例を破って幕府に対して民衆救済の強化をお命じになったのである。国民と天皇とのこのようなふれあい、それは、八十年後に実現された王政復古への重大な布石であった。

ここに掲げた二首の御製は『列聖全集』には収められていないが、一首目は当時、民衆の中で万民の安穩を願う天皇のお歌として言い伝えられたもの。「私はわが身のためにかくあれかしと祈ることは何一つない。朝な夕な思うことはただ民の幸せだけである」というお歌。

二首目は天皇が將軍徳川家斉に贈られたとされているお歌。「代々受け継いで政治に携わって

いる者たちは民衆に恵みの露をかけるように勤めよ」というお諫めのお歌である。

高山彦九郎たかやまひくろう

われをわれとしろしめすかやすべらぎの玉の御聲みこえのかかるうれしさ

親は子をおもふものぞと春雨あめに酌くみつつ誇ることのうれしも

高山彦九郎は上野国こうずけのくに（群馬県）新田郡の生まれ。十三歳のとき『太平記』を読んで自家の先祖が南朝の忠臣新田氏にいしんになつたことを知って慨然として志を立てたという。高山彦九郎といえはすぐ思い浮かぶのは、「京都三条の大橋の上で遥かに皇居を伏拝ふくはい、道ゆく人をおどろかしめた」と記した頼山陽らいせんやうの一文である。「彦九郎）地に坐し拝腕はいき（ひざまずいて拝む）して曰く『草莽そうもう（在野）の臣正之』と。行路聚あつまり（路行く人が集まって）観みて怪あやしみ笑ふ。顧みざるなり（笑われても顧みることがなかった）。彼は林子平はやしんへい、蒲生君平がもうくんへいとともに寛政かんせいの三奇人と呼ばれたが、ここである「奇人」という言葉の陰に、いかに心厚い皇室への思慕がたたえられていたかを知るべきであろう。

一首目は寛政三年（一七九二）、彦九郎は京都にあつたが、時の光格天皇が自分のことについてよくご存じであるということを伝え聞いたときによろこびを詠んだ歌である。天皇は「われをわ

れとしろしめすかや」この私のことをご存じなのだろうか、「すべらぎの玉の御聲」天子さまじきじきのお声をかけていたたくことのうれしさよ——。純真無垢な作者のよろこびが伝わってくる忘れがたい一首である。

二首目は彼の友だちが十三になる自分の子供の多芸なのをほめたので、自分も負けずわが子の自慢をしたという他愛のないやりとりである。その純朴な子を思う愛情が、折から降る春雨と、互いに交わす杯とともに彼ならではの世界をつくりだしている。彼には他に「子を思ふ心を知れる人をこそ頼みある人とわれ頼みにき」という歌もある。皇室への思い、それは自然の情として、子を思う心と直結する。それが彼の心のありようだった。だが寛政五年（一七九三）、彦九郎は突如、九州、久留米の地で自決、その純粹な四十七歳の生涯を閉じた。自決の理由は時代に対する激憤であろうが、その詳細はいまだ不明である。

良寛
りようかん

霞立つ長き春日を子供らと手まりつきつつこの日くらしつ

風は清し月はさやけしいざともにをどりあかさむ老のなごりに

月読みの光を待ちて帰りませ山路は栗のいがの多きに

山かけの岩間を伝ふ苔水のかすかにわれは住みわたるかも

日本人みんなが、心のふるさとに帰ったような懐かしさを覚えて呼んだ「良寛さん」。子供たちと一緒に春の野に堇を摘み、堇の花畑の中でいつのまにか昼寝をする良寛さん。床下から竹の子が伸びてきた、というので床を切りとる良寛さん。生きとし生けるものへの深い愛情を示し、人々とともによろこび、ともに泣いた良寛の人柄は、さまざまな伝記となって親しまれてきた。

一首目の歌は、そんな良寛を彷彿させる代表的な歌。のどかな春の一日、子供たちとともに手まりをつけて、遊び疲れるまで楽しむのであった。この頃、良寛は越後（新潟県）国上山の「五合庵」という粗末な庵に住んでおり、春になれば里に下りて子供たちと毎日のように遊んだ。堇の花を摘んでいるうちに托鉢の鉢をなくしてしまい、鉢の子よ、可哀相にどこへ行った、と探しまわって詠んだ「道のべに堇つみつ鉢の子を忘れてぞ来しあはれ鉢の子」も、良寛ならではの愛情あふれる歌である。夕方になると里人の家を訪れ、人々とともに語らい、好きなお酒をいただくのが楽しみであった。人々は良寛のそばにただで、心が満たされていくのを感じたという。二首目は、そんなある日、盆踊りの宵の歌。風は清々しい、月もさやかに照っている。さあこの宵をみんなと一緒に踊り明かそうではないかと、村の人々とともに踊りつづける。生きてゆく残りの日々を楽しむようにする良寛の、天真爛漫な姿そのままの歌である。

良寛の住む山の庵には、しばしば里人も訪れた。夜道が暗くなるのでそろそろ帰ろうとする友

人に、まあもう少しいいじゃないか、月が出て、道が照らされるようになってからお帰んなさい
「月読みの光を待ちて帰りませ」、山道には栗のいがが沢山落ちていて踏むからね「山路は栗のい
がの多きに」というのが三首目である。「月読み」は月の古語。

庵は夏は涼しいが、秋ともなればめつきり寒く、冬は大雪に閉じ込められた。人々もめつたに
訪れない。四首目、山かげの岩間を伝い苔を濡らしながら細々と流れる水「岩間を伝ふ苔水」の
ように、「かすかにわれは住みわたるかも」かすかにひっそりと自分も山かげに住んでこの世を
すごしている、の意。澄みきった心情が胸を打つ。

良寛は青年期に出家、備中びつちゆう（岡山県西部）玉島たましまの曹洞宗円通寺えんつうじで修行し、将来を嘱望されたが
二十年後に故郷越後に帰り、転々としたのち四十七歳にして「五合庵」に住んだ。晩年には越後
の島崎の庵室に移り、天保二年（一八三一）、七十四歳をもって示寂。仏教の真髓に徹し、自然随
順のままに生きることを身をもって示した人である。良寛の書は、その歌ともども無私そのまま
の心を写しており、古今に抜きん出ている。

さて良寛の晩年に美しい彩りを添えた人があった。それは続いて紹介する貞心尼である。

貞心尼ていしんに

君にかく相見ることのうれしさもまだ覚めやらぬ夢かと思ふ

貞心尼もまた越後の人。夫を失つて出家していたが、二十九歳の折、島崎の庵に良寛を訪ねた。良寛時に七十歳。その出会いから良寛との死別までを、貞心尼は『蓮の露』に綴った。良寛を慕う貞心尼と、貞心尼の訪れをまるで恋人のように待ち受ける良寛と、二人の間に詠み交わされた短歌の贈答はほのぼのとして美しく、時には激しいほどである。

この歌は、念願の良寛に出会ったときに詠まれたもの。「君にかく相見ることのうれしさも」あなた様にこうしてお会いできた嬉しさは、「まだ覚めやらぬ夢かと思ふ」まだ覚めきれない夢かと思ひます、とまるで心をときめかせる乙女のような歌である。良寛が重い病にかかったという知らせを受けてようやく貞心尼が姿を見せたとき、「いついつと待ちにし人は来りけり今はあひ見てなにか思はむ」と、もういつ死んでも心残りはないというほどの愛情を吐露した良寛であった。良寛の末期にあつて貞心尼は献身的にその看護にあたつた。貞心尼が世を去つたのは明治五年（一八七二）、七十五歳であつた。

平賀元義

柞葉の母を思へば児島の海逢崎の磯波たち騒ぐ

上山は山風寒しちちのみの父のみことの足冷ゆらむか

天照らすすめら御神も酒に酔ひて吐きちらすをば許したまひき

平賀元義は備前（岡山県東南部）の人。父は岡山藩中老の臣下であった。古学を学び、家督を弟に譲って学問に励んだが、三十三歳のとき脱藩。放浪の旅を送った。生来奇矯の人でさまざまの奇行が伝えられており、その歌も自由奔放であるが、正岡子規は『墨汁一滴』の中で、「萬葉以後一千年の久しき間に萬葉の真価を認め、萬葉を模倣し萬葉調の歌を世に残したる者、実に備前の歌人、平賀元義一人のみ」とまで記している。

一首目、放浪の頃に詠んだ歌である。「柞葉の」は「母」の枕詞。家を飛び出し、旅にありながらも母への思いは断ちがたいものがあつたと思われる。目の前に広がる備前、児島の海、逢崎の磯のかなたに、わが家があるのであろう。立ち騒ぐ磯の波は、またおのれの心の姿でもある。その二年後の冬、「父の峰雪ふりつみて浜風の寒けく吹けば母をしぞ思ふ」と、寒さの中でわが子を案じているであろう母への強い思いをうたった。「父の峰」は児島の近くの山の名だが、父をも偲んだのであろう。

二首目もまた放浪の中で詠んだもの。すでに十年余の昔、父は亡くなつていた。父は中風を病み、足がよく冷えていたという。その父の墓が岡山郊外の上山にある。だが上山は山風が寒い、ああ父の足が冷えてはいないだろうかと、今も生きているごとく父を慕うのである。「ちちのみの」は「父」の枕詞。放埒な生活をしながらも、親を思う心はあふれるばかりであった。

三首目、酒を愛した元義の破天荒ともいふべき歌である。「天照大御神も弟須佐之男命（本書

19頁参照)が酔つ払つて吐き散らすのをお許しになったことよ」の意。かくて元義は慶応元年(二八六五)、六十五歳の冬、道端の小溝に落ちて凍死した。酒に酔い、寒さも覚えずこの世を去つたのであろうか。しかしその熱い精神は、時を越えて私たちの胸を打つのである。

徳川齊昭とくがわなりあき

岩が根もゆるぐばかりに音たかく砕けておつるきりふりの滝

徳川齊昭は幕末期の水戸藩主。藤田東湖等を登用して藩政改革を推進、藩学「弘道館」の建設に力を尽くした。嘉永六年(一八五三)の黒船来航後に幕府の海防参与に就任。持論である大艦建造を急務と説き、穏便な対応に終始する幕府の外交姿勢をきびしく問うた。「水戸の老公」と呼ばれ、尊皇攘夷の志士の期待を集めた英邁剛毅の藩主だが、幕府からは嫌われ、その人生に幾度も浮沈を経験した。諡(死後に贈る称号)を烈公という。万延元年(一八六〇)、六十一歳で没す。

この歌の調べもその人柄を示して力強い。霧降の滝は日光三大名瀑の一つで、上下二段に分かれ、全長七十五メートル、幅十五メートルに及ぶ。岩棚に当たって霧のように飛沫をあげることからその名があるという。「岩が根」は岩の根元の意で、岩をゆるがすばかりの雄渾な滝の姿、音、力を見事に詠みくだし、体言止めでしつかりと支えた、堂々とした歌である。

しまづなりあきら
島津斉彬

武蔵野にしげる蓬の白露を君ならずして誰かはらはむ

島津斉彬は幕末の薩摩（鹿児島県）藩主。藩政の刷新につとめ、洋式兵備の充実、西洋科学の实用化を進めた。外交問題や將軍継嗣（あと継ぎ）問題に力を注いだ。安政五年（一八五八）に急逝。享年五十。越前藩主松平春嶽が「英明近世第一人者」と称えて、西郷隆盛も敬慕した名君である。

嘉永二年（一八四九）、ペリー来航の四年前、幕府はいったん取りやめていた文政八年（一八二五）の異国船打払令の復活を関係者に諮問した。そのとき、前項に紹介した水戸の徳川斉昭は、斉彬に対して、自分は海防については幾度も意見具申しており、今回の諮問に回答する意志はないと述べ、「今更（いまさら）に何をかいはむ武蔵野の蓬（よもぎ）か中のあさましの身は」という歌を贈った。「武蔵野の蓬（よもぎ）か中」とは、弘化元年（一八四四）、幕府から隠居を命ぜられ、江戸の小石川邸に暮らしていた自分の身の上を詠んだのであろう。過去の意見書が採択されなかった不満をうかがわせる歌である。

これに対する斉彬の返しがこのに引いた歌。斉昭の歌の「武蔵野にしげる蓬」を逆に幕府を諷する意に転じて用いている。その「蓬の白露」、幕府が苦慮している異国船問題を、「君ならずして誰かはら（私）はむ」正しく対応しうるのはあなた以外にいない、という意。斉彬の国家の危

機に対する真率な姿勢が偲ばれる歌である。繰り返される「シ」音が清らかに響く。

鹿持雅澄

嘆きつつ手折り来にけり翼なす
在り通ひつつ見ませ吾妹子

あぶら火のもとにつどひて思ふどち御ふみよむ夜はあけずもあらぬか

鹿持雅澄は江戸時代後期の国学者、土佐の生まれであるが、生涯土佐の地を離れることなくほとんど独学に終始しながら、契沖に始まる近世の万葉研究の、文字どおり集大成としての大著『万葉集古義』百四十一冊を完成せしめた。その学問の功績は大きく、雅澄が世を去って十年、明治天皇は侍臣から『万葉集古義』が名著であることをお聞きになって、御自ら目をお通しになっただけでなく、御手許金を御下賜、明治十二年（一八七九）、宮内省から出版の運びになったのである。雅澄の霊もいかに感泣したことであろう。

だがそれに至るまでの雅澄の労苦を支え、かかる大著をなさしめた陰には妻、菊子の比類のない内助の功があった。菊子は土佐勤皇党の盟主、武市瑞山（半平太）の叔母だったが、雅澄が好んでいた『万葉集』（巻十九）の大伴家持の「大夫は名をしたつべし後の世に聞き継ぐ人も語り継ぐがね」大夫は立派な名を立てるべきである、聞き継いでいく人も語り継いでいくように、とい

う歌をよろこんで、折にふれてはその歌を口にして夫を励ましたという。だが菊子は三十九歳で三男一女を残して世を去った。一首目は「吾妹子」その妻の靈前に手折ってきた花を供えたときの悲しみを詠んだ歌。「翼なす在り通ひつつ」は鳥のように空をめぐりながら、「見ませ」花を見てほしいと亡き妻に呼びかけている。

二首目は家塾で藩の子弟や近所の子供たちを集めて万葉をはじめ多くの国典を講義するのを何よりの楽しみとした、その折の一首である。「あぶら火」は燈心にともし油を浸してともし火、「思ふどち」は勉強しあっている仲間たち、「あけずもあらぬか」は、いつまでも夜が明けないでほしいの意。雅澄には歌集『山齋集』があり、とくに長歌にすぐれていた。安政五年（一八五八）没、六十八歳。

おおくまごみち
大隈言道

妹が背に眠る童のうつつなき手にさへ廻る風車かな

流れくる花に浮かびてそばえてはまた瀬をのぼる春の若鮎

筑前の国福岡の商家に生まれた言道は、幼い頃より書と歌を学び、三十九歳の折、家業を弟に譲って和歌に専念、「ささのや」、別名「池萍堂」に隠棲した。福岡藩士野村貞貫とその妻もと子

(のちの望東尼、本書172頁参照)は言道の弟子である。四十二歳の春、日田(大分県)にある広瀬淡窓の私塾「咸宜園」に入門して思索を深めたが、この頃、歌話『ひとりごち』を書いた。その中で言道は「古人は師なり、吾にはあらず、吾は天保の民なり、古人にはあらず」と述べ、言葉の上だけで古人を真似るのは間違いで、古人がその当時の心ばえを詠んだように、天保(当時の年号)の民は天保の歌を詠むべきだとし、身近な情景を細やかに、あふれるようにうたいあげた。その歌数は生涯十萬首に及ぶという。

一首目、「妹」は妻のことであろう。「うつつ」は現実で、「うつつなき」は夢を見ているの意。「妻の背に眠っている童の、握るともなく握った手にも回っている風車よ」。のどかな情景と眠る童の愛らしい寝顔が、目に見えるようである。

二首目、「そばえて」は戯れての意。「流れてくる桜の花びらに近づいて水面に浮かび、ついばんで戯れている、と見ている間にまた瀬を上ってゆく春の若鮎——」。細やかで美しく、清らかに若々しい。歌集に『草径集』がある。慶応四年(一八六八)、七十一歳で没。明治維新直後のことであった。

たらしなわけが
橘 曙 寛

きのふまで吾が衣でにとりすがり父よ父よといひてしものを

たのしみは妻子むつまじくうちつどひ頭ならべて物をくふ時

たのしみはあき米櫃に米いでき今一月はよしといふ時

春にあけて先づみる書も天地の始めの時と読みいづるかな

橘曙覧は文化九年（一八二二）、越前福井の生まれ。二歳にして母に死別、十五歳にして父も亡くなった。これを契機に仏教を学び、詩歌に親しんだ。家業を継いだ頃より国学古典の道に入り、書をよくしたが、二十五歳の頃、ふたたび大きな不幸が曙覧を襲う。長女、次女が相次いで生後まもなく死去。しかも橘の本家が火事で焼失した。曙覧は以後家業を弟に譲って古典に没頭。三十三歳にして本居宣長門下の田中大秀を飛驒高山に訪ね入門した。

この頃またもや三女の健女を失い、哀痛の中で詠まれたのが第一首目である。「世の中」と題したこの歌には詞書が添えられ「むすめ健女、今年四歳になりければ、やうやう物語りなどで、たのもしきものに思へりしを、二月十二日より痘瘡（天然痘）をわづらひて、いとあつしくなりもてゆき（病が篤くなってゆき）、二十一日の暁みまかりたりける（亡くなってしまった）。嘆きにしづみて」とある。「きのうまで私の衣手（袖）にとりすがってお父さん、お父さんと言っていたのになあ」と、なんの飾りもなくまっすぐにうたつたその悲しみが、胸を打つ。

このことあってより曙覧はますます学問に励み、国学に開眼、福井の城下においてその教えを

広めた。弟子も増え、弟子たちが建ててくれた藁屋に移り、やがて長男、次男が誕生。貧しい中にも充実した学問の日々が続いた。

曙覽にとつて学問とはまた歌を詠むこともあった。有名な『独楽吟』は当時の作であり、すべての歌が「たのしみは」で始まる五十二首にも及ぶ連作である。ここに挙げたのはこの中の二首。貧しいながらも家族とともにある日々よろこびが、率直にうたいあげられている。他に「たのしみは錢なくなりてわびをるに（思いわずらうるときに）人の来たりて錢くれしとき」など、なんともユーモラスな歌もある。いずれもほとんど注釈もいらぬ、あるがままを詠んでいて、しかも人の心を動かすところ、曙覽の真骨頂である。

四首目、「正月ついたちの日、古事記をとりて」の詞書がある。新春を迎えてまず見る書物は『古事記』。その冒頭にある「天地の始めの時、高天原になりませる神の御名は、天の御中主の神」の一節を音吐朗々と読みはじめるのである。国の始まりを読んで遠き祖先に思いを馳せ、この一年の始まりを感謝しつつ迎える。清貧な粗末な家だが、そこには清々しくよろこびに満ちた元旦の空気さえ感じられる。

曙覽五十四歳の春、福井藩主松平慶永（春嶽）がその名声を慕って訪れ、「忍ぶの屋」の屋号を賜った。のちに嫡子、井手今滋が編んだ曙覽の歌集は『志濃夫廼舎歌集』と名づけられた。これを読んだ正岡子規は「趣味を自然に求め、手段を写実に取りし歌、前に万葉あり、後に曙覽あるのみ」（『曙覽の歌』）とまで激賞した。慶応四年（一八六八）、五十七歳で病没。

僧月照げつしょう

大君のためには何か惜しからむ薩摩の瀬戸に身は沈むとも

月照は幕末の勤皇僧、京都清水寺成就院じょうじゆいんの住職。安政元年（一八五四）、寺務を弟に譲り、尊皇攘夷運動に身を投じた。安政大獄で捕縛の手が迫り、安政五年、海路、九州に逃れ、平野国臣ひらのくにのみ（本書166頁参照）とともにかろうじて鹿児島城下に入ったが、薩摩藩はその滞留を許さず、十一月十五日月明かりの夜、錦江湾（鹿児島湾）に同志西郷隆盛（本書159頁参照）と相抱いて投身。隆盛は蘇生したが、月照は水死した。享年四十六。

この歌はその入水直前に認めたとされる辞世の一つで、隆盛の懐中より発見されたもの（野史臺維新資料叢書『僧月照傳』。「身は薩摩の海に沈む運命であつたとしても、大君のためという思い一途に生きてきた自分であつて、惜しむべき命ではない」という意。この世に遺す最後の言葉として勤皇の志をうたいあげた。「薩摩の瀬戸」は時代の奔流を象徴しているかのようで、下の句はうねるような余韻を残す。

吉田松陰よしだしょういん

かくすればかくなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂やまとたましひ

親思ふこころにまさる親ごころけふの音づれ何ときくらむ

身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂

呼びだしの聲まつ外ほかに今の世に待つべき事のなかりけるかな

吉田松陰は、幕末の思想家、教育者。長州（山口県）毛利藩の兵学師範である叔父の養子となり、幼少より学問に励み、藩主毛利敬親たなかひかからも囑望しよくぼうされた。安政元年（一八五四）、海外事情探索を志し、鎖国の禁を破つて、再来したペリーの黒船に密航を企てたが失敗して自首（いわゆる下田踏海事件）。萩の野山獄のやまごくに入り、のち実家である杉家に幽囚。ここに松下村塾しよつかそんむくを開き、久坂玄瑞くさかげんずい、高杉晋作等多くの志士を育てた。安政五年、日米通商条約の違勅調印に憤激し、運動を展開せんとした。野山獄に再入獄。翌年、安政大獄で江戸に東送され、刑死。

一首目は下田踏海したかたふみのあと、囚人となり江戸に送られたとき、高輪たかなわの泉岳寺せんがくじの前を過ぎ赤穂義士を追想して詠んだもの。「海外渡航が大罪であることは充分承知している。しかし、国家危急の今、『已むに已まれぬ大和魂』が自分を突き動かしたのである」の意。内なる魂の叫びに従って大義をなそうとした点では、四十七士も自分も同じであるという思いを詠んだ歌で、「悲劇的な運命を予知しつつも、鬱勃うっぼつたる思いを抑えがたい、その切迫した心が自然に韻律を生み出したよ

うにカ音やヤ音のリズムがくりかえされ、力強い調子になつて」「短歌のすすめ」所載、山田輝彦「幕末志士の歌」 いる。

二首目は松陰の家庭生活を偲ばせる歌である。安政六年（一八五九）、江戸の獄中にいよいよ死刑は免れぬと知つて、萩の父、叔父、兄宛てに「永訣（ながの別れ）の書」をつくる。冒頭には「平生の学問浅薄にして至誠天地を感格する（天地を感動せしめ、ゆり動かす）こと出来申さず、非常の変（死刑に処せられる）に立ち至り申し候。嗚々御愁傷（お嘆き）も遊ばさるべく拝察仕り候」と記し、ついでこの歌を記している。「子が親を思う以上に親の子を思う心は深い。自分を今まで深く慈しんでくださった父母は、死刑の報せをどのようにお聞きになることか」の意。深い悲しみの中にありながら、その悲しみにおぼれぬ松陰の精神の強さをうかがわせる歌である。

さらに、松陰は処刑日（十月二十七日）直前の二十五日未明から二十六日にかけて門人・同志たちに宛てた遺書「留魂録」を書く。その冒頭に記したのが三首目の歌。処刑された自分の身体が土に帰ることになつたとしても、この大和魂だけはこの世に留めたいという志士松陰の絶唱である。歌自体が「留魂録」という名の由縁を示している。松陰は「留魂録」に遺した言葉とともにその魂をこの世に留めたのである。

四首目は「留魂録」のあとに記された連作の五首「かきつけ終りて後」のうちの一。一首。「思うことをこの『留魂録』に記し終えた今、処刑の呼び出しを待つほかに待つことはない」の意。その心境は想像を絶するが、歌はじつに静かな響きをたたえており、松陰の「平生の学問」の力を思わしめられる。享年三十。

有村次左衛門ありむらじざえもん

岩が根もくだかさらめや武夫もののふの国のためにと思ひ切る太刀

有村次左衛門は薩摩藩士。江戸に出て剣を千葉周作ちばしゅうさくに学ぶ。安政大獄の中で、兄雄助とともに水戸藩士の井伊大老襲撃計画に参画。万延元年（一八六〇）三月三日、雪積もる江戸桜田門外において、十余名の同志と、登城中の井伊直弼いひなおすけを襲う。次左衛門は行列に突進して井伊の首級を討ち取り、その首をかかげて立ち去ったが、井伊の従者に背後から受けた傷が重く、和田倉門外で割腹かつぶくし自刃した。享年二十三。

歌は桜田門外の変に向かう心を詠んだ辞世である。「もののふが国のためと身を顧みず振るうこの太刀、この太刀は岩をも砕かずにおかぬ、井伊の首は必ずや討ち取ってみせる」の意。体言止めの「太刀」に歌の重みがすべてかかっている。堪えに堪え、待ちに待った井伊襲撃に向かう心の高揚とともに、太刀を振るう鍛えあげた肉体の律動を思わせる力のこもった歌である。

蓮寿尼れんじゆに

雄々しくも君につかふる武夫もののふの母てふものはあはれなりけり

蓮寿尼は前出、有村兄弟の母である。弟が桜田門外の変で自刃した直後、兄の雄助は上京して尊皇攘夷の旗をあげようとしたが、後難を恐れた藩吏によって国元に送られ、三月二十三日、自刃した。母は相次いで二人の子を失ったのである。その後詠まれたのがこの歌。次左衛門の歌の「武夫」の語に唱和し、雄々しいわが子を誇りに思う心と母としての悲しみが一つに溶け合つて詠みあげられている。「あはれ」とは現代語の「かわいそう」の語感と異なり、しみじみとした深い感懐を表わす。兄雄助の自刃はこの母の訓戒によるものと伝えられる。

保田與重郎（本書255頁参照）は「この母はたゞ子等の志を信じる上で生きたのである。たゞ一つの君に仕へるみちを貫いた子らを信じることに、即ち國の道を信じて母の生きる唯一のより所であった。それは又母の愛情であった。さういふよりどころから母は子に自決をうながしたのであらう」と述べ、この歌について「君のために子をうしなつたといふ悲しみの歌ではない。子も母も、一途に盡忠の志を生きぬくための、慟哭をうたつてゐるのである」と記した（『日本語録』）。

佐久良東雄

死にかはり生きかはりつつもろともに櫃原のみ代にかへさざらめや

まつろはぬ奴ことごと束の間にやきほろぼさむ天の火もがも

佐久良東雄は、文化八年（一八一二）、常陸（茨城県）新治郡の郷士（農村にあつて武士としての身分を与えられた者）の家に生まれ、仏門に入る。のちに藤田東湖ら勤皇の志士と交わる。千本の桜木を鹿島神宮に献木、僧籍をぬけ、佐久良を姓とした。大坂にあつた万延元年（一八六〇）、桜田門外の変に参画した水戸浪士をかくまったことから、幕吏に捕らえられ、江戸伝馬町の獄舎に入れられた。獄中「吾れ徳川の粟を食はず」と絶食して絶命。享年五十。

激烈な尊皇家の姿は、歌にもありありと示される。一首目の「檀原のみ代」ははじめて大和、檀原に宮を置かれ、国を建てられた神武天皇のご治世を示し、「かへさざらめや」は返さないでいようか、という反語の意。王政復古を実現しないではおかぬという熱烈な志を述べた歌である。「死にかはり生きかはり」とは、幾度も生まれ変わつての意であろうが、永久の戦いに同志とともに身を投げ出そうとする激しい表現である。

弘化元年（一八四四）五月、江戸城本丸が炎上した。ちようど徳川斉昭（本書146頁参照）に対する幕府の圧迫が強まっていた時期であり、東雄はこの報せを大いによろこんだ。二首目はそのときの歌。「まつろはぬ奴」とは朝廷に服従せぬ卑しいやから、という意味であり、幕府をのしる激しい表現である。「もがも」は願望の終助詞。本丸炎上でもあきたらず、幕府をたちまちのうちに焼き尽くす火が降つてくれ、と天に祈るのである。なお、下の句は『万葉集』の「君がゆく道の長手を繰り畳ね焼きほろぼさむ天の火もがも」（狭野茅上娘子、本書61頁参照）にある表

現だが、東雄は現実の大火と天誅の意を重ね、新たな表現として用いた。

西郷隆盛さいこうたかもり

思ひ立君が引手のかぶら矢はひと筋のみにいるぞかしこき

一筋にゐるてふ弦のひびきにてきえぬる身をもよびさましつつ

明治維新の功労者で今も多く日本人が敬愛する西郷隆盛は、安政五年（一八五八）、僧月照（本書153ページ参照）との入水自殺の一件後、奄美大島へ幽囚の身となった。当時、安政大獄を黙認する島津藩の方針に疑念を抱いた薩摩藩士たちは脱藩義挙を計画するが、藩主島津忠義は直筆の諭告書を出して「非常の際には藩主自らが先代斉彬公（本書147頁参照）の遺志を継いで勤皇を貫くので、諸君も国家の柱石となつて藩政を輔佐せよ」と脱藩中止を懇諭した。大島でそれを知った隆盛は「御直書を拝読して」という詞書でこの二首を詠んだ。

一首目、「この度、藩主はご決心なさつて鎗矢をつがえた弓を引き絞るように直書（諭告書のこと）を出され、矢をまっすぐ射るごとく勤皇の方針をゆるがすことなく貫かれたことが、じつにありがたい」との意。「鎗矢」は合戦の開始を告げる矢で、射ると大音声を立てて飛ぶことから、薩摩藩の動向が国論形成に大きな影響を及ぼすことを念じた歌であろう。

二首目は、藩主から誠忠の士と恃たのまれた同志たちの「二筋に射る弓弦ゆづるの響きにも似た高揚ぶりを思へば、『きえぬる身』この離島で、なす術のない自分もよみがえる思いがする」と詠んでいる。万延元年（一八六〇）、隆盛三十四歳のときであった。西郷隆盛の漢詩はよく知られ定評があるが、この二首の歌も内心に秘めた熱情が引き締まったリズムと勢いを奏でて印象深い。

村垣淡路守
むらがきあわじのかみ

えみしらもあふぎてぞ見よ東あづまなる我が日の本の国の光を

うれしやなまづふしをがむ我が国の神路かみぢの山の高き恵みを

村垣淡路守は、名は範正のりまさ。幕閣なにあつて次々に押し寄せる外交問題に対処した。ここに掲げた二首は、いずれも万延元年（一八六〇）、二年前の安政五年（一八五八）に締結された日米修好通商条約批准のための使節団の副使として渡米した折の記録『遣米使日記』に収められた歌である。この井伊直弼の手によって強行された条約の締結が、心ある人にとって屈辱的な外交として激しく非難されたことは周知のとおりである。しかしその外交に直接携わった幕閣の人々が、彼らなりに日本人としての自覚と誇りと使命感に生きていたことがこの『遣米使日記』の至るところに記録されていて読む人々の心を打つ。幕末の朝幕の対立が国家を二分するに至らなかつたのは、

このような日本の国柄の美しさによることを示す貴重な記録といえよう。

一首目は首都ワシントンで無事、大統領との謁見を終えたときの感慨。「えみし」、つまり外国の人々も東方に輝く日本の国の光の美しさを見てほしいという歌である。この使節一行をニューヨークで迎えた詩人ホイットマンが「西の海を越えて、ここ日本より、礼儀正しく、両刀たばさむ色浅黒き使節たち、無蓋馬車のまま、怯まず臆せず、けふ、マンハッタンを乗り打ってゆく」(松田福松訳)とうたったのもこのときであつた。

二首目は帰りの船から伊勢神宮の山々「神路の山」を遠く仰いだときの歌。「ふしをがむ」はここでは、遠くはるかに拝むの意。使命達成の安堵感と日本の国に生まれたよろこびが「うれしやな」と率直に詠まれている。村垣範正は明治元年(一八六八)隠居。ふたたび官にはつかなかつた。明治十三年(一八八〇)没。六十八歳。

有馬新七

梓弓あづさゆみ引きてゆるべず物部ものふの矢たけ心の止む時あらめや

朝廷みかど辺に死すべきいのちながらへて帰る旅路いさじほの憤ろしも

有馬新七は薩摩藩士、山崎闇斎やまざきあんさいの学問と国学を学び、楠公くすのぎ(楠木正成)を崇拜。武芸に通じ、

とくに弓道をよくした。二十歳のとき江戸に遊学し、父がいた京都にも滞在。その後小浜藩の志士梅田雲浜うめだ うんべんと深く交わった。

安政五年（一八五八）、幕府の違勅条約調印に憤激して、井伊大老襲撃や京に義兵を挙げる策など、京と江戸を奔走しつつ盛んに運動したが、安政大獄のもとで事成らず、最後には伏見に潜みひそ間部老中の暗殺を図った。歌はいずれもこの当時の『都日記』に記されたものである。

一首目の「矢たけ心（弥猛心）はいよいよ勇み立つ心。「梓弓を引き絞って狙いを外さぬように、奸臣（間部）を倒そうとするもののふの心に緩みはない」の意。「引く」「緩む」「矢」と「弓」の縁語えんごを重ね、また、ヤ行の音が続き、戦意が力強くうたいあげられている。

新七は同年暮に藩から帰国の厳命を受ける。その帰路で詠んだ長歌の反歌が二首目。間部を討ちとり、「朝廷辺みかどべに死すべきいのち」京都近くで討ち死にすべき身であったのに、と藩命での帰国を憤る歌である。「朝廷辺」、京にいらっしゃる天皇のお側に死すことは志士の本懐であり、悲願であった。加えて新七にとって京都には亡き父の墓所もあった。その後、文久二年（一八六二）にふたたび上京した新七は、伏見の寺田屋騒動（船宿寺田屋で尊攘派志士が殺傷された事件）で鎮撫にきた同藩士と闘ううちに刀折れ、相手を壁に押し付けたまま同志に「おいごと刺せ」と叫び、串刺しになって壮烈な最期を遂げる。享年三十八。京の「朝廷辺」に死したのである。

闇夜行く星の光よおのれだにせめては照らせ 武士の道

父ならぬ父を父ともたのみつつありけるものをあはれ 吾子や

君が代はいはほと共に動かねば碎けてかへれ 沖つしら浪

わが靈はなほ世にしげるみささぎの小笹の上におかんとぞ思ふ

伴林光平は幕末の国学者、歌人。河内の国（大阪府）に僧侶として生まれたが、勤皇の志深く、とくに皇陵の復興に心を砕いた。文久三年（一八六三）に出された、大和行幸の詔（天皇自らか神武天皇陵等に攘夷ご祈願のため親拝され、親征の軍議を開かれるという天皇の詔）に呼応して、大和の五条に討幕の挙兵、いわゆる天誅組の変が起きると聞くやただちに参加。大和南奥の十津川の郷土も交えて奮戦したが、戦い利なく事敗れ、自らも逃走中に捕縛される。獄中にあつても泰然自若として同志に学を講じ、挙兵の顛末を記した『南山踏雲録』を著す。翌年京都獄中にて斬に処せられた。享年五十二。

一首目は、『南山踏雲録』に「昨夜、南都（奈良）へ来し路のほど、いと暗くて鬱悒さ（気分が晴れないこと）限りなかりければ」と前置きしてこの歌を載せており、戦いに敗れ逮捕されて奈良の奉行所につれていかれる途次に詠んだものである。時代の闇夜の中に、悠久の星の光を親し

く仰いで、お前だけはせめて日本人の生きるべき道をいつまでも照らしてほしいとはるかな星に祈る、悲しく、清澄な響きの歌である。

捕縛前の逃走中、光平は妻（後妻）が二人の子供を捨て置いて去ったことを知る。その子らも思つて詠んだのが二首目の歌である。「国事に奔走し、父らしいことは何一つしてやれない、そのつれない自分を父と頼つていた、かなしきわが子よ」と、父も母もなくし、この世にふたたび会うこともできない子を思つて悲嘆にくれるのである。この歌はわが子を親友に託す書簡に記されたものだが、書簡ではこの歌のあとに子の名「信丸殿」と認め、さらに「魂は高天原に在りて金石不碎（金石は堅固なことのたとえて、確實で変わらない約束の意）、又此世にうまれて再会せん」と子供に宛てた一行の遺言を記している。悲痛限りない言葉である。

三首目は光平の辞世とされるが、もともとは嘉永年間の黒船来航のときの作という。「君が代は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりて苔のむすまで」——国歌「君が代」にあるとおり、「天皇のしろしめす御代は巖のように磐石である。この日本に押し寄せる夷狄よ、岩に寄せ来る白波のように砕け散つて消え去れ」と、永遠の日本、神州不滅の確信を詠んだ歌である。

四首目は『南山踏雲録』所載。「南山（十津川、吉野の奥の山中）に在りける時、『有らざらん此世の外（死後の世界）の心構、いかか』など問ふ人の有りければ」との前置きがあり、死後の心構えを問われたときに示した歌の一つである。かつて光平の天皇の御陵調査のことが天皇のお耳に入り、ご沙汰書を賜つた。その感激を「われはもや勅たばりぬ（天皇のお言葉を賜つた）天津日の御子のみこと（天皇）の勅たばりぬ」とうたつた光平であり、荒廃した皇陵の再興はかねてから

の光平の願いであった。四首目の歌は「その御陵ごりやうの小笹の露に自分の魂を宿して、いつまでも天皇のお側にお仕えしたい」と美しい恋鬨れんげつ（天皇をお慕い申しあげること）の至情をうたいあげている。

宮部鼎蔵みやべていざう

いざいざども馬に鞍くら置け九重ここのへのみはしの桜はなちらぬその間に

宮部鼎蔵は肥後（熊本県）勤皇党の代表的人物。諸国の志士と交わり、とくに吉田松陰とは、ともに東北を旅するなど深く交流した。元治元年（一八六四）、池田屋事件（京都三条の旅館池田屋に潜伏していた尊攘派を新撰組が襲撃した事件）で重傷を負い、自決。享年四十五。

この歌は、志士たちが深く心をよせていた孝明天皇の「戈ほことりてまもれ宮人ここのへのみはしの桜かぜそよぐなり」という御製にお答えしたものと見られる。「ここのへのみはしの桜」は御所の紫宸殿階下に平安時代から植えられてきた左近の桜を意味するが（本書113頁参照）、ここでは転じて日本の国の命そのものを象徴する。国民よ、今こそ起って美しい日本の国の命を守れよ、と呼びかけられた御製である。

この天皇の呼びかけに鼎蔵などの志士たちは間髪をいれず鋭敏に反応した。「いざいざども馬に鞍置け」家の子よ、馬を引け、大君のみもとにいざ出で立たん、の意。国家の危機に立ち上がるますらおの凜りんとして張りつめた姿を偲しのばしめる、勢いのある歌である。

我が胸のもゆる思ひにくらぶれば煙はうすし桜島山

弓は折れ太刀は砕けて身は疲れ息づきあへず死なば死ぬべし

かたらはむ人しあらねば大君は雲井にひとりものおぼすらむ

平野国臣は福岡筑前藩士、幼時小金丸家に養われたが、のち志を立てるに及んで妻子を離別して実家に復し、名を「国臣」と改めた。時あたかも安政大獄のさなか、西郷隆盛や真木和泉（本書169頁参照）らと親交を結び国事に奔走した。

一首目の「我が胸の」の歌は、文久元年（一八六一）、自ら執筆した『尊攘英断録』を薩摩の島津久光ひさみつに閲覧を乞うたが、側近の妨害により成らず、「あの薩摩が誇る桜島の噴煙でさえ、わが胸の燃ゆるがごとき思いには及ばない」と、薩藩の因循いんじゆんに対する怒りを詠んだ歌である。

その翌年、筑前黒田藩主の東上を阻止したため捕らえられ福岡の獄に投ぜられた。獄中では筆が使えなかったため、代わりに紙捻こよりで述作を記録した。野村望東尼もちとに（本書172頁参照）と親交を結んだのもこの頃であった。文久三年恩赦、上京し、学習院出仕となって道が開かれたと思うま

もなく八・一八の政変（公武合体派が討幕派を失脚させた事件）のため都を離れ、七卿落ち（討幕派公卿が失脚、長州藩に逃れた事件）の一人、沢宣嘉を擁して但馬（兵庫県）の生野に挙兵。だが事破れ、とらえられて京都の六角の獄に投ぜられた。

二首目は挙兵の地、生野を去るときに詠んだ歌。「息づきあへず」息も絶え絶えに、「死なば死ぬべし」死ぬなら死んでもかまわないという悲痛な思いが迫ってくる。年明けて元治元年（一八六四）、禁門の変の折、在獄の同志とともに獄中に斬られた。三十七歳。

真木和泉は国臣を「禁闕（天皇）ヲ慕フコト第一等ノ人也」と評したが、まさに天皇を思う心の深さには類を見ないものがあつた。三首目は「語り合う人も側にいないので、大君は『雲井』、皇居の中でただ一人、どんなにか深いもの思いに耐えていらっしやることだろう」と、お惚びした歌。

国臣には「君が世の安けかりせばかねてより身は花守となりけむものを」という歌もある。「君が代が安泰であれば、花守となつて生涯を終えただろうに」の意。「花守となりけむもの」というやさしくも、あたたかい心がその波乱に満ちた生涯と対比されて胸を打つ。

くさかげんずい
久坂玄瑞

ほととぎす血になく聲は有明の月よりほかに聞く人ぞなき

けふもまた知られぬ露のいのちもて千歳を照らす月を見るかな

ふるさとの花さへ見ずに豊浦の新防人とわれは来にけり

久坂玄瑞は長州藩士。高杉晋作（本書171頁参照）とならぶ松下村塾の双壁といわれる。母、父、兄を相次いでなくし、十五歳で天涯孤独の身となる。松陰は玄瑞を深く愛し、末妹を玄瑞に妻あわせた。松陰の死後も高杉晋作らと藩を超えた尊皇攘夷派の中心的人物として活躍。元治元年（一八六四）、蛤御門の変（長州藩が自らに着せられた冤罪をそぐために出兵、皇居の蛤御門の前で戦い敗れた事件）で流弾に当たり、自決。享年二十五。

最初の二首は、文久元年（一八六一）、江戸遊学中の歌。すでに玄瑞は水戸・薩摩などの藩士と往来して国事を談じ、和宮降嫁（本書178頁参照）を阻止すべく運動を展開しようとしていた頃である。

一首目は「郭公」の題がある。自らをほととぎすに擬え、「血になく聲」自分の必死の声も「有明の月」残月より他に誰も聞くものはない、の意。「千載集」の「ほととぎす鳴きつるかたをながむればただありあけの月ぞのこれる」（藤原実定）を踏まえているのだろうが、本歌とは隔絶した悲痛な心情が詠まれている。

二首目は、国事に奔走して「けふもまた知られぬ露のいのち」今日明日の命さえ知られぬ緊張感を背景に、悠久の月の光を仰ぐ心情を生き活きと伝えている。玄瑞は江月斎という号を用いた

が、この二首からも月を愛した武人の姿が偲ばれる。

文久三年四月、玄瑞は將軍家茂が攘夷の期限を五月十日と奉答したのをうけて京都からたち下関に下り、光明寺党（のちの奇兵隊の起源）を結成し、英、仏、蘭、米の艦隊への砲撃に参加した。

三首目は下関に帰る途次、周防の富海から故郷の妻に送った手紙の中に記した歌。「豊浦」は遠い古、第十四代・仲哀天皇が九州熊襲征討のため仮宮を置かれたときの下関・長府の古名。「ふるさとの花」とは「いとしい妻」を心においた表現かと思われる。ふるさとの花や妻を思う心も、攘夷の戦いに出る丈夫の心も、ともに玄瑞の心に息づいている。「万葉集」防人の古歌の心を受け継ぎつつも、清新な印象の歌である。

真木保臣（和泉守）

かかる子を育てしものと今さらに悔ゆらむ母のこころをぞ思ふ

ももしきの軒のしのぶにすがりても露の心を君に見せばや

大山の峰の岩根に埋めにけりわが年月の大和魂

真木和泉守は筑後（福岡）の久留米藩士、水天宮の神官。楠公（楠木正成）の忠烈を慕うこと篤く、死に至るまで五月二十五日の楠公祭を欠かすことがなかった。堂々たる体軀で、容貌魁偉。嘉永五年（一八五二）、同志とともに藩政改革を企てたが成らず、罪を得て久留米南部、水田に蟄居。「山柵窩」に身をひそめて平野国臣など諸国の志士と交わる。文久二年（一八六二）、脱走して薩摩に入り、ようやく上京したが寺田屋騒動にあい、久留米藩に幽囚。文久三年、長州藩士らの奔走で囚を解かれて上京。三条実美の信任を得、「今楠公」と志士たちの人望を集めた。天皇の攘夷親征を目指したが八月十八日の政変で長州に退去。翌元治元年（一八六四）、浪士隊を率い長州藩兵と上京したが蛤御門の変に破れ、京の南西、山崎・天王山に同志とともに自刃。享年五十二。

一首目は、幽閉中の歌。「長い幽囚生活でなんら孝養もできず、家のためにも世のためにも尽くせない自分である、母はこんな子を育てたのかと今さらながら悔いておられよう」と、老母の心を偲び、悲しんだ歌。多くの志士たちに相通ずる思いであったろう。とくに保臣は十一歳のときに父をなくしており、母への思いは一入強かったようである。

二首目は、順徳天皇御製「百敷やふるきのきばの忍ぶにもなほあまりあるむかしなりけり」（本書99頁参照）を踏まえた歌。その昔、保臣は晩酌の際、この御製を独吟し、感きわまって落涙することもあつたと愛娘の小棹が伝えている（山口宗之「真木和泉」）。保臣の歌は孝明天皇のみ心に順徳天皇のお嘆きを重ねあわせたもの。「露の心を君に見せばや」は、どうにかして草莽（在野の民）の真心をこ覧いただき、大御心をお慰め申し上げたいものだの意。

三首目は、同志十六名と自決したときに詠んだ辞世。自決の場は「各々甲冑かっちゆうを脱ぎ、訣別けつべつの杯を酌み交わし、心静かに割腹致し候有り様、誠に勇々ゆうゆうしき次第」(森山滋筆記、徳富蘇峰『近世日本国民史』)であったと伝えられ、大楠公の最期を彷彿させる。歌は「天王山の岩のもとに、わが人生の幾年月を守ってきた勤皇の真心をわが身とともに埋めることだ」の意。深い感懐を湛たたえながらも覚悟の定まった古武士の風格ある最期を偲おぼせる歌である。

高杉晋作たかすぎしんさく

後おごれても後おごれてもまた君たちに誓ちかひしことを我忘れめや

高杉晋作は長州藩士。久坂玄瑞と並ぶ松陰門下の双壁で、倒幕運動の中心人物。文久二年(一八六二)、藩命により上海に渡る。帰国後、尊皇攘夷の運動に挺身。文久三年、奇兵隊総督。慶応二年(一八六六)、第二次長州征伐に全藩を指揮し、幕軍を撃破したが、結核に倒れ、翌年病死。享年二十九。伊藤博文は「動けば雷電の如く、発すれば風雨の如し」と晋作を評した。

歌には、「白石資興(正一郎)、尊攘の為に忠死せし御魂を祭る。余またその席に加はりかくよめり」との詞書がある。白石は、下関の廻船問屋の主人で志士を応援し、自身も尊攘運動に挺身した人物。慶応元年、晋作とともに下関に「桜山招魂場」を設立した。歌はその招魂祭での作。「後おごれても」は死しにおくられてももの意で、その繰り返しは晋作が久坂玄瑞など今は亡き一人ひとり

の同志を偲ぶさまを伝えている。先の文久二年、英国公使館焼打ちなど攘夷運動を展開していた頃、晋作は玄瑞らの同志と、国家の御楯たらんと血盟書を交わした。君たちに誓ったことを決して忘れないと、幕末の風雲児と評される晋作の、友を思い国を思う真心を伝える歌である。短い生涯の晩年の作であった。

野村望東尼のむらもとくに

帰り来て君がぬぎます衣手ころもてに夏の夜深き露を知るかな

住みそむる囚屋ひとやの枕うちつけにさけぶばかりの浪の声かな

冬籠ごもりこらへ堪へて一時ひとときに花咲きみてる春は来るらし

野村望東尼は筑前、黒田藩士の娘。夫貞貫さだつらとともに大隈言道おほせみち（本書149頁参照）の門をたたいて和歌の道を嗜むたしなという、一家の主婦として慎ましい日々を送っていたが、夫死去ののち、剃髪して「招月院望東禅尼しやうげついんぼうとうぜんに」と称し、東の方、皇居を偲ぶ思いを法名に託した。その後文久元年（一八六一）、上京した折に堂上の人々との交流を深めて、急激に変化する新たな世界にめざめ、帰国するや、獄中にあつた平野国臣（本書166頁参照）を励まし、筑前の勤皇の志士交流の中心

的存在となつて活躍したが、藩論が一転、慶応元年（一八六五）、いわゆる「福岡乙丑の獄」により弾圧を受け、六十歳にして糸島半島の西、姫島に流罪されることとなつた。それから一年、枕もとに打ち寄せる玄海の荒波の音を聞きながら孤独の日々をすごしたが、翌年高杉晋作の手によつて救出されて下関に移つた。その後、時は熟して薩摩、長州が連合、明治維新は目前に迫つた。彼女はその悲願の成就を防府（山口県防府市）の天満宮に断食潔齋して祈念、氣力尽きて慶応三年（一八六七）十一月六日死去、六十二歳。じつに「王政復古」宣言の一月前のことであつた。著作には歌集『向陵集』、歌文集『夢かぞへ』などがある。

一首目は夫が在世のとき、「貞貫君夜深く帰り給ひし衣どもとりて」という詞書がある。夜もふけて帰つてきた夫の衣に置いた露にふれて、夫を思うしみじみとした家庭生活の情感が美しい。二首目は姫島に流罪された折の歌。「住みそむる」ははじめて身をおいた、「うちつけに」は突然にの意。枕もとでたたきつけるような荒波を聞いている牢舎第一夜のすさまじい情景が詠まれている。

三首目は辞世の歌であるが、前述のように「こらへ堪へて」待ち望んだ、「花咲きみてる王政復古の春」は文字どおり、目前に迫つていたのである。

第二百一十一代・孝明天皇

此の春は花うぐひすも捨てにけりわがなす業ぞ国民の事

澄ましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせじなよろづ国民くにたみ

群むらがりて何をかたるぞ我がおもひひとしくおもへ池の水鳥

天あめがした人といふ人こころあはせよろづのことにおもふどちなれ

さまざまになきみわらひみかたりあふも国を思ひつ民思ふため

孝明天皇は弘化三年（一八四六）、御歳十六歳で即位。慶応二年（一八六六）、三十六歳の若さでお亡くなりになるまで、ペリーの来航をはじめ執拗に開国を迫ってくる欧米列強の重圧の中で、日本の歴史上かつてない波乱と緊張の二十年をおすごしになった。

一首目のお歌は、文久三年（一八六三）の御製であるが、「花うぐひすも捨てにけり」という切迫したお言葉、そして「我がなす業」はただ「国民の事」のみと、すべてを一身に背負ってお立ちになる毅然としたお気持ち、それは二首目の「たとえわが身は濁った水に沈むことがあっても、『ごしはせじなよろづ国民』国民にだけは、決してそのような思いをさせまい」という決意にも示されたご心境であった。

だがこのようなお気持ちであっても、内に秘めた思いを語りかけるべき臣下をかたわらに求め

ることができないときには、そのみ心は庭の池に無心に遊んでいる水鳥に向けられていく。それが三首目のお歌。「我がおもひひとしくおもへ池の水鳥」私の苦衷をわかちあってくれよと水鳥に語りかけられるのである。あの激動の世界のただなか、孤独に耐えられたこのお言葉にこもるみ心はいかばかりだっただろうか。

四首目と五首目は元治元年（一八六四）の御作、その年は東上した長州の軍勢によって皇居蛤御門を中心に激しい戦いが繰り広げられた幕末の動乱が極限に達した年であった。四首目の最後の「どち」は、同志、仲間の意。「このただならぬ時代を生きるわれわれはすべて、心一つにする仲間であつてほしい」と、すべての国民に同胞感を強く求められた御製である。だがここで注意すべきは「天がした人といふ人」の中には、当然のことながら、將軍をはじめ幕府側の人々も含まれていることであろう。それは同じ元治元年のはじめ、江戸より上洛、朝廷に参内した將軍徳川家茂いえもちに与えられた御宸翰ごしんかん（天皇のお手紙）の中で「汝ハ朕ガ赤子（子）、朕、汝ヲ愛スルコト子ノ如ク、汝、朕ヲ親シムコト父ノ如クセヨ」という一文があつたことによつてもあきらかである。朝廷と幕府との激しい対立の中に、このようなお言葉があり、すべてをわが胸に収められた大御心を偲しのばせる御製があつたことの意味は大きい。

五首目の「なきみわらひみ」は泣いたり笑つたり。「泣いたり笑つたりしながら語りあうのも、国を思い民草を思うためなのだ」の意。この率直なご述懐、このみ心によつて国民の意志がいかに一つに統すべられてきたか。明治維新による輝かしい統一国家日本の門出は、この大御心の中に用意されていたのである。

三條実美 さんじょうざつとみ

大君おほきみはいかにいますと仰ぎ見れば高天たかまの原ぞ霞こめたる

いづる日の方を仰ぎてうちむせびなみだながらに世を祈るかな

はなぞのの藤のうら葉のうらとけてかたらふまどゐたのしくもあるか

わたれども渡れどもなほ現うつとはおもひもかけず夢のうき橋

三條実美は孝明天皇の側近に奉仕した内大臣、三條実萬さねむつの嗣子しし。父の死後、尊攘派公卿の中心として活躍したが、文久三年（一八六三）八月十八日、朝議一変、同志の公卿とともに長州藩士に擁せられて長州三田尻（山口県防府市）に難を避けた。いわゆる「七卿落ち」である。その後、山口、長府に、さらに第一次長州征伐のため、筑前太宰府の延寿王院えんじゆおういんに移ったが、その地においても薩摩藩などとの提携を強めて画策、時期の来るのを待った。

最初の二首はいずれも都を追われて西国に身をよせていたときの歌。一首目および二首目は天子様のまします遠い東の空「いづる日の方」を「高天原たかまがはら」と慕いながら、「うちむせび」「なみだ

ながらに「天皇のご安泰、世の平らぎを祈りつづけた純忠の真心を詠んだもの。

三首目の「うらとけて」は心がうちとけて、「まじぬ」は車座くるまざの意。藤の花咲くあたり、心通う友との語らいがどんなに嬉しかったことか、藤の裏葉の「うら」と、うらとけての「うら」が重ねられ、そのはずむような言葉の調べが忘れがたい。逆境の中にありながら、このような豊かな友情が詠まれていたのも幕末の勤皇の志士たちの世界であった。

こうして五年の月日がすぎて慶応三年（一八六七）、王政復古と同時に許されて都に帰ったが、そのときはすでに、あれほどお慕いしていた孝明天皇はすでにこの世の方ではなかった。実美は帰京の翌日、泉涌寺せんたうじ（京都市東山区）に赴き孝明天皇の「後月輪東陵」に詣でたが、四首目はそのときに詠まれた五首の内の一。一首。「こうして御陵みささぎに詣でても、どうしてもそれが現実のことはとは思われない。夢の浮橋を渡っているようだ」と、その悲しみを「わたれども渡れども」という切迫した表現で表わしている。なおこの歌の前には「めぐみありてわれはみやこにかへれどもかへりきまさぬきみぞかなしき」「かなしくも雲がくれにし月の輪のみはかをがむは夢かうつつか」などがある。「かへりきまさぬ」は（お亡くなりになって）お帰りにならない、「雲がくれにし」はお亡くなりになったの意。

なお、昭和天皇が昭和四十二年（一九六七）、明治維新百年祭の前年、孝明天皇の御陵に参拝されたとき「百年ももとせのむかししのびてみささぎををろがみをれば春雨のふる」とお詠みになったことも、あわせて忘れがたい。「をろがみ」はおがむの意。「百年のむかし」、それは孝明天皇崩御の年、実美が御陵の前に額ぬかずいた年であった。こうして実美は翌明治元年（一八六八）、岩倉具視と

ともに新政府の副総裁となり「五ヶ条御誓文」発布に奉仕、その後、征韓論争、西南の役など波乱に満ちた明治の初期にあつて明治天皇の絶大なるご信頼を受けて明治二十四年（一八九二）、その生涯を終えた。五十五歳。

かずのみや、せいけんのみや
和宮（静寛院宮）

惜しまじな君と民とのためならば身は武蔵野の露と消ゆとも

世の中のうきてふうきを身一つに取り集めたる心地こそすれ

和宮は第二百十代・仁孝天皇にんこうの皇女、孝明天皇の御妹。ご誕生に先だつて父君が突然崩御されたため、生涯、仰ぐことのできなかつた父上を慕いつつ、兄君、孝明天皇のご庇護のもとに成人された。その頃、国内はペリーの来航を契機に騒然とした空気に包まれていたが、開港の勅許を得られなかつた幕府は幕権強化のため公武一和を標榜、安政五年の秋頃から將軍家茂いえもちに、十三歳におなりになつた宮の降嫁を画策するに至つた。天皇は、宮はすでに有栖川宮熾仁親王あすかのみやたるひととのご婚約もあり、きびしく拒絶されたが、幕府はご降嫁があれば鎖国体制に戻かへることを誓約したためついに勅許、宮も承諾されて文久元年（一八六一）、江戸に下向げこうして翌年婚儀をあげられた。

しかし幕府はその約束を無視、事態は暗澹たるままに推移、しかもその後五年、夫の家茂は第

一次長州征伐のため、大阪に滞陣中に急逝。宮はご薙髮（髪を剃って仏門に入ること）、静寛院と称せられた。その後、政情はさらに緊迫、大政奉還のあと慶応四年（明治元年・一八六八）、朝幕の開戦となり、官軍が江戸に到達したときは、宮ご自身が朝廷と幕府のはざまに立つという最悪の苦境に立たれたが、毅然としてこれに対処、今は亡き將軍家茂の妻として、徳川の家門を保つべく渾身の力を注いでこの難局を収められた。

ここに掲げた二首のお歌は宮の悲痛なご心情をお詠みになったもの。とりわけ一首目のお歌は当時の人々が口から口へと語り伝えて、国を挙げて宮のお心をお偲びした名歌である。「惜しまじな」は惜しむまい、「消ゆとも」は消えることがあってもの意。

二首目の「うきてふうき」は「憂きという憂き」で、すべてのつらい苦しい思いの意。宮はその後、明治二年から七年まで京都に滞在されたあと、ふたたび東京に帰り、明治十年八月、ご病氣療養中、箱根の「塔の沢」でご逝去、波乱に満ちた三十二歳のご生涯を終えられた。

津川喜代美

かねてより親の教のときはきてけふのかどぞ我はうれしき

津川喜代美は白虎隊の隊員。白虎隊は戊辰戦争（明治維新における政府軍と旧幕府軍との戦いの総称）時の会津藩の十六、十七歳の少年部隊であった。慶応四年（一八六八）八月二十三日早朝、

その一隊が猪苗代湖畔の戸ノ口原の戦いに参戦したが敗れ、若松に退却しようとする間道をたどって飯盛山に登ったが、遠望する会津鶴ヶ城は火煙に包まれて見えた。城は落ち、藩主も亡くなられたかと、ここに十九名の少年が自決する。名高い飯盛山、白虎隊の悲話である。

作者はその一人で当時数え年十六歳。「かねてより親に教えられてきたことを行動に移すときが来た」という出陣のときの作である。「親の教」とは、現代日本にはまったく失われた戦い方、死に方の作法である。素直な歌で、親の教えに一点の疑いももたず「死を見ること帰するがごとき」涼やかな眼差しを見る思いである。

西郷千重子

なよ竹の風にまかする身ながらもたわまぬ節はありとこそきけ

西郷千重子は会津藩家老西郷頼母の妻。前項に述べた戸ノ口原から新政府軍は一気に会津城下に侵入した。当時、会津藩の青壮年藩士は軍務に出払っていた。西郷家では、家を守る母と妻千重子が子女に向かつて、「お城に入って殿様に従いたいのが、子連れではかえって足手まといになるやもしれぬ、むしろ自刃して国難に殉じたい」と伝え、長子のみを城に入れ、残るすべての家族ともども自刃した。

その千重子の辞世の歌である。「弱いなよ竹のように吹く風に連れてゆれ動くばかりの弱い女

の身だが、そのなよ竹にはどんな強風にも曲がらない節ふしがあると聞く。私も節義に殉じて一死を選ぶ」という意。優美にして威厳をたたえた格調高い武士の妻の辞世である。下の句、とくに「ありとこそさきけ」という決然とした表現が強く響く。享年三十五。

七——明治時代



明

治元年三月、明治天皇が、天地の神々にお誓いになった「五ヶ条御誓文」の第一条に「広く會議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ」というお言葉がありますが、その「公論」の「公」という一字は、明治という時代を象徴する大切な言葉だっと思われまふ。それまで日本の国では、それぞれの世界が「士農工商」という階級や、藩と藩の區別というように、すべてが「私」の世界に分断されて、それを幕府が統括するという体制でした。しかしこれからは、その垣根を取りはらって、お互いの心と心が直接にふれあうことができる、そういう世界になったというよろこびが、この「公」という一字にこめられているのです。しかしそれは国内だけのことはなかった。これまでの「鎖国」という「私」の世界から、晴れて世界の人々の心とふれあうときの緊張とよろこび、それがあの外来の文化を積極的にとりいれて活気あふれる明治の文化を生み出す原動力となつたのです。もちろんペリー来航以来の西歐諸国の東洋への侵略の動きに対しては、それなりに目配りをしながらも、むしろそうであればあるほど、一刻も早く、彼らに対抗できる力を身につけるために明治の人々は全力を尽くしたのです。

しかし日本にとってまことに不幸なことに、海を隔てた

朝鮮と清はこのような外来の文化に何の反応も示さず、しかも西歐諸国の東洋に対する侵略の意図についてもまったく関心をもとうとはしなかったのです。当時の清はアヘン戦争以来、まったく開志なく、朝鮮は清の顔色をうかがうばかりで、文字どおり「私」の世界にひたっていたのです。こういうことでは日本は自らを守ることもできないし東洋は自滅するばかりでした。それを打開するためには、まず清に朝鮮を独立国として認めさせなければならぬ。こうして戦ったのが日清戦争であり、その戦乱を奇貨として、満州、朝鮮半島を制圧して、日本に迫ろうとするロシアの侵略の魔手を排除するために、東洋の運命を一身に背負つて戦ったのが日露戦争だったのです。明治天皇に「うつせみの世のため進む軍には神も力をそへざらめやは（きつと添えてくださるはずだ）」という御製がありますが、まさにこの二つの戦争は「世のため進む軍」だったのです。そして人々がそのことを確信していたからこそ、日本は奇跡の大勝利を勝ちとることができたのです。こうして東洋の小国日本は、明治天皇を中心に全力を尽くして生き抜き、世界の人々を驚嘆せしめ畏敬せしめました。「明治」とはそういう輝かしい、希有な時代だったのです。

三條西季知

君よ君よくみそなはせ富士の嶺は国の鎮めの山といふなり

慶応四年（一八六八）三月十四日「五ヶ条御誓文」が發布され、九月八日には元号が慶応から明治に改められたが、さらに明治新政の画期的な第一歩として遷都の儀が決定、九月二十日、天皇のご鳳輦（お車）は桓武天皇以来の千年の古都、京都をあとにして、新都東京に向けて出発されたのである。

この歌はその行幸の途次、明治元年十月七日、み車が駿河湾沿いの原駅にお着きになったとき、目前にそびえ立つ富士の霊峰を仰いで、お供に仕えていた三條西季知が天皇に奉った一首である。かねて繰り返して陛下がお耳になさっていたあの富士の神山を、陛下よ、よくよくご覧になりお心にとどめてくださいませ、この日本の国をとこしえに護りたまうこの神々しいみ山、その秀麗な山の姿こそ日本のあるべき姿と存じます「君よ君」と十七歳の若き天皇をお守り申しあげ、お励まし申しあげようとする切々たる思いをこめて詠まれたのであろう。明治という時代がどのようなして始まったのか、それを象徴する忘れがたい一首である。

三條西季知は文久三年（一八六三）、八月の政変で三條実美らとともに都を落ちて長州に身を寄せた「七卿落ち」の一人、維新以後は明治天皇の側近として生涯を終えた。

副島種臣そうじまねおみ

汝がためにはしる涙は民のため君の御ためを思ふすゑから

神といへばうはそらのこと思ふらむ大國主の背に負はれつつ

副島種臣、号は蒼海そうかい。佐賀、鍋島藩の生まれ。若くして「日本一君論」を唱えた、兄枝吉神陽えだよししんやうの強烈な感化を受けて成長。明治二年（一八六九）、参議となり、同四年、樺太の領土確定交渉に活躍。さらに翌五年、外務卿として南米ペルーに売られようとしていた清国の苦力クワリ二百三十余名を解放し、当時世界中に黙認されていた奴隷売買の悪弊を一挙にして葬った、いわゆる「マリ
ア・ルーズ号事件」で、日本外交の栄光を世界に示した。しかし同年、西郷隆盛らとともに「征韓論」を唱えたため参議を辞任、その後、明治十二年、侍講じこうとして天皇の側近に奉仕、天皇の絶大なご信頼を受けたが、その翌年健康上の理由で侍講を拝辞しようとしたとき、天皇は「朕之ヲ聞キ愕然がくぜんニ堪へズ。……卿亦宜シク朕ヲ誨をしへテ（教えて）倦ムコト勿ルベシ」という御宸翰ごしんかんをお下げわたしになって留任せしめられている。

一首目の歌は「南洲を祭る」という西郷隆盛（南洲）の死を悼む四首連作の最初のもの。「はしる涙」は、とめどもなくあふれ出る涙、「民のため天皇のためを思えば思うほど、西郷の死が限りなく悲しく、涙がとめどもなく流れてくる」の意。連作の最後の歌は「つみ（罪）あるかは

たつみなきか罪あるもなが（汝が）功はつぶさるべきや（罪があるのか、あるいはないのか、たとえ罪があったとしても、あなたの残した功績が無視されることがあろうか）。荒々しい言葉の中に作者の友を思う至情が偲ばれる。

二首目は「人々は大国主の背に負われながら生きている、なのになんかどうして「神」などは、ありもしないものだというのだろう」の意。作者の大国主命への信仰は深かった。彼は目に見えないものはこの世には存在しないという俗論を許さなかった。「靈魂不滅」を嘲笑した人に向かつて「靈魂は不滅だ、それを疑うなら私が死んだあと、その『靈魂の不滅』をお目にかけてよう」と言うなり、その座を立ったという逸話は有名である。明治三十八年没、七十八歳。

福本日南
ふくももちぢなん

火の国の瓊の浦曲の夕なぎに八十島かけて船出しにけり

思ひきや眞楯が岡に君を置きて眞葦の浦を舟出せんとは

福本日南は安政四年（一八五七）、福岡の生まれ。新聞記者を経て『九州日報』『西日本新聞』の前身）主筆、のちに代議士もつとめた。万葉調の歌をよくし『日南歌集』があるが、その他、当時ベストセラーになった『元禄快挙録』など多くの著書も残している。

掲げた歌はいずれも菅沼貞風すがぬまていふうに関するもの。貞風は平戸藩（長崎県）出身で幼少より学に志し、帝国大学の卒業論文「大日本商業史」は大いに注目を集めた。明治二十一年（一八八八）夏、二十四歳の貞風は仲介者もなしに八歳年上の日南宅を訪問。談論風発、半日にしてたちまち意気投合し、翌年の春には大志を抱いてフィリピンに渡った。

一首目は貞風が待つマニラへ出航するときの歌。「火の国」は肥の国（肥前）、「瓊の浦曲」は長崎港の旧称で、「八十島」は大小七千の島からなるフィリピンを指す。「かけて」はめぐりかけて。長崎の夕なぎ穏やかな海から、勇躍、南洋の国に向かって船出したことよ、の意。「八十島かけて漕ぎ出す」という古来しばしば詠まれたモチーフに沿いつつ、アジア進出の大望を堂々と詠んでいる。その後、二人はマニラで欧米を凌ぐべきわが国の外交と貿易につき、寝食をともにしながら調査しかつ語り合ったが、滞在約三カ月で突然の病に冒された貞風は、日南に看取られて一晩のうちに急逝した。享年二十五。

二首目、「眞楫が岡」は、貞風が埋葬されたマニラ郊外の丘陵地マカティ。壮図そうとを抱いた貞風は異国の土となり、思わずもただ一人マニラ港（眞菲の浦）をあとにする日南の、亡き友を思う挽歌である。現在のマカティは高層ビルの林立するフィリピン一の街区だが、明治の中期ここを舞台にした青年たちの骨太の友情が偲ばれる。

吹きかへす秋のの風にをみなへしひとりはもれぬものにぞ有ける

近代文学史上に残る女流作家、樋口一葉は明治五年（一八七二）、東京の生まれ。母、妹との苦しい家計を支えるためにも小説創作に励んだが、一方で十五歳から中島歌子門下で歌を詠み、当時はむしろ和歌の世界を大切にしていた。また一葉には丹念な日記もあり、女性らしい細やかさとともに国民の一人として世情を憂える真情があふれている。

無名時代の『塵中日記』（明治二十六年十二月二日）には、「（鶯の爪や獅子の牙が隙を狙うような日清戦争前の情勢下）内に兄弟かきにせめぎて（同胞同士であれこれ争って）、党派のあらそひに議場の神聖をそこなふ」と帝国議会の混乱ぶりを書きとめているが、この歌は、そのような世相を、「吹きかへす秋のの（野）風」吹きすさぶ秋風になぞらえ、風にゆれる女郎花にわが身を重ねて、「ひとりはも（漏）れぬものにぞ有ける」女性ながらも自分一人がこの局面を傍観するわけにはいかないと気概を示した。

その後『にぎりえ』（明治二十八年）『たけくらべ』（同二十九年）などの名作を次々に発表して注目を集めはじめた矢先、肺結核に倒れて二十五年の薄幸の生涯を閉じた。

野中千代子

けふこそは御代の祝ひの時なれやいざや御旗を打ち掲げぬべし

野中至・千代子夫妻はともに福岡の生まれ。当時は天気予報の基礎データとなる高地観測が世界的にも求められており、明治二十八年（一八九五）十月に夫の至（二十九歳）が単身で富士山頂の冬期氣象観測に挑戦するや、千代子（二十五歳）は独断で娘を実家に預け、姑には「是非にわらは（私）御供致し度く……」と書き置きをして登頂。驚く夫に合流して食事の賄いから観測助手まで一心同体で活躍した。

やがて迎えた十一月三日の天長節（明治天皇のお誕生日）、至は今日の吉き日を祝って富士山頂上に国旗を掲げようと試みるが、たちまち烈風に飛ばされそうになる。その様子を千代子は一首の歌にした。昼夜休まない観測による疲労や高山病・凍傷からくる体力消耗も顧みず、全国民が寿ぐこの日を夫婦で祝う健気さにあふれたこの歌は、専門歌人とは異なる世界で懸命に生きた一女性に見る、明治という時代の底力を伝えている。

翌月二十日過ぎ極限状態で救出された二人の快挙は海外でも広く報道された。新田次郎の小説『芙蓉の人』は野中夫妻の心情を描いてあますところがない。

よきののてつかん
与謝野鉄幹

から山に桜を植ゑてから人にやまと男子の歌うたはせむ

韓からにしていかでか死なむわれ死なばをのこの歌ぞまた廃すたれなむ

与謝野鉄幹は明治六年（一八七三）、京都の生まれ。二十歳で上京し落合直文なおがみと出会って新派和歌運動に加わり、二十七年には「亡国の音」を発表して宮中和歌所中心の旧派を痛烈に批判した。一首目は、翌二十八年、日清戦争終結直前に渡韓した折の歌。鉄幹は友人が経営する学校で韓国の人々に日本文学を授け、かねて日本唱歌を教えようとするが、歌の意も同様で「韓の山に桜を植からえ韓の人に日本男児の歌を歌わせたい」と、二十三歳の昂揚した使命感を詠んでいる。だが滞在三カ月目に腸チフスをわずらって二カ月間の入院を余儀なくされた。

二首目はその病床で、「異国で自分が死ねば日本おこで興りつつある大丈夫の歌は廃すたれるだろう。それを思えばとても死ねない」と詠んだ。傲岸ごうがんともいうべき満々たる自信で病気の不安を振り払おうとした歌か。

前後三回の訪韓後に詩歌集『東西南北』『天地玄黄てんちげんこう』を発表し、勇壮な気分の吐露を楽しむ「ますらをぶり」（虎剣調こけんちようと呼ばれる）を確立したが、明治三十二年には「新詩社」を結成、妻晶子（本書246頁参照）とともに浪漫主義を標榜し、機関誌『明星』は一世を風靡した。

輯取道明かとりみちあき

郭公ぼくこう声もあはれに聞ゆなりなれも昔を偲おもびてやなく

楫取道明は長州の生まれで吉田松陰（本書153頁参照）の甥（父は松下村塾の高弟小田村伊之助、母は松陰の妹ひさ）にあたる。明治二十八年（一八九五）に台湾領有が始まるや、道明は学務部長心得の伊澤修二とともに治安・衛生劣悪な台北郊外の芝山巖に赴き、日本語による師範学校を開設したが、翌年元日、土匪に襲われて楫取はじめ六人の教師は全員殉難した。道明は三十九歳、最年少者は十九歳だった。だが六人は死後も「六士先生」と慕われ、「芝山巖精神」は台湾において公に尽くす日本精神教育の指針となった。その後続々とここを巣立った日台双方の教師は全島の初等教育に邁進し、やがて就学率は台湾の全人口の九割を超えるなど驚異的な成果をあげた。歌は連作中の一首で「松陰神社祭日に」と詞書がある。維新後松陰の親族が萩に建てた小さな祠の祭礼日（五月二十五日。松陰は安政六年の同日、江戸に送られ、同年十月二十七日処刑）に参拝した折の歌であろう。

郭公の鳴き声が感興を催す中で、お前も昔が懐かしいのかと鳥に呼びかけながら伯父松陰のありし日を切に偲んでいる。かつて獄中の松陰から道明の初節句を祝って漢詩が贈られた（己未文稿）所収）ことなど脳裏に浮かんだのかもしれない。やがて台湾の教育に殉ずる道明の心中を察すれば、松下村塾の精神と芝山巖精神を結ぶ一筋の糸が思われてならない。

心あらば此民草のかれのべに露ほどだにも月やどりせよ

田中正造は栃木県出身の政治家、社会運動家で「足尾銅山鉍毒問題」に生涯をかけた。明治二十三年（一八九〇）から十年以上衆議院議員をつとめ、鉍害問題について政府追及や世論喚起に力を入れたが、しだいに政治に失望して議員を辞職。思いあまって明治天皇に窮状を直訴したこともある。この歌は、人間社会での無力感を覚えた正造が、人々の住む「枯野辺」汚染により不毛の地と化した田畑の上を、「露ほどだにも」ほんのわずかでも、「月やどりせよ」月が照らし恵みをもたらしてほしいと、大自然に助けを求めたもの。

晩年は被害の中心地谷中村に移住し「谷中蘇生せば国また蘇生せん」の信念で、国家のために社会正義を実現しようと戦い続けて七十三年の一生を終えた。またキリスト教にも深く学び、死の枕辺には「帝国憲法」と「マタイ伝」を白糸で綴り合せた小冊子があったと伝えられている。正造の社会運動は、いかにも明治人らしく国の道義の実現をつねに念頭に置き、当時萌しはじめた無政府主義的破壊活動などとは無縁のものであった。

あまたぐあふ
天田愚庵

父母と見れば夢なり夢にだに其の面影よ消えずもあらなん

まさきくて在せ父母御仏のめぐみの末にあはざらめやも

起きてをればひざにかきなで寝る時はまくらべさらずはしき犬ころ

陸奥の国、磐城平藩（福島県）に生まれた愚庵は、幼少ながら維新後の戊辰戦争に志願。藩は敗れ、父母、妹と別離した。親を求めて流浪する日々。しかし、杳としてその行方は知れなかった。辛苦の末東京に出て、山岡鉄舟（幕臣として江戸城無血開城に功績あり、明治初期に活躍、剣道の達人）に出会い、その直情の気性を愛でられて、以後一生の師と仰いだ。写真師に身を変え、写真を撮りながら親を探す日々もあった。二十八歳の頃、清水次郎長のもとで可愛がられ、その養子となる。愚庵はのちに『東海遊俠伝』を書き、次郎長の名を全国に広めた。その後も親を恋うる気持ちやみがたく、また友人一家の死に遇ったのをきっかけに、三十六歳にして出家得度。この間、陸羯南（新聞『日本』主筆）や正岡子規と親交を結び、親を尋ね求めた記録『血涙録』を著した。

一首目、父母を探し求めて山形に行き、ついに会えず一夜の宿で詠んだ歌。夢で会った父母よ、「夢にだに其の面影よ消えずもあらなん」せめて夢だけでもその面影は消えないでほしいと、夢から覚めた愚庵は布団の中でしのび泣いたという。

二首目、「まさきくて在せ父母」父上、母上、どうぞご無事でいてください。「御仏のめぐみの末にあはざらめやも」み仏の恵みによって、いつの日かお会いできないことがありますかと、

僧となつてからも、別れた父母への思慕を切実に詠んでいる。愚庵は、親を失つた子供を見ては、自分と同じ境遇に涙した。雨の日、草庵のかたわらに鳴く雀の子に向かつて、「小雀はこの降る雨に立ちぬれて親鳥呼ばふ声を限りに」と詠んだ。

三首目は、子規宛ての手紙に書き付けた木彫りの「犬の子」を詠んだ七首連作のうちの一首。

「起きていれば膝においてかきなでてやり、寝るときは『まくらべさらず』枕のそばを離れない、あなんと可愛い犬ころ『はしき犬ころ』よ」。連作には「朝もよし木には彫れども犬の子のよばばよりこむ巻尾ふりつつ」「朝夕に汝をし見れば玉きはる命も我は長くと思ほゆ」などがある。「朝もよし」は「木（紀）」、「玉きはる」は「命」にかかる枕詞。

結核に悩み、幾たびか喀血。晩年には桃山に庵を結び、五十一歳の生涯を終えた。

正岡子規

人丸ひとまるの後の歌よみは誰かたれあらん征夷大將軍みなもとの実朝さねとも

真砂まさごなす数かずなき星の其の中に吾に向ひて光る星あり

佐保神さほがみの別れかなしも来ん春こにふたたび逢はあんわれならなくに

いちのはつの花咲き出でて我が目には今年ことしばかりの春行かんとす

正岡子規は、明治を代表する俳人、歌人。慶応三年（一八六七）、四国の松山に生まれる。文科大学（東京帝国大学）国文科に進んだが中退、日本新聞社に入社。明治二十四年（一八九一）頃から、俳句の革新に取り組み、三十一年には、『歌よみに与あたふる書』を新聞『日本』に連載、短歌革新に全力を注ぎ、翌年子規庵に歌会を開いた（根岸短歌会）。『古今和歌集』以来の迷妄を破り、『万葉集』をよりどころとして、体験にもとづいた写生による作歌を主張。連作短歌を重視し、近代短歌の基礎を確立した。最後の数年間は、脊髓せきずいカリエスのためほとんど寝たきりのまま、病床を離れることはなかった。

一首目は、明治三十二年の作で、「金槐きんかい和歌集を読む」八首中の一首。『歌よみに与ふる書』の中で子規は、「近来和歌は一向いっこうに振ふるひ不ふ申候。正直しんじきに申し候へば万葉以来実朝以来一向に振ふるひ不申候」と言い、実朝（本書94頁参照）を「実に千古の一人と存ぞんじ候」と絶賛している。歌は『万葉集』の中心的歌人柿本人麻呂のあと、歌人はあまたいるが、真の歌人は誰であろう、それはただ一人征夷大将軍源実朝である」の意。歌人、実朝への敬愛の念が、端的、率直に表現されており、力強い。短歌革新への意気込みが伝わってくる歌である。

この年の前年には、子規はすでに歩行の自由を失っていたが、その病床にあって「足たたば北インヂヤ（インド）のヒマラヤのエヴェレストなる雪くはましを」（連作八首中の一首）と気宇壮大な歌を詠んでいる。「雪くはましを」は雪を食たらたろうにの意。肉体は不自由であったが、そ

の精神は時空を超えてあまねく世界を飛翔することく、雄々しく生命力にあふれていたのである。二首目は、「星」という詞書の七首の連作中最初の一首。「真砂なす数なき星」とは、砂を撒いたように夜空に光る無数の星という意。そのあまたの星の中に、自分に向かって語りかけるように輝く星に心惹かれて詠んだ歌である。連作二首目には、「たらちねの母がなりたる母星の子を思ふ光吾を照せり」と詠んでいる。「たらちねの」は「母」の枕詞。「母が、天上の星となつて、子供をあたたく見守るかのように、その星のあたたく光は私を照らしてくれている」という意。子規は、難病と格闘する自分をあたたく目で見守ってくれる母の無窮の愛を一つの星の光の中に感じたのである。

三首目と四首目は、『墨汁一滴』ぼくじゅういつてきの中に収められている、明治三十四年の晩春に詠まれた子規の代表作、「しひて筆を取りて」という十首の連作中のもので、「佐保神の」の歌は連作一首目の作。「佐保神」とは、春の女神のこと。「今年の春との別れは本当に悲しい、まためぐって来るであらう来年の春に、ふたたび逢える身ではないものを」という意。自己の限られた生命への凝視ぎやうしと、行く春への愛惜の情が切々と詠まれている。

次の歌の「いちはつ」は、晩春から初夏にかけて咲くアヤメ科の植物で、花は白又は紫。「すがすがしいいちはつの花が咲き出したが、病に臥すわが身にとつては、それを見ることができるのは、今年限りであろう。だが、その『今年限りの』春ももう過ぎ去ろうとしている」の意。

子規は、その翌年、明治三十五年（一九〇二）の春を迎えることはできなかったが、九月十九日未明、三十六歳の生涯を終えた。歌集に『竹の里歌』、随筆に『墨汁一滴』『病床六尺』『仰臥漫録』ぎやうがが

ある。

伊藤左千夫

牛飼が歌よむ時に世のなかの新しき歌大いにおこる

焼太刀の鋭刃の明けき名に負へる日の本つ国民こそり立つ

おりたちて今朝の寒さを驚きぬ露しとしと柿の落葉深く

伊藤左千夫は、元治元年（一八六四）、千葉県成東町の農家に生まれる。明治二十二年（一八八九）、東京の本所茅場町で牛乳搾取業を開業、終生の業とした。新聞『日本』に発表された正岡子規の短歌革新運動に共鳴、「根岸短歌会」に参加した。子規没後、明治三十六年、長塚節らとともに『馬酔木』を創刊、旺盛な活動を行なった。明治四十一年『馬酔木』廃刊後は蕨真の『阿羅々木（アララギ）』に拠ってその編集にあたった。大正二年（一九一三）七月、脳溢血のため五十歳で急逝。小説『野菊の墓』（明治二十九年）がある。

一首目は、『左千夫歌集』の冒頭に収められている「牛飼」という題の一首。「牛飼をしている一庶民の自分のようなものが歌を詠むときにこそ、新しい世の中にふさわしい新しい歌が大いに

興隆するのだ」という意。堂上派や桂園派等、当時の「旧派和歌」は、公家や学者等の限られた人々の間で弄ばれ、「風雅」にとらわれて優美な世界ばかりを追求するものが多かった。だが子規によって、新しい短歌のあり方に開眼した一牛飼が、歌を詠むことの時代的意義を高らかに宣言した歌である。

二首目は、「起て日本男児」という詞書がついた五首の連作に続いて、「開戦の歌」と題して日露開戦当時の国民の決意を表現した歌である。「焼太刀の鋭刃の」は、「明けき」を引き出す序詞となっている。「焼太刀」は、焼き鍛えられた鋭い太刀のこと。「焼き上げた鋭い日本刀のように、古来すがすがしい生き方をもって聞こえた日本の国民がいま心一つにして立ち上がった」という意。当時の国民の決意を自らのものとして力強く詠んでいる。

三首目は、大正元年、左千夫死去の前年に詠まれた「ほろびの光」という五首連作中の一首目。庭に降り立ったときに肌にしみた秋の寒さを詠んだ歌。三句切れの歌であるが、「露し」と柿の落葉深く」という下句が、深い余韻をもっているため、歌としての調べが途中でとぎれることなく、一筋に連なって読む人の心を打つ。「柿の落葉深く」という字余りの重厚な表現の中に、染み入るような寂寥感があふれている。

ひろせ たけお
広瀬武夫

いさましさを何にたとへむ海の上に門出を送る万歳のころゑ

天皇の御声かしこしものふのなにかたるべき功なくして

広瀬武夫海軍中佐は大分県竹田出身。明治三十年（一八九七）、ロシアに赴任、駐在武官として活躍し、帰朝した。明治三十七年二月六日、日露の国交は断絶。東郷司令長官は、旅順（遼東半島）、仁川（朝鮮半島西海岸）両港のロシア太平洋艦隊を討つべく、同日午前九時、第一、第二艦隊を率いて威風堂々佐世保を出港した。

その折の作が一首目の歌。十九隻の主力の僚艦とともに出撃する戦艦「朝日」の甲板に立ち、引きもきらず続く勇ましい万歳の声に送られながら、その「いさまさを何にたとへむ」と詠む中佐の胸の高鳴りが聞こえてくるような歌である。

中佐は、十八日後の二月二十四日、旅順港口第一回閉塞作戦に参加、「報国丸」を指揮した。この作戦に対して明治天皇より勅語を賜わった。「連合艦隊ノ旅順港口ヲ閉塞セムトシタル壮挙ヲ聞ク。朕深く其事ニ与カリシ將校下士卒ノ忠烈ヲ嘉ス」である。二首目は、この勅語を拝した折の作。「かしこし」とは畏れ多いの意。このような勅語をいただいたが第一回の作戦は成果不充分で、五隻のうち港口自沈に成功したのは、広瀬中佐指揮する「報国丸」一隻のみであった。「ものふのなにかたるべき功なくして」帝国軍人として何一つ語ることできる手柄を立てずして、とは、無念の吐露であり、再挑戦への決意の表われでもある。

中佐はさらに、三月二十七日、第二回の閉塞作戦に「福井丸」を指揮して参加。作業は成功し

たが、引き揚げ直後に敵の砲弾に当たり、肉一片をボート内に止めて散華した。享年三十七。離艦、引き揚げの際に、身の危険をも顧みず部下、杉野兵曹長を求めて二度三度艦内を探しまわった模様は、部下を思う至情として国民の共感を呼び起こし、やがて、「轟く砲音 飛来る弾丸」に始まる文部省唱歌「広瀬中佐」の中の「杉野は何処 杉野は居ずや」の歌詞となって唱われた。

たちばなしゆうた
橋 周太

海山をとほくへだてて行く旅も君やすかれとただ祈るのみ

橋周太は長崎県島原半島出身の陸軍中佐。明治二十四年（一八九一）一月から二十八年十一月まで東宮武官を拝命、皇太子殿下（のちの大正天皇）に奉仕した。この歌は東宮武官になって約半年後の七月下旬、皇太子殿下の伊勢二見か浦方面行啓に供奉（お供）した折のもので、「将に東京を出発せんとする時」という詞書がある。皇太子殿下の無事をひたすら祈る中佐の一途な真心が、そのまま歌に表われている。

明治三十七年八月末、遼陽総攻撃において、中佐は、歩兵第三十四連隊第一大隊を指揮して戦闘に参加。遼陽の西南八キロの高地をいったん占領したが、全身に七カ所の重傷を受け、その夜落命した。享年四十。壮烈な戦死のさまを描写した「遼陽城頭夜は闇けて」に始まる軍歌「橋中佐」は、前述の唱歌「広瀬中佐」とともに大東亜戦争の終結まで多くの人々に愛唱された。

乃木希典のぎまれいけん

弓張ゆみはりの月もいるなりいざや討うて驚おどろのすむてふ仇あだのとりでを

黒駒くろこまに白泡しろあわはませますら雄をが岩いはが根木きの根ふみさくみゆく

うつし世を神さりましたし大君おほきみのみあとしたひて我われはゆくなり

乃木希典は山口県出身の陸軍大将。明治三十七年（一九〇四）八月十九日、歴史に残る日露戦争・旅順要塞攻囲戦の第一回総攻撃が、乃木第三軍司令官の命令一下開始された。

一首目は夜襲戦の折の作。「弓張の月」とは弦つるを張った弓のような月。双頭の「驚」はロシア皇帝の紋章で、ロシア（帝政ロシア）の国旗にもデザインされている。月冴きゆる夜の山腹をひた進む皇軍の兵士たち。弓張の月の引き絞るその矢の先にあるものは、ロシア軍の立て籠こもる要塞である。折しも、弓張月は山の端はに沈しづもうとしている。月が隠れば、われを利する漆黒の闇となる。攻撃のための諸条件は今やすべて整えり、いざや討うて。祖国の命運を賭け、まさに乾坤けんこん一擲いってきの戦闘が開始されようとしている、その緊張感みなぎる力強い歌である。「いる」は、「射る」に「入る（月が沈むの意）」を重ねているのだらう。

明治四十年代には大和地方や京阪地方で陸軍大演習が行なわれた。二首目はその折の作。「黒駒」とは黒毛の馬、「白泡はませ」とは馬の口から白い泡をふかせるほど馬を勇みたさせて、「ふみさくむ」とは踏み分け進むの意。黒駒を御しながら、人馬一体となって岩や木の根を踏み分け進みゆく軍列の様子が、緊張した調べて表現されている。

三首目の歌は、大正元年（一九一二）九月十三日の夜、明治天皇御大葬に際し、御靈柩（天皇の御柩）発進を告げる号砲の轟きを聞きながら殉死した乃木將軍の辞世である。「うつし世」とはこの世、「神さりました」とは崩御されたの意。「みあとしたひて」の一語に万感の思いがこめられている。將軍の死出の旅路にお伴した静子夫人の辞世は、「出でましてかへります日になしとさくけふの御幸に逢ふぞかなしき」であった。

東郷平八郎

日の本の海にとどろくかちどきは御稜威かしこむ声とこそしれ

おろかなる心につくす誠をばみそなはしてよ天つちの神

東郷平八郎は鹿児島出身の海軍大将、元帥。日露戦争の際に抜擢され、連合艦隊司令長官をつとめた。明治三十八年（一九〇五）五月二十七日早暁、全国民が固唾を呑む中、哨戒中の「信

濃丸」が敵の艦影を発見。東郷司令長官はただちに連合艦隊に出動を命じた。午後一時五十五分、旗艦「三笠」のマスト上に高くZ旗を掲揚して、「皇国ノ興廢此ノ一戦ニ在リ、各員一層奮勵努力セヨ」との命令を発信、総員、戦闘態勢に入った。午後二時五分、わが主力艦隊は敵前大回頭、午後二時十分、戦闘の砲門を開いた。ロシア・バルチック艦隊三十八隻を二日間に殲滅し、世界海戦史上未曾有の奇跡的戦果を挙げた日本海海戦の幕開きである。

三日後の三十日、東郷司令長官は佐世保に入港。一首目はその折の作。「御稜威」とは、多くの御神靈に護られた天皇陛下の強い御威勢の意。東郷司令長官は、日本海海戦の輝かしい勝利は、天佑神助のもと、「天皇陛下の御稜威」の賜物であつたと心底から得心したのである。

大正三年（一九一四）、皇太子裕仁親王殿下（のちの昭和天皇）が学習院初等科をご卒業になつたあと、それに伴い東宮御学問所が開設され、東郷元帥がその総裁に選任された。その折の心境を詠んだ歌が二首目である。「みそなはず」は「見る」の尊敬語。「天つちの神」とは天地のあらゆる神々の意。この歌に示される神に通ずる至誠をもつて重任を完うしようとする覚悟は、東郷元帥の生涯を貫いた心情であつた。

『山桜集』

道すがらあたの屍かばねに野の花をひと一もと折りて手向たむけつるかななむらじま（中村寛）

御手のふるる心地せられて掛巻くもあやに畏きみ恵みの布(同右)

『山桜集』は、日露戦争の従軍将兵および遺族、銃後の人々の詩歌を日露戦争のさなかに集録・編纂したものである。詩歌の内容は、和歌（短歌、長歌）、軍歌、歌謡、俳句、漢詩に分類され、巻頭には明治天皇御製ならびに皇后宮御歌を掲げ、将士兵卒から銃後の国民におよぶ短歌千二百余首が掲載されている。発行は、明治三十八年（一九〇五）二月二十六日。当時の国民的情意を伝える大歌集が、戦局の予想もつかない熾烈な戦争のただなかで出版されていることは、注目値する。

中村覚は滋賀県出身の陸軍少将（のちに侍従武官長、大将）。日露戦争に歩兵第二旅団長として出征、旅順要塞攻圍戦に参加した。二度にわたる総攻撃の失敗をうけて、第三回総攻撃にあたり乃木第三軍司令官に意見具申。「白襷隊」なる三千余名の奇襲決死隊を編成、自らその指揮官になり勇名を馳せた。

一首目。「あた」とは仇、「敵」のこと。明治天皇の御製に「国のためあたなす仇はくたくともいつくしむべきことな忘れそ」（「な忘れそ」とは「忘れてはなるまいぞ」の意）があるが、一首目の歌は、この御製に呼応するかのような、「敵軍の屍に野の花を手向ける」、「いつくしみ」の心にあふれた「ますらお」の歌である。

二首目の歌の「掛巻くも」とは言葉に出して言うことさえも、「あやに」とはたとえようもなく、「畏き」とは畏れ多いの意。この歌には「病院にて手術を受けし折、恩賜の（皇后からいただ

いた) 包帯なりと承りて恐懼(恐れ入りか)しこまること)にたへざりければ」という詞書がある。「御手のふるる心地せられて」皇后様のお手にふれられているように思われて、という一語一語に身にしみる感情がこもっており、恩賜の包帯に感きわまった武人の姿を彷彿させる。

病なき我だに寒しこの頃はいためる母のいかがあるらむ(飯島茂)

飯島茂は山梨県出身の師団軍医部付き陸軍一等軍医。この歌には、「このごろの寒さ一入に厳しければ故郷に病める母の御身の上の思はれて」という詞書がある。故郷の母を偲ぶ歌には、この他に、山口県出身の陸軍工兵中尉、山本又彦の「心ゆくみやまの景色みる毎にみせまじものと母をしぞ思ふ」がある。遠く戦地にあつて、寒さが身にこたえるたびに故郷に病む母のことが偲ばれ、また、心を引かれ満ち足りた思いで山の景色をながめていても、故郷の母に見せたいものと、おのずと母のことが思われるのである。なお、明治天皇の御製に、「ひさしくもいくさのにはにたつひとは家なる親をさぞ思ふらむ」がある。「ひさしくも」は長い間、「いくさのには」は戦場の意。

生ながら打すてられし馬あはれ国のためとてともに出しを(名取為吉)

名取為吉は長野県出身の師団經理部付き陸軍一等主計。この歌には「前進の途すがらよめる」

という詞書がある。当時は、とくに現代戦と異なり、野山を疾駆する騎兵集団にとつても、また、補給を旨とする兵站集団にとつても、「軍馬」は欠くことのできない戦友であつた。作者はまた、「おのが身にひき比べても思ふ哉車ひきつつすすむつはもの」という歌では、「軍馬」を「つはもの」と詠んでいる。「生ながら打すてられし」とは、馬が骨折や負傷をしたために、やむなく置き去りにされたのであろう。「ともに」の一語に、作者の馬に対する血の通つた戦友としての思いがあふれている。

父の顔見覚え居よと乳児にいへどちご心なく打ち笑みてのみ(前田利定)

前田利定は群馬県出身の陸軍歩兵少尉。この歌には「家を出づる時よめる」という詞書がある。「心なく」たゞた無心に笑う乳飲み子を置いて出征する若き父親の心。ふたたびこの子に会えるかどうか定かではない。胸の張り裂けるような思いが伝わってくる。自分の命の流れがこの子に確実に受け継がれている、そう自分自身に言い聞かせて納得するよりほか術がない。「父の顔見覚え居よ」との言葉に、万感の思いがこもっている。愛おしいわが子を詠んだ歌には、この他に、「なく蟬に都のそらのしのはるる青葉のかけに我児あそばむ」(栃木県出身・陸軍歩兵大尉 河合照士)、「片言に君が代うたふいとし子のすがた映して夫におくらむ」(栃木県出身・陸軍歩兵中尉 手塚魁三の妻)等がある。

勇ましきはたらきせよといひさして涙に曇る母のみことば(猿田只介)

ふた親に妾わらはつかへむ国のためいざとはげますけなげなる妻(同右)

門かどの辺べに送るみ親ををろがめば泣かじとすれど涙こぼるる(同右)

手をつかへなみだぐみたる教子をしごの姿を見れば胸さけむとす(同右)

いざやいざ朝日のみ旗おしたててふみにじらなむ露つゆの醜草しごき(同右)

この五首は、猿田只介という無名の兵士の作で、「出征の折よめる」という詞書のついた連作七首の内の五首である。一首目には「勇ましきはたらきせよ」と言葉では励ましながら、涙声になり、ついには途切れてしまう母の言葉。「いひさして」とは言いかけての意。二首目には、心では泣いていながらも、両親は私がお守りするからお国のために、いざ、と、健気に励ます妻の凜とした言葉。三首目には、門前で見送る両親に、泣くまいとしても止めきれず頬を伝わり流れ落ちる涙。四首目の「手をつかへ」とは「手をつけて」の意。泣き出しそうになるのを手をついて必死にこらえながら、眼に涙をためて自分を見つめ見送る教え子たちの姿。作者は教師だったので、それを眼にした瞬間、張り裂けそうになる胸の内が、切迫した言葉で表現されている。

五首目の「露の醜草」の「露」は醜草の「草」の縁語。「醜草」は、相手に対する敵意を強調した表現。四首目までとは一転、祖国防衛のために、先陣を切つて敵軍を打倒せんとする激しい決意のほどが表明されている。

一首目から四首目にかけての厳肅悲痛な心の世界は、一見公おおよけの任務遂行に背く「私情」のよ
うに映る。現に、大東亜戦争のさなかに声高こゑだかに言われた「滅私奉公」というスローガンには、こ
の「私情の世界」が消されていた。一方、戦後の社会思潮は、「私情の世界」だけが主流を占め
ている。しかし、祖国防衛の任務達成のために、最後までわが身を捨てて勇敢に戦い抜く「国を
思う激しい心」をもちつつも、私わたくしの世界である「家族を思う切なき心」を直視しながら生きてゆ
く、遠い万葉の防人さきもり以来の「ますらお」の姿が、私たちの心を強く打つのである（本書67〜70頁
参照）。

おおすが まつえ
大須賀松江

つはものに召し出されし我せこはいづくの山に年迎ふらむ

明治三十八年（一九〇五）の新春に、例年どおり宮中、鳳凰ほうおうの間で歌御会始うたごかいはじめ（現在の歌会始うたごかいはじめの儀
のこと）が開かれた。一万余首の詠進歌の中から選に預あずかった歌が発表される中で、『山梨県、
陸軍歩兵二等卒妻、大須賀松江』と作者名が披露されたとき、参会者一同、ハツとした（千葉

胤明「明治天皇御製謹話」。二等卒といえは軍人の中でももつとも位の低い、その妻である。そのような身分の低い者の歌がこのような宮中の儀式の中で選ばれることは、異例であった。勅題は「新年山」。「つはもの」とは兵士、「せこ」とは妻が夫を親しんで詠んだ言葉。夫が戦地で無事に新年を迎えただろうかと案ずる、あるがままの妻の素直な歌であった。

この歌御会始における明治天皇の御製は、「富士のねに匂ふ朝日も霞むまで年たつ空ののどかなるかな」であった。「匂ふ」は色が美しく照り映える、「年たつ」は新しい年が始まるの意。日露の戦いに心を傷め心を砕いておられた天皇は、風雅の世界では一転して、じつに豊かな調べで御製をお詠みになった。

なお、この歌御会始のあとに明治天皇は、「あらたまの年たつ山をみる人のこころごころを歌にしるかな」と詠んでおられる。「あらたまの」は「年」の枕詞。「こころごころ」はそれぞれの人の思いの意。

あおきしげる
青木繁

わが国は筑紫の国や白日別母います国櫃多き国

明治の画壇に彗星のごとく現われ、若くして世を去った画家青木繁は、明治十四年（一八八二）、福岡県久留米に生まれた。筑後川が流れ、豊かな田園が広がる国。耳納連山の麓には櫃の

木がたくさん植えられ、秋になると檜紅葉が燃えるように美しい。

繁は中学時代絵画に志したが、父は猛反対、護ってくれたのは母であった。意を決して上京、東京美術学校に入学してからの目覚ましい油絵は、人々を圧倒した。「古事記」を好み、その中に主題を求めた『わだつみのいろこの宮（日子穂々出見命が訪れた「綿津見の宮」のこと、本書20頁参照）の他、『海の幸』などの名作を遺した。しかし、才気のままに傲岸に振る舞い、鬱勃たる感情を激しく表に出す繁から、人々はやがて去っていく。妻子とも友とも別れて故郷に帰った繁は、情熱のやり場もないまま酒におぼれ放浪の日々を送った。

この歌はその頃のものである。「白日別」は、「古事記」で用いられた筑紫の国の別称。自分が育ったこの筑紫の国の他に、母の側以外に心休まるところはなかったのであろう。結核を病み、三十一歳の若さで見守る人もなく息を引き取ったという。

石川啄木

ふるさとの訛なつかし

停車場の人ごみの中に

そを聞きにゆく

石川啄木は明治十九年（一八八六）、岩手県に生まれる。十七歳で盛岡中学を退学。上京し『明

星』に詩や短歌を発表、二十一歳、故郷の渋民村しぶたみの代用教員となる。翌年、北海道に渡り、転々と職をかえたあと上京。明治四十三年、歌集『一握の砂いちあくすな』を発表した。啄木には、社会主義に強く惹かれる思想的苦悩の中で詠まれた歌が多いが、その根底にある故郷、渋民村、盛岡、岩手に対する強烈な思慕の思いが、読む人の心を打つ。この歌はその望郷の思いを詠んだ代表的な作。停車場は上野駅であろうか。この他に「かにかくに渋民村は恋しかり／おもひでの山／おもひでの川」「やはらかに柳あをめる／北上きたかみの岸辺目に見ゆ／泣けとごとくに」などがある。「北上」は岩手を貫流する北上川のこと。「泣けとごとくに」は泣けというように。明治四十五年、二十七歳の短い生涯を終えた。

第百二十二代・明治天皇めいじ

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

いたでおふ人のみとりに心せよにはかに風のさむくなりぬる

国のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

さまざまの蟲むじのこゑにもしられけりいきとしいける物のおもひは

しづのをがかへす山田もうるほひてゆふべしづかに春雨ぞふる

あかずして庭にたかする篝火かがりびのうへともいはずちる桜かな

明治天皇は慶応三年（一八六七）、御年十六歳で天皇のみ位におつきになり、その年の十二月、「王政復古の大号令」が渙発かんぱつされ、以後、明治四十五年（一九一二）、六十一歳で崩御になるまで、明治という未曾有の時代を導かれた偉大なる天皇であられた。だがその卓絶した偉大さの根源は、時代に対するご見識、すぐれたご指導力は当然のこととしても、とくに心してお偲おぼびすべきは、天皇の、他に比類ないみ心の深さではあるまいか。そのご生涯でお詠みになったご詠草はじつに九万三千首を超えていると伝えられているが、その中で現在刊行されている八千九百余首の御製を拝誦しても、そこにみなぎる天皇の大御心おおみこころの真実に心打たれない人はいまい。そこに偲おぼばれるみ心の深さ、それこそがあの、世界を驚嘆せしめた明治の御世を導かれた根源の力だっと思われる。

ここに掲げた一首目の御製でお詠みになったのは、「まごころをうたひあげたる言の葉」人の心の真実を表現することができた歌は、一度耳にすれば忘れられないという意であるが、天皇に

とつて歌をお詠みになることはこの「まごころ」にふれること、その「まごころ」をみがくご修練であつた。「新しきふしはなくとも呉竹のすなほならなむ大和言の葉」という御製もあるが、ここでも、「大和言の葉」、すなわち「和歌」は新しい言い回しはなくても素直であつてほしい（「呉竹の」は「すなほ」の枕詞）とおっしゃっているし、「つくろはむことまだしらぬうなる子のもの心のうせすもあらなむ」まだ外見をつくろふことを知らない幼こな子の生まれながらの清らかな心はいつまでもなくさないでほしい、という御製もある。

二首目の「世界中の人々は皆兄弟だと思つてゐるのにどうしてこんなに波風が立つのだろう」という、日露戦争開戦の年にお詠みになつた著名なお歌も、たんに「世界平和」の理念をお詠みになつたのではない。世界の人々が「うなる子（幼な子）のもとこのころ」に帰つたときには誰しもが味わうはずの「四海兄弟」という同胞感、その心がこの現実の世の中によみがえる道はないのか、という深い嘆きのお歌なのである。

三首目はその日露戦争のときのお歌。「戦いで傷ついた兵士たちにはとくに心を尽くして看護してほしい、この日頃急に寒い風が吹いてくるようだから」と、わが子を思う親の心情さながらのご表現である。「たたかひに身をすつる人多きかな老いたる親を家にのこして」の御製もある。

四首目は明治三十九年、日露戦争が終つた翌年の御製。戦争の大勝利にわきたつ国内の興奮の陰で、天皇は戦いに命を捨てた将兵の上に深く思いをいたされるのである。「くれゆく秋の空をながめて」というしみじみとした調べの中に、無量のお心が偲ばれるが、この戦死していった人々への、痛切な追慕の大御心、あの勇敢な日本の将兵の力の源がどこにあつたかは、この一首

を拝誦すれば、誰の目にもあきらかてあろう。

だが天皇のお心はそれだけではなかつた。五首目の御製に見られるように、その慈愛のお心はこの世の生きとし生けるものすべてに注がれる。小鳥も虫も草木の一つ一つが人間と同じく自然の恵みによって生まれてきた、生を共にする兄弟ではないか。「ただかひの場にすすみて乗る人と共にたふれし駒はいくらぞ」という、戦死した軍馬への追悼のお歌をお詠みになったのも、日露戦争のときであつた。命ある、すべてのものが天皇の大みうたの中に生命化されてゆく、そういう皇室を上になだく日本国民の幸せを、今さらのように思わしめられる御製である。

六首目の「しづ」は名もない庶民たちのこと。「お百姓が日一鍬、一鍬、耕して帰ろうとしてゐる夕暮れどき、水を引くばかりになつた山間の田園をうるおして、静かに恵みの春雨が降ってくるよ」の意。あたかも天皇ご自身のご体験をお詠みになつたのではあるまいかと思われるほど、「しづ」の心になりきつてお詠みになつてゐる。日々の国民の生活にお注ぎになる、み心の深さがしみじみと偲ばれるお歌である。「しづのをが一人ひきゆくをぐるま（小車）の重荷の上につもる雪かな」というお歌もある。

七首目は「満開の夜桜のもとに焚かれている篝火、興が尽きないままに、さらに薪をくわえさせれば、いよいよ燃え盛る篝火に照らされる万朶の桜、その花びらが篝火の上だけでなく一面に散り乱れる」という、まことに豪華な、しかも気品あふれる世界が見事に表現されている。明治とはまさにそういう時代であつた。

昭憲皇太后
しょうけんこうたいごう

宮のうちをいでましし日のしのばれてあした身にしむ笛のこゑかな

広島かきの行宮みやさしていそぐらむはるけき空をわたるかりがね

みがかずば玉の光はいでさらむ人のこころもかくこそあるらし

昭憲皇太后（明治天皇のお妃）は幕末、左大臣として国事に尽くした一条忠香いちじょうちゅうかの第三女として嘉永三年（一八五〇）、ご生誕、御名は美子はみこ、大正三年（一九一四）、御歳六十五歳で崩御。

一首目、天皇は明治十四年（一八八二）七月から十月まで、東北から北海道にかけてご巡幸なさったが、毎朝、近衛兵が吹きたてるラッパの音を聞けば、宮城きやうじやうをご出発になったときのごことか偲おもばれて身にしみることよと、旅先の天皇の御身をお氣遣いになり、そのお帰りの日をお待ちになるみ心をしみじみとお詠みになっている。そのご巡幸のときにお詠みになった皇后のお歌に「みゆきます山路いかにとふるあめにしづごころなききのふ今日かな」「くものなみとほくへだててきた（北）の海のみふねにかくるわがこころかな」などがある。「みゆきます」はお出かけになつてゐる、「しづごころなき」は落ちついた心もない、「みふねにかくる」はお船のことを遠く偲おもぶの意。

二首目は明治二十七年、日清戦争勃発に伴い大本營を広島にお移しになられたときにお詠みになったお歌。行宮は天皇が旅先で設けられる仮の宮、ここでは「大本營」のこと。東京の空を遠く西をさして飛んで行く雁の姿に、広島での天皇の明け暮れをお偲びになったお歌である。

三首目は明治九年、御歳二十七歳のとき、当時多くの人々が愛読していた、アメリカの政治家で独立宣言の起草者の一人として有名なフランクリンがその自伝の中に記した「十二の徳」の精神を、それぞれ十二首の和歌で表現されたもの。これはその三つめの「勤勞」をお詠みになったお歌である。フランクリンは「勤勞」を、「時間を空費するなかれ、益あることに従ふべし」などと説明していたのに対して、「勤勞」の精神そのものにふれて、「勤勞」によってみがかれる精神の玉のような美しさをお詠みになっている。外来の思想を日本の心の中に摂取するとはこのようなことか。皇太后の卓越したみ心の深さに心打たれるばかりである。皇太后がのちに、華族女学校（女子学習院）に賜おくられた、「金剛石こんかうせきも、磨かずば、玉の光は、添はざらん」という有名な唱歌「金剛石」はこのお歌をもとにしておつくりになったのであろう。

八——大正・昭和時代

大

正天皇ご即位（一九二二）から昭和天皇の崩御（一九八九）まで七十八年、それはこれまでのわが国の歴史上、かつてなかった、大東亜戦争という悲痛極まりない一時期をその中間に置いた時代でした。

輝かしい明治の時代が終わって三年、欧州では第一次世界大戦が勃発（一九一四）、長引く戦争のさなかにロシア革命が起こるので（一九一七）。この世界の動乱の中に、わが国は苦しい対応を迫られることになりました。とりわけロシア革命の影響によって、国内ではマルキシズムの思想が荒れすさび、海を隔てた朝鮮や中国にも独立、排日運動が激化、アメリカの日本敵視の政策も加わって、大正十五年（一九二六）、長く病床にあられた天皇がお亡くなりになって、昭和天皇がみ位におつきになった前後から、日本の国情にはたならぬものがありました。その後、関東軍を中心に、張作霖爆殺事件、柳条湖事件が満州事変に拡大、満州国建国（一九三二）となり、国内では五・一五事件、二・二六事件が起こり、昭和十二年（一九三七）には支那事変（日中戦争）が勃発、戦火は大陸全土に拡大していきました。さらにその背後の、日本を敵視するアメリカやイギリスの動き、日本に共産革命を企てようとするコミンテルンの暗躍がからんで、それらすべてが最後に昭和十

六年（一九四二）十二月八日の大東亜戦争開戦につながっていくのです。

緒戦は真珠湾攻撃、マレー沖海戦、シンガポール陥落と見事な戦果を挙げたものの、戦況は日々に利あらず、特攻隊で散華された方々をはじめ、壮烈な戦いに、敵の肝胆を寒からしめながらも、ついに昭和二十年八月には広島、長崎に原子爆弾が投下され、八月十五日、天皇の玉音放送によって、敗戦の日を迎えたのです。その「終戦の詔書」の中で昭和天皇は「堪へ難キヲ堪へ、忍び難キヲ忍び、以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カム」と国民に呼びかけられましたが、その翌年、昭和二十一年の二月から二十九年まで、全国の津々浦々をご巡幸、親しく国民を励まされたのです。この天皇のみに国民がどんなに勇気づけられたか。戦後は、占領軍による統治という、わが国の歴史上、未曾有の試練の中で、日本人の精神を根底からゆり動かす政策が次々に打ち出されてきましたが、国民はこの目で仰いだ天皇のお姿を胸に、敗戦の焦土から立ち上がり、今に見る豊かな国土を築いてきました。

こうして敗戦の日から四十四年、昭和六十四年、未曾有の困難の時代を国民とともに歩まれた昭和天皇は、波乱に満ちた八十九歳の生涯を終えられたのです。

ながつかたかし
長塚節

白埴しろはにの瓶かめこそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり

垂乳根たらちねの母がつりたる青蚊帳あそがやをすがしといねつたるみたれども

手を当てゝ鐘はたふとき冷たさに爪叩つまたたき聴くそのかさけきを

正岡子規を敬慕し、子規に愛された長塚節は、子規亡きあと「写生」の精神をさらに深め、明治、大正初期の歌壇に清新な風を吹き込んだ。節は子規と同じく結核を発病。喉頭結核こうとうの治療のため、九州帝国大学の久保猪之吉教授いのさきぢを頼ってしばしば九州を訪れた。久保自身も歌人であり、節を心身ともに支援した。細りゆく生命を見つめつつ詠よまれた歌集が、代表作『鍼はりの如く』である。

一首目は、歌人としても親しかった日本画家平福百穂ひらふくひやくすいが襖ふくき紗しやに描いた秋海棠しゅうかいどうの画が賛さんであり、『鍼はりの如く』の冒頭に置かれた、節を代表する歌である。「白埴しろはに」は白い陶器、林の中であろうか、そこには朝霧あさぎりがたちこめ、泉いずみが静かにあふれ出ている。泉の冷たい水を汲む白埴の瓶。こぼれる水音。そして秋海棠の花。一首の内に五感すべてが冴えわたっている。

二首目は大正三年（一九一四）五月、療養中の節が悩む心をどうしようもなく、久々に茨城の

実家に一時帰郷した折の歌である。「垂乳根」は「母」にかかる枕詞。母も年をとり、体が小さくなつたのであろうか。母の吊つた青蚊帳はたるんでいるけれども、作者は「すがしといねつ」、清々しい安らかな気持ちになつて蚊帳のうちに体を横たえたのであろう。

三首目は、福岡市南郊、太宰府の観世音寺の鐘を詠んだ、節晩年の歌。節は診療の間しばしば観世音寺を訪れた。その金堂には圧倒するような古仏群があり、節はこれらに惹かれたのであつた。観世音寺には、配流になつた菅原道真（本書80頁参照）がかつて「観音寺ハ只鐘ノ声ヲ聴ク」と漢詩の一節にうたつた古色蒼然たる国宝の鐘（わが国最古の梵鐘、六九八年鑄造）がある。青鑄きびて尊いまでのその鐘に近寄り、手をあてれば冷やりとしたその感触。「爪叩き聴くそのかそけきを」爪で叩くと、ちんちんとかすかではあるが、その音は心にしみ入るようである。古鐘の永遠の命と、やがて消えゆくであろう自分の命が交錯する。

節はその翌年（大正四年）、九大病院の一室で息を引き取つた。享年三十七。

しまぎ あかりこ
島木赤彦

たかつき
高槻のこずゑにありて頬白ほしらのさへづる春となりにけるかも

しなのび
信濃路はいつ春にならん夕づく日入りてしまらく黄きなる空のいろ

島木赤彦は明治九年（一八七六）に長野県上諏訪で生まれる。斎藤茂吉とともに『アララギ』を歌壇の主流に押し上げた中心歌人。本名は久保田俊彦。万葉の歌人、山部赤人の一字をとって赤彦と名乗る。

一首目、亡くなる三年前の大正十二年（一九三三）、赤彦が下諏訪高木の村の住居で詠んだ連作短歌「春」十五首の冒頭の歌。『太虚集』（たいきょしゅう）所載。凍りついた諏訪湖が長い冬からようやく覚めようとする頃、高槻の梢に鳴きはじめて頬白の声を聞いて、春になったよろこびを全身で叫ぶがごとく詠んでいる。赤彦は、『万葉集』をこよなく愛し、つねに『万葉集』に回帰して詠みつけた歌人であった。この一首も『万葉集』巻八巻頭の志貴皇子（しきのみこ）（本書44頁参照）の歌の調べを己がものとして生み出したのである。『太虚集』の中には「みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ」の名歌もある。「みづうみ」は諏訪湖、「うつろふ」は「映ろふ」。

二首目、大正十五年（一九二六）、病床で詠んだ歌。上二句「信濃路はいつ春にならん」には、北国にあって春の到来を待つ赤彦の切々とした思いが表現され、三句以下「夕づく日入りてしまらく黄なる空のいろ」には、赤彦が諏訪の自宅の部屋からながめたであろう、入り日の沈んだ西空が細やかに詠まれている。「しまらく」はしばらく。「黄なる空のいろ」は字余りの中に深い情感を示している。この歌を詠んで一月後に赤彦は五十一歳で没した。

佐佐木信綱ささきのぶつな

ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲ひと

佐佐木信綱は明治五年（一八七二）、三重県鈴鹿の生まれ。国学者の父弘綱ひろつなに教えを受け、東京帝国大学卒業ののち、明治三十一年に機関紙『心の花』を創刊。明治三十七年より東京帝国大学で『万葉集』、和歌史を教授するかたわら、多くの和歌に関する研究書や歌集を残し、昭和三十八年に没した。九十二歳。

冒頭の歌は信綱の代表作である。薬師寺は奈良市西之京にある法相宗ほつそうしゆの大本山。境内にはかつて奈良時代（天平二年・七三〇）に建立された東塔および西塔の対の三重の塔があったが、西塔は室町時代に倒壊。明治四十五年に信綱が奈良に旅した頃には、東塔のみがその美しい姿をとどめていた。三重の塔は、大きな三段の瓦屋根が優美に拡がり、それぞれその下の裳裾もすそ（三重の屋根それぞれの下につく庇状ひさしの構造物）と相和して、そのリズムカルな建築はまるで音楽の調べを思わせる。この歌は、「の」の繰り返しを六つも重ねて名詞をつなぎ、歌の姿そのものが塔さながらである。上の句では「ゆく秋の大和の国の薬師寺の」と季節の大きな流れを捉えて、大和の国から薬師寺へと焦点が絞られ、下の句では「塔の上なる一ひらの雲」と視線は塔から垂直に上って空に至る。秋晴れの真青な空に浮かぶ一ひらの雲。その白さが目に染みるようなすがすがしい歌である。

昭和五十年（一九七五）、西岡常一氏によって、約五百年ぶりに薬師寺の西塔が復元された。現在では、東西対の三重の塔を古代の姿そのままに仰ぐことができる。

会津八一あいつやいち

かすがのにおしてつきのほがらかにあきのゆふべとなりけるかも

ほほゑみてうつつごころにありたすくだらぼとけにしくものぞなき

みほとけのうつらまなこにいにしへのやまとくにはらかすみてあるらし

おほてらのまろきはしらのつきかけをつちにふみつつものをこそおもへ

会津八一は明治十四年（一八八一）、新潟に生まれた。中学時代に記紀万葉の歌に傾倒。また故郷の先人良寛の歌を愛し、中学卒業後上京して正岡子規を訪ねて良寛を紹介した。書をよくし、秋艸道人しゅうそうどうじんと号す。早稲田大学英文学科を卒業後、中学教員となったが、この頃より奈良をたびたび訪れ、のちに歌集『南京新唱』なんきんしやう（南京は奈良のこと）を発刊した。ここにあげた短歌はすべて奈良において詠まれたものであるが、平仮名のみで表わすことにより、和語の音調の美しさを求め

た。

一首目は『南京新唱』の冒頭の歌。「春日野に照る月はほがらかに澄みわたり、秋の夕べとなつたことよ」の意であるが、万葉調の歌調をわがものとして古都奈良のにおいを見事に表わしている。吉野秀雄（本書243頁参照）はこの歌の解説の中で、「温もりとうるほひを湛へる完成度の密度において妙境を顕示するもの」と絶賛している。

二首目、法隆寺の百済観音像を詠んだ歌。飛鳥時代の独特の微笑みを湛えたこの古仏。「うつごころにありたたす」は、これも吉野のいうように「うつらうつらと夢のように立っていらつしやる」ということであろうが、伸びやかな長軀、しなやかに腕を前に差し出した観音像の姿を彷彿させる。「しくものぞなき」は、これに優るものはないという意。

三首目、新薬師寺に安置された「香薬師」という白鳳時代の立像を拝した折の歌。大意は「み仏のうっとりとした眼、「うつらまなこ」には、遠い古の大和の国原がかすんで見えているのであろうよ」ということ。懐かしい大和国原をゆつたりと観られるみ仏の慈顔が見えてくるような歌である。

四首目、唐招提寺で詠まれた歌。「大寺の丸い柱を照らす月、その月がつくる影を地面に踏みながらものを思うことよ」の意。唐からはるばる来日された鑑真和尚の開基（創立）のこの寺を支える幾本もの柱は、なだらかな丸みを帯びて美しい。月影は遠い古よりこの柱を照らしてきたであろう。かつて芭蕉もここを訪れ、来日の折に盲いた鑑真和尚の像を拝して「若葉して（若葉で）おん目の雫ぬぐはばや（ぬぐってあげたい）」の句を詠んだ。この歌には、一首のうちに唐招

提寺境内の光と影、静寂と深遠とがこめられ、莊重な調べの絶唱といえるであろう。
八一には他に『鹿鳴集』『山光集』などの歌集がある。昭和三十一年（一九五六）没。

第二百三十三代・大正天皇

庭の面にもえたる蓬つみためてさきのみかどにそなへまつらむ
いざ行かむかなぢの車のりすてて手馴れの駒にむちをあげつつ
十年へてふたたび会ひし君にまた別るる今日はかなしかりけり
かきくらし雨降り出でぬ人心くだち行く世をなげくゆふべに
神まつるわが白妙の袖の上にかつうすれゆくみあかしのかけ

大正天皇は父君、明治天皇崩御のため、御年三十四歳で践祚、健康を害せられたため大正十年（一九二一）からは皇太子（昭和天皇）が摂政におなりになったので、天皇が直接、統帥（軍隊を統率すること）と政務をおとりになったのは約十年であった。だがその十年は、誇り高く緊張に

満ちた明治の御世が終わり、加えて第一次世界大戦の勃発によって、国内は変動たたらぬ時代を迎えていた。

一首目は大正三年のお歌、亡き父君、明治天皇の御霊に、自らつみためた蓬をお供えされたときの、孝心厚いお歌である。「もえたる」は萌える、芽が出るの意。

二首目は同じ大正三年の御作、「高槻停車場をいでて演習場地にむかふ」という詞書がある。高槻は大阪府、「かなぢ」は鉄道のこと。「いざ行かむ」「のりすてて」「むちをあげつつ」と躍るような、先帝のあとを継がれた青年天皇の若さに満ちあふれたお歌である。

三首目は大正六年のお歌で、上京された朝鮮の李王殿下を東京駅にお見送りになったときの二首の御製のうちの一首。李王殿下は日韓併合のときの最後の皇帝純宗。併合後、日本の皇室にお入りになったものの、その胸に秘めた悲しみ、それを誰よりもご存じだったのは、ほかならぬ天皇ご自身であった。そのすべてをこめて、「別るる今日はかなしかりけり」とお詠みになったのである。もう一首の御製は「海原のたひらかなれとねがふかな風さへ絶えぬ梅雨のころ」であった。

四首目は大正九年の御作、題は「夕」。「雲深くたれこめて雨まで降りだしてきた、人々の心が日に日にすさんでゆく世の姿を深く嘆いているこの夕べに」の意。その前年、世界大戦は終結したものの、大戦さなかに勃発したロシア革命によって世界の混迷はさらに激化、民心の動揺は収まるところを知らなかった。この御製は当時の、国内を襲ったこの精神的な危機への痛切なご述懐なのであろう。

五首目はその次の年、大正十年「社頭しゃとうのあかつき暁」と題して発表されたもの。「神前に奉仕する純白のご装束の袖にうつる社頭のみ燈あかしの光が、暁の光がさすにつれて、しだいしだいに薄れてゆく」という厳肅な世界が、前のお歌の「人心くこころたち行く世」を背景に、悲痛な思いをこめて詠まれている。

このお歌を最後に天皇の御製の発表はなく、先に述べたように、皇太子殿下が摂政として政務をおとりになることとなり、大正十五年、崩御の日をお迎えになったのである。

貞明皇后

御ともしてまてに掬すくひしくれ竹の代々木の清水とはに忘れじ

かりそめにはじめしこがひわがいのちあらむかぎりと思ひなりぬる

つれづれの友ともなりてなぐさめよゆくことかたきわれにかはりて

老人おいびとのくゆらすたばこわにふくをおもしろげにもちこの見あぐる

貞明皇后は大正天皇のお妃、明治十七年（一八八四）、九条道孝くじょうみちたかの第四女としてご生誕、御名は

節子きただて、明治三十三年ご成婚、昭和二十六年（一九五二）、御年六十八歳で崩御。その年、昭和天皇が終戦直後、軽井沢にご滞在になった母君、貞明皇后を偲んでお詠みになった「いでましし浅間の山のふもとより母のたまひしこの草木はも」の御製が忘れがたい。「たまひし」は送ってくださったの意。

一首目は若くして崩御なされた大正天皇をお偲びになった昭和七年のお歌。背の君がまだお元氣だった頃、「お供して代々木の宮（明治神宮）に詣でた折、まで（真手、両手のこと）に掬った清水は『とはに』永久に忘れることはないであろう」の意。「くれ竹の」は「代よ」の枕詞。御祭神、明治天皇へのご孝心と大正天皇への相聞（恋）のみ思いのこもる一首である。

二首目は生涯を養蚕ようさんの道にお励みになられた皇后の蚕かいこを詠まれた数多いお歌の中の一、「こがひ」は「蚕飼」、蚕を飼うこと、大正二年（一九一三）、御歳三十歳のときお詠みになったもの。「わがいのちあらむかぎり」というお言葉は、「養蚕」の営みに対するただならぬ使命感から生まれたご表現と思われる。

三首目は昭和七年、「癩患者を慰めて」と題して詠まれた五首のうちの一。生涯のご事業の一つとして力を尽くされたハンセン病患者に注がれる思いをお詠みになっている。皇后さまのこの事業へのご関心は深く、昭和五年より同じくハンセン病患者に深いご関心をおもちであった昭和天皇太后のご仁慈を記念して毎年、事業に御下賜金を、さらに御所の庭の楓かえでの苗を全国の療養所に御下賜になって、苦しむ患者をお慰めになった。このお歌は「楓よ大きくなって私の代わりに淋しい日々を送っている人々を慰めてくれよ」という、慈愛あふれるお歌である。「つれづれ」

はすることもなくもの淋しいさま。「楓」は昭憲皇太后の「御印」でもあった。

だが一方、皇后のご性格はたいへん明るい方であられたとのことであるが、四首目はその天真爛漫なお人柄を偲ばせるお歌である。煙草をくゆらしながら煙を輪のようにして吹く「輪にふく」老人にみとれているのは、「ちご（幼な子）」であり、また皇后ご自身でもあろうか。あどけない幼な子の表情が目に浮かぶようである。

若山牧水わかやまぼくすい

うすべにに葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山櫻花やまざくらばな

いま来よと言ひ告げやらば為し難き事をして来む友をしぞおもふこ

とけざりし我等が憂ひあはれつひにけふのなげきとなりにけるかな

若山牧水は明治十八年（一八八五）、宮崎県の北部、坪谷川上流の僻村へきそんに生まれる。祖父、父と続いた医家で、母の名はマキ。牧水は終生この母を慕い、自らの号に「牧」の一字を入れた。明治四十一年、早大英文科卒業、二十四歳で処女歌集『海の声』を出す。酒と旅の詩人と呼ばれ、「白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり」「幾山河越えさりゆかば寂しさの

はてなむ国ぞ今日も旅ゆく」などの歌は有名である。気性の激しい母と三人の姉と病み呆けた父との間に立って「生活か芸術か」の二者択一に迫られながら『みなかみ』という歌集を出した。

一首目、大正十一年（一九二二）春に彼が詠んだ「山ざくら」二十三首の中の冒頭の歌。歌集『山櫻の歌』に所載。花よりも先に薄紅色の葉が萌え出て、今まさに咲こうとしている山桜の美しさを詠んでいる。伊豆半島の天城山麓あまぎを流れる狩野川かのの上流にある湯ヶ島温泉に三週間ばかり滞在した牧水は、溪谷の山々に咲く山桜を、その花の咲き出づる頃からすっかり散り終えて若葉になるまで、心ゆくばかり愛あでて数多くの歌を詠んだ。「うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花」の歌もある。「けぶりあひて」は煙のように薄くかすんで。この一連の歌は、古来の桜の歌の中でもとくに傑出した作といえよう。

二首目、「友をおもふ歌」と題して大正十一年末に詠まれた七首の連作短歌の一首。「今来てくれと頼んだらただちに万難を排して駆かけつけてくれる友」はめったにいないだろうが、牧水はそういう友をもっていた。「何事のあるとなけれど逢はざればこころはかはく逢はざらめやも」の歌もある。「こころはかはく（乾く）」という表現は切実である。

三首目、大正十五年十二月二十五日、大正天皇崩御の日、彼は七首の「奉悼ほうとうの歌」を詠む。その中の一首。詞書に「十二月二十五日早暁、終に崩御の報を聞く。かなしみうたへる歌」と記している。この歌の前に「おん病あつく永びきおはしましき今は終りとならせたまひぬ」と「御身弱くましませしかば国民くにかみの我等がうれひ常とけずありき」という二首の歌がある。「常とけず」はつねにとけないの意。病弱であられた大正天皇のご健康を常日頃から憂い、薄命であられた陛

下に対する彼の真心が明らかに表現されている。日本国民として敬虔な気持ちのあふれた奉悼の歌である。

彼はその二年後、昭和三年（一九二八）九月、四十四歳で没した。

大悟法利雄は『若山牧水』に「牧水はこと皇室に関する場合は常にはなはだ謹厳な態度を失わなかつた。しかもその態度は少しも鹿爪しかつめらしいわざとらしいところがなく、実に自然な素朴なものであつた」と記している。

三井甲之

ますらをの悲しきのちつみかさねつみかさねまもる大和島根やまとしまねを

心しる友と語れば心なごみながるる涙とどめかねつも

しきしまのやまと心はうつそみの目には見えねど耳にきくべし

三井甲之は本名甲之助。明治十六年（一八八三）、山梨県甲府市の郊外、松島村に生まれる。東京帝国大学国文学科に在学中、根岸短歌会に加わり、明治四十一年に『馬酔木あしび』廃刊ののち、伊藤左千夫の信頼を受けて『アカネ』を創刊したが、その後、左千夫と歌の評価についての決定的

な見解の相違を生じ、左千夫は『アカネ』を離れて、『アララギ』に拠った。甲之はその年、正岡子規の短歌革新の拠点であった『日本』のあとをうけて刊行された総合雑誌『日本及日本人』の短歌の選者となり、その後、明治四十五年には、それまで休刊していた『アカネ』を『人生と表現』と改題して刊行するなど多彩な活動を展開した。

その間、甲之は、人生そのものに密着した宗教家としての親鸞、さらにはゲーテ、ドイツの心理学者ヴントを研究、とりわけ明治天皇の崩御はその心魂をゆるがし、大正八年（一九一九）、『明治天皇御集』が宮内省より公刊されたあとは、明治天皇の御製を「しきしまのみち」の精髓と仰ぎ、昭和三年（一九二八）に『明治天皇御製研究』を出版、戦後は、昭和天皇の御製の研究に晩年をささげて、昭和二十八年、七十一歳の生涯を終えた。詩集に『消なば消ぬがに』『祖国礼拝』『日本の歓喜』がある。

一首目、この歌は、いま英霊を祀る靖国神社の「遊就館」の壁面高く掲げられているが、これは、駆逐艦「蕨」の機関長福田秀穂少佐の殉職を悼んで詠まれた九首の連作の結びの歌で、『日本及日本人』に発表されたものである。駆逐艦「蕨」は、昭和二年八月二十四日深夜、島根県美保ヶ関沖合で夜間水雷攻撃猛訓練中に、巡洋艦「神通」に激突、沈没した。「蕨」の殉職者九十名、そのうちの一人が、「蕨」機関長福田少佐であり、三井甲之の同志、松田福松の姻戚に連なる人であった。大東亜戦争下で多くの人に愛唱された歌である。「遠い古より次々に尊い生命が捧げられ、『国』の命が守られてきた」という、祖国日本の厳肅な歴史的事実に対する深い憶念が格調高い調べの中に詠まれている。山田輝彦著『短歌のこころ』に、この歌は「日本人の祖国

防護の悲願を、底ごもるやうなしらべに歌ひ上げた名歌」と記されている。

二首目、大正五年八月『日本及日本人』に「友に」と題して載せられた十首の中の一首。三井甲之にとって生きることは生命を断絶せしめんとするものとの戦いであり、日本の国柄を命をかけて守ることであった。であればこそ、その思いをわかちあう友と共なる人生を語ることは至上のよろこびであり、あふれ出る涙を押さえかねたのであろう。

三首目、題は「歌」。「古来、詠み継がれ、歌い継がれてきた和歌にこもる先人の心は、全身の思いをこめてその調べに耳を澄ませることによって、はじめて心に響くのであって、目に見える形で理解されるようなものではない」の意。三井甲之にとって、和歌は、人生の根本の道であり、人生そのものであった。

川出麻須美

羽根折れてつちに落つとも生けるまは光れほたるこあめのまにまに

極まればまた蘇る道ありていのちはてなし何かなげかむ

川出麻須美は明治十七年（一八八四）、愛知県に生まれる。鹿児島島の旧制第七高等学校、東京帝國大学国文科を卒業ののち、中学教諭を経て、大正十年（一九二二）より昭和十九年（一九四四）

まで母校七高で国文学を教授した。学生時代より記紀万葉の命あふれる言葉に強く惹かれ、数多くの連作短歌をうたいあげ、それらは歌集『天地四方』に結実した。

一首目は、大学時代に故郷に帰った折の連作「故郷のゆふべ」の中の歌。強風によって羽根が折れ、土に落ちた何匹もの蛭が、なおも最後の命を灯しながら光っている。生きている間はその光をともしつづけてくれ、ほたるこよと、「ほたる」に「こ」をつけ、慈しみをこめて呼びかけている。「あめのまにまに」の結句が胸にしみるようだが、一切を投げ出して天の与えるままを受け入れ、その限られた命を精一杯に生きようとする、麻須美の自然随順の姿がうかがわれる。

二首目、私たちが生きていくこの世には、どうしようもなく絶望の淵に立たされることがある。それが「極まれば」である。しかしそのようなときにもきつとまたよみがえる道があり、命は果てしなく生かされていく。どうして嘆くことがあろうか、の意。どんなことがあっても、私たちが導く何か大きなものがある。それを信じてこの世を生きていこう、そう励まされるような歌である。

麻須美には、他にも「世にあるもなきも同じぞたまきはる命はかよふ万代までに」「息どほる(憤る)胸をしづめて幼子のむかしにかへりいまはいねてな」など、生と死を見つめ、何人をもあたたかく包み込むような歌の数々がある。「たまきはる」は「命」にかかる枕詞。「いねてな」は眠ってくれよの意。

昭和四十二年死去。その墓碑銘には「極まれば」の歌が刻まれている。

あふぎ見る坂は二つに裂けしかとばかりわだちのあとつきてあり

むなぬちにかの大波のうちよする力つねにあらば何かおそれむ

田代順一は三井甲之を生涯の人生の師と仰ぎ、その一生を終えた「名も無き民」の一人であった。大正二年（一九一三）、若くして親鸞上人の遺跡を遍歴、乞食の泊まるような宿に身をよせながら、茨城を起点に徒歩で遠い紀州まで、自然と人々に接し、見聞したことを、ありのままに歌に託して綴った巡礼記『雲か萍か——親鸞上人の遺跡をめぐりて』を残した。そこには観念の世界ではなく、具体的な強烈な意志を貫いて行動に生きようとした青年の緊張した思いがあふれている。この歌は二首とも、この巡礼記『雲か萍か』に収められたものである。

一首目は「わだちのあと」と題する三首連作の冒頭の歌。「裂けしかとばかり」は裂けたかのように、「わだち」は車輪。この歌に続けて「この丘を越しけむ時は人も馬もいかに苦しうたかひつらむ」とある。雨上がりの翌朝であろうか、通りかかった坂道につけられた馬車の車輪の深い跡に驚いて詠んだ歌である。たんに車輪の深い大きな跡に驚いているのではない。雨中を急な坂道に車輪の深い跡をつけながらも、必死に登っていった馬車、その馬車を率く馬と人とが躍動して彼の目に映っている。

二首目は鹿島（茨城県）の海辺に立って、はるかに太平洋を望んで詠まれた、連作短歌十七首の最後の一首。寄せ来る大波の力に驚嘆しつつ、その力を己の人生の根源力にと願う作者の心が迫ってくる。「むなぬち」は胸の内。

この連作の中には「むなぬちにとどろく波をうちたたみさけびし歌に力あらせよ」「ひまもなくとどろく波の大なる力をいだし世にふみ出でむ」という歌もある。眼前に展開する鹿島灘の大波に共鳴する作者の胸の高鳴りが偲ばれる、生命力あふれる歌である。自分の目と耳を信じ、ありのままに歌に詠むことによって彼は青年らしく生きたのである。

くろかみまこといちろう
黒上正一郎

あひまつりしその日よ空はうすぐもり大比叡おほひえがねはほのにけむりし

かかる夜は都もとほきこちにしてはらから切にしたはるるかな

山々のみどりあらたにもゆれどもわがはらからはかへりこぬかな

黒上正一郎は明治三十三年（一九〇〇）、徳島の生まれ。学歴は徳島県立商業学校を出ただけではあったが、真の「篤学の士」であり、十九歳頃より聖徳太子の本格的研究に入った。その成果

は中央でも高く評価され、大正十五年（一九二六）には東京帝国大学において「聖徳太子の研究」と題して講演。聖徳太子の研究成果はのちに『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』（第一高等学校昭信会版）の著書として結実した。

一首目は正一郎二十一歳の折、京都に赴いて仏教学者井上右近うこんに親鸞の教えを受けた折の感動を詠んだ連作冒頭の歌。「あひまつりし」の言葉には、師に出会ったよろこびがあふれ、親鸞がかつて学んだ比叡の峰のほのけむる深遠な姿が目に浮かぶような歌である。その後、歌人三井甲之に師事して明治天皇御製に示された「しきしまの道」に学び、聖徳太子の教えに導かれながら、日本人としての学問の正道を学生らとともに求めていった。正一郎の教導は、当時の心ある学生に強い影響を及ぼし、昭和四年（一九二九）には第一高等学校に「昭信会」、さらに東京高等師範学校に「信和会」が生まれた。

この頃、正一郎は友人に宛てて数多くの手紙を書き、長大な連作短歌を次々に詠んでいるが、そこにはともに道を学ぼうとする謙虚で愛情に満ちた心があふれている。

二首目は、徳島から東京に住む友を偲んで詠まれた数々の歌の一つ。「かかる夜」とは、大空遠く月が冴さえている夜。月をながめていると都はさらに遠くに感じられ、友のことが切に慕われ、てならなかったのだろう。「はらから」は友のこと。

正一郎には、同郷の梅木紹男つぎおという生涯の友があった。梅木は第一高等学校に進み抜群の成績を修め、また野球の選手でもあり、どんな人をも包み込む大きな人柄であったが、不幸にも結核を病み、故郷徳島に帰省。昭和四年にその若い生涯を閉じた。このとき、悲しみの底で正一郎は

多くの歌を詠んだが、三首目はそのうち、遺骨を松山のお墓に納めたあとに詠まれたもの。「友の眠る松山の緑は新たに萌もえてはいるけれど、自分の兄弟とさえ思われるこの友は、もう還っては来ないのである」の意。

正一郎は梅木を追うようにして翌昭和五年、三十一歳の短い生涯を閉じたが、その志はその後多くの学生に受け継がれて現在に至っている。

かわむらみきお
河村幹雄

しきしまのやまとのくにに人となり名もなき民と生きゆくわれは

母恋ふる心に人は泣くものを母のなき世の近づきくらし

河村幹雄は明治十九年（一八八六）、屯田兵士官の次男として札幌に生まれる。東京帝国大学理学部地質学科を卒業し九州帝国大学に奉職。米國に留学したあと、三十四歳の若さで工學部長に就任する。「教育の外何物ほかもなし」の信念で、教室内の指導のみならず、福岡の自宅を開放して「斯道塾」を開設、慈父の心で学生に接し思想指導に心魂を傾けた。

昭和六年（一九三二）十二月、教え子にかこまれる中で永眠、享年四十六歳。歌友の松田福松が弔歌に「イスラエルの荒野に叫びし預言者のいのちさながら生きませし君よ」と歌っているご

とく、河村はキリストの信仰者でもあり、日本人としての立場からイエスのまことの精神に生き
た聖者さながらの生涯であつた。

一首目の「しきしまの」は「やまと」にかかる枕詞。「大和の国に生まれ、人と成つた私は、
『名も無き民』として生きてゆく」という思いをこめた歌である。戦前多くの青年たちに感銘を
与え愛読された遺稿集『名も無き民のこころ』には「名もなき民として生きる、山間無学の老母
にも人の生の威厳を備へたる者あり、車夫に哲人のごとき人もあり。名も無き民の心のまこと、
実に貴きかな。之わが信ずる日本の文化なり、日本を救ふ原理なり」と述べている。

二首目は、昭和十四年に神戸女学院開学式で行なわれた「母なき世」と題する講演の折に詠ま
れた歌である。「子が母を恋しく思う心に、人は感じて泣くものである。しかし、悲しいことに、
まことの心ある母がいなくなる世が近づいてきているらしい」という歌。講演で、河村は「血を
分かち命を縮めてもなほ辞せざる母の子を思ふ真心と、その真心に動きて母を慕ふ子心と、之れ
人の世を、住むに甲斐ある世となす情の清水にあらずや。しかるに悲しいかな、母となりて子を
育てるより、家庭を出て職業につく事が貴いとする、誤つた教育が進行し、『母なき世』が近づ
いて来ている」と嘆いている。まさに今の世を予言する歌であつた。

みなかたぐまぐす
南方熊補

ひとまた
一枝も心して吹け沖つ風わが天皇のめましし森ぞ

南方熊楠は、明治から昭和にかけて世界的に活躍した博物学者。二十歳で渡米、植物採集や菌類の研究に没頭、その論文は世界最高レベルの科学雑誌『ネイチャー』にたびたび掲載された。熊楠の研究の中心は「粘菌学」ねんきんがくであった。「粘菌」とは、森の中など暗く湿った場所の古木等に腐生し、アメーバ運動を行なう原生生物。熊楠は「粘菌」をはじめ、さまざまな生物から成る生態系自体が現存している「鎮守の森」を保存することにも精力を傾けていたが、明治三十九年（二九〇六）、一町村一社を基準に全国の産土神社うぶつちなまじやを統廃合しようとする神社合祀の政策が推進され、「鎮守の森」が濫伐されようとしたとき、熊楠は敢然として立ち上がったのである。

なかでも心血を注いだのは、和歌山の田辺湾に浮かぶ「神島」かみしまの自然保護であった。昭和四年（二九二九）六月一日、昭和天皇南紀行幸に際し、熊楠は光栄にもご進講を行なうことになったが、ご進講のあと、熊楠は、粘菌標本百十種を粗末な「キャラメル」の箱に入れて、昭和天皇に献上したのである。この折の感激を詠んだのが、この歌である。「神島の木々の一枝もいためることのないよう、注意して吹いてくれ、沖の風よ。この島の森は、天皇が心から慈しまれた森であるぞ」という意。神島の森によせられる昭和天皇の深き慈しみにふれたときの思いを、熊楠は心をこめて詠んだのである。

熊楠は昭和十六年に没したが、昭和三十七年五月、昭和天皇はふたたび南紀に行幸され、神島を親しくご覧になり、「雨にけぶる神島を見て紀伊の国の生みし南方熊楠を思ふ」と熊楠の人柄と偉業を偲びながらお詠みになった。神島の森を愛された昭和天皇と熊楠の心の交流に、日本な

らではの君臣唱和の世界を垣間見ることができる。

吉野秀雄よしのひでお

今生こんじゆうのつひのわかれを告げあひぬうつろに迫る時のしづもり

遮蔽燈しゆへいとうの暗き燈ほかげにたまきはる命尽きむとする妻とあり

をさな児の兄は弟おとうとをはげまして臨終いまはの母の脛すねさすりつつ

吉野秀雄は明治三十五年（一九〇二）、群馬県の生まれ。正岡子規を敬愛し、会津八一の歌に感動して師事した。長く結核を病み、苦難の一生を送ったが、親鸞に帰依し、その切実で真摯に満ちた生を短歌にうたいこんだ。これらの歌は、昭和十九年（一九四四）、四児を残して妻が胃病のため病院で亡くなる直前のことを詠んだ歌。

一首目は、「この世で最後の別れを妻と告げあったことだ、虚ろうつろに迫ってくる死の前の時の鎮しづもりよ」という歌。秀雄は自注の中で「看護婦さんが風呂へ行つたあと、しみじみと別れを告げ合ふ時間があつたのでできたものだが、空気がガラスのやうに張りつめた感じ」だったと書いている。

二首目、戦争中であり、「光が外に漏れないよう遮蔽燈をつけているのだが、その暗い光のもとで尊い命が尽きようとする妻とともに、自分はその側にいる」というこの現実の不可思議を詠んでいる。「たまきはる」は「命」の枕詞。

三首目、「昼間の疲れから眠ろうとする弟を、兄は励まして目を覚まさせる。幼子の兄弟は、母の命をよみがえらせようと、臨終を間近にした母の脛を一心にさすっている、そのいと美しい姿よ」という意。どうしようもない境遇に立たされ、今からどう生きていけばいいのか、悲しみの極みを詠んだ連作の歌だ。

その妻が亡くなって数年、詩人八木重吉の未亡人とみ子が、貧しいこの家に世話に来るのだが、二人は互いに敬愛しやがて結婚する。その後も、長男が突然発狂するということが起こり、その生は苦難に満ちたものだったが、秀雄はそれらを受けとめてゆく。のちに書かれた名随筆『やはらかな心』の中で、秀雄は「わたしは物識りではなく、珍しい話などはできない、ただ終生身にしみてはなれないことを直示するのみだ」という切実な言葉を残したが、人生をあるがままに受けとめ、「南無阿弥陀仏」と唱える著者のひたむきな姿勢が胸を打つ。

歌集『寒蟬集』の他、『万葉集』や良寛、会津八一などについてのすぐれた論考を残し、六十歳で没した。

益良雄まさらのゆくどふ道をゆききはめわが若人らつひにかへらず

山本五十六は海軍大将、大東亜戦争開戦時の連合艦隊司令長官。昭和十六年（一九四一）十二月八日未明、連合艦隊機動部隊は真珠湾を奇襲攻撃したが、空からの爆撃とともに、特殊潜航艇五隻も港内に潜入した。開戦前、山本長官は作戦終了後の艇員収容の困難から潜航艇の使用を容易に許可しなかったが、部下の熱意に押されて暗黙の承認を与えたという。九名の乗員はついに帰還しなかった。歌はそのときの作。

「益良雄のゆくどふ道」の表現は聖武天皇の御製（本書51頁参照）にあり、この国の武人として重大な使命を帯びた道、その道を「ゆききはめ」とは、決死の覚悟を生き貫いた武人の精神のありようを示すとともに、真珠湾内深くに潜航する勇姿を彷彿させる。「わが若人」の「わが」にこめられた肉親の情を偲ばせる深い思いもおろそかではない。長官は昭和十八年四月、前線視察中に、南太平洋ブルーゲンビル上空で戦死。元帥の称号を贈られた。『万葉集』と明治天皇御製を愛誦した名将であった。

なお、この特殊潜航艇の乗員は、のちに九軍神として称たえられたが、その一人、古野繁實しげみ艇長（中尉、戦死後少佐）の遺詠に「君のため何か惜しまむ若桜散つて甲斐ある命なりせば」がある。南北朝期の宗良親王むねながの「君がため世のため何か惜しからむ捨てて甲斐あるいのちなりせば」（本書114頁参照）を念頭に置いた歌であろうが、若き武人の決然とした覚悟を示し、多くの人の胸を打った。

よきのあきこ
与謝野晶子

水軍の大尉となりてわが四郎み軍に征く猛く戦へ

与謝野晶子は明治から昭和にかけての歌人。鉄幹（本書190頁参照）の妻で、雑誌『明星』で活躍、当時の歌壇に大きな影響を与えた。

この歌は晩年の作で、作者の四男、昱が東京帝国大学工学部から海軍に入り、大東亜戦争に赴いたときの歌である。「四郎」とは四男の意。「水軍」も「みいくさ」も日本古来からの言葉であって、武人としての栄えあるわが子の門出に万感の母の思いをこめた歌である。

晶子といえば、処女歌集『みだれ髪』に見られる奔放な「情熱」と、日露戦争に出征した弟をうたった詩「君死にたまふことなかれ」の「反戦」というイメージが定着しているが、この歌は国の命にまっすぐにつながる堂々とした詠みぶりであり、反戦詩人といった浅薄なレッテルをはねかえず。

同様に晶子には、明治四十三年（一九一〇）、潜水艇訓練中の沈没事故で最後まで任務を遂行し、壮烈な遺書を残して殉職した佐久間艇長の死（夏目漱石「文芸とヒロイック」参照）を悼んだ「海底の水の明りにしたためし永き別れのますら男の文」など十三首からなる連作の挽歌もある。

松尾まつ枝

君がため散れと育てし花なれど嵐のあとの庭さびしけれ

大東亜戦争勃発約半年後、昭和十七年（一九四二）五月、特殊潜航艇第二次特別攻撃隊が豪州（オーストラリア）シドニー湾を急襲した。艇長松尾敬宇大尉（戦死後中佐）は、激しい反撃に損傷した艇を浮上させ、勇敢にも司令塔から身を乗り出して敵艦に立ち向かい、壮烈な戦死を遂げた。享年二十六。中佐は熊本出身。吉野朝の忠臣菊池氏（本書110頁参照）の家臣の末裔でその精神を仰いで育った。

この歌は母堂、松尾まつ枝が中佐の一周忌に詠んだもの。歌にはわが子を花にたとえて、「天皇陛下のためには命を投げ出して役に立つようにと育てたわが子が国の危急に立派な働きをしてくれたことは嬉しいが、もう会えない」という淋しさがしみじみと詠まれており、武人の母の強い覚悟と哀しみが凝縮されている。豪州海軍は、大尉らの愛国心と勇気を称え、戦時中にもかかわらず海軍葬をもって手厚く弔った。

戦後、母堂は、その答礼のため、八十四歳の高齢でオーストラリアに赴いたが、戦に命を捧げた将兵の御霊に敵味方の区別なく和歌と祈りを捧げるその姿に、首相をはじめ、豪州国民は深く共感し、行く先々であたたかく歓迎した。歌集に『合掌のあけくれ』があり、戦後の歌には「靖国の社に友と睦ぶとも折々かへれ母が夢路に」がある。

くりばやしただみち
栗林忠道

国の為重きつとめを果たし得で矢弾尽き果て散るぞかなしき

大東亜戦争で最大の激戦地となった硫黄島いおうは小笠原諸島の南にあり、日本にとって本土防衛上必須の根拠地であったことから、昭和二十年（一九四五）二月十九日から三月下旬までの硫黄島守備隊と米軍との攻防は熾烈を極めた。栗林忠道中将（戦死後大将）は、現地最高指揮官である小笠原兵団長として約二万一千人の陸海將兵を指揮し、水なき火山島に全長十八キロメートルに及ぶ地下壕を建設し、その地熱に耐えながら長期持久戦を敢行、圧倒的兵力を誇る米侵攻軍約十一万余に多大な損害（米軍死傷者約二万九千名）を与えた名將として歴史にその名を残す。同年三月二十六日に戦死。

遺歌は、三月十七日付の「今や弾丸尽き水涸レ全員反撃シ、最後ノ敢闘ヲ行ハントス」という大本営に宛てた最後の電文の末尾に付された辞世の歌で、本土防衛の要地確保という「重きつとめ」をついに果たせず、弾も水も尽き果て、「最後ノ敢闘」を行なうにあたり、祖国の安危を案じつつ詠んだものである。

なお、平成六年（一九九四）二月、同島に慰霊のために行幸された今上陛下は「精魂を込め戦ひし人未だ地下に眠りて島は悲しき」との御製を、皇后陛下は「慰霊地は今安らかに水をたたふ

如何ばかり君ら水を欲りけむ」とのお歌をお詠みになっている。

牛島満
うしじまみつる

矢弾^{やだま}尽き天地^{あめつち}染めて散るとても魂^{たま}かへり魂^{たま}かへりつつ皇国^{みくに}護らむ

硫黄島戦に続く沖繩戦は、日本本土侵攻の拠点確保を目指す米軍に対し、沖繩守備のために民間人をも巻き込んだ国内最大の戦いとなった。牛島満陸軍大將は、昭和二十年（一九四五）三月末から始まる沖繩戦で、現地最高指揮官である第三十二軍司令官として麾下^{きか}の陸海軍守備隊を指揮統率した。「鉄血勤皇隊」や「ひめゆり部隊」に代表される義勇隊結成等、沖繩県民の献身的な協力のもと、敵の圧倒的な兵力に対し、日本軍守備隊は勇戦敢闘を約三カ月続けるが、ついに六月二十三日に組織的戦闘を終結する。沖繩戦での日本軍将兵戦死者は約六万五千余、県民の死者は十万人を超える。大將は二十三日未明、同軍参謀長^{ちとういさむ}長^{ちやういさむ}勇少将とともに、最後の拠点となった沖繩本島南端の摩文仁^{まぶに}の丘で自決。

この歌は、自決に先立つ六月十八日付の「重任ヲ果シ得ザリシヲ思ヒ、悵恨^{ちやうこんせんざい}千載ニ尽クルナシ」という大本営宛ての告別の電報の末尾に掲載された辞世である。「矢弾尽き、この沖繩の地や空に命果つるとも、魂魄^{こんぱく}を永久に留めて祖国を防護しよう」との意。「魂かへり魂かへりつつ」という繰り返しに、祖国の永久を祈る大將のたぐならぬ思いが偲ばれる。

しもむらかいなん
下村海南

大君ののらす御詞に胸せまり声立てて誰も誰も泣きやまず

下村海南は和歌山県出身、大正四年（一九一五）、台湾総督府民政長官として統治行政に携わり、その後、朝日新聞社に入社。昭和十八年（一九四三）、日本放送協会会長となり、戦前最後の内閣となった鈴木貫太郎内閣に情報局総裁として入閣。ポツダム宣言受諾に至る世論対策にあたり、天皇が直接に降伏を国民に告げられた「玉音放送」の実現に大きな役割を果たした。

この歌はポツダム宣言受諾をめぐる最後の御前会議の緊迫した場面を詠んだもの、「のらす」は「宣らす」で、お述べになったの意。

この終戦前後の真相を生々しく語った下村の体験記録『終戦秘録』は昭和の歴史を語る上で欠かせぬ史料である。その中に最後の御前会議で拝した御詠（天皇のお言葉）について「たとえ我が一身はいかにあろうとも、国は焦土と化し、国民を戦火に失い、何として祖宗の靈にこたえんやという御心を拝して、涕泣（ていきゆう）の声は次第に高まってくる。さらに『為すべきことはいとわな、マイクの前に立ってもよい』と仰せられるに至り、忍び声を止めもあえず声をあげた」と記している。人々は御詠が終わっても、そのお言葉が胸に迫り、「声立てて誰も誰も」泣くばかりであった。

この天皇の捨身しやしんのお言葉を賜った臣下の号泣、それは日本の歴史上かつてなかった歴史的な場面であった。

阿南惟幾あなみこれちか

大君の深き恵みにあみし身は言ひ遺すのこべき片言かたこともなし

阿南惟幾が陛下のもっともお側にお仕えする侍従武官を命じられたのは昭和四年（一九二九）その半年前、鈴木貫太郎は侍従長に任ぜられており、のちに二人は終戦内閣の首相と陸相として「降伏」という最難事に取り組むことになる。

この歌は阿南の辞世で、「大君」は昭和天皇、「あみし身」は「浴みし身」で深き恵みをいただいた自分の意。鈴木内閣に陸相として入閣した阿南は、ポツダム宣言受諾の是非をめぐり、戦争継続を強く主張する陸軍の総意を代表し、最後の御前会議で受諾反対を主張したが、昭和天皇のご聖断により降伏が決定。十四日深更、鈴木総理のところへ赴き、強硬な意見を述べたことを陳謝したとき、鈴木総理が「皆国を思うの熱情から出たものです。阿南さん、日本の皇室は絶対にお慰安泰ですよ。陛下は御歴代にまれな祭事に御熱心な方ですから、きつと神明の御加護があると存じます」（鈴木貫太郎「終戦の表情」と伝えたことは有名である。それから数刻後、阿南は見事に武人としての最後を飾って自決した。介添かいぞえを拒否し、十五日未明、絶命。「一死、以て大罪を

謝し奉る」という簡潔な遺書とともに冒頭の辞世を遺した。享年五十八。

窪田空穂

爾等なんぢらと侶ともにしありとかしこくも宣のたまはす御言みこと身にしみとほる

生きてわれ親を措おきては聞かざりしいつくしみ言御声ごこえもて聴く

窪田空穂は歌人で、著名な国文学者。終戦当時は早稲田大学の老教授であった。文人ながら一国民として事変に処し、潔く征つた教え子のいない学園で「ここに逢ふ人のすべては口結びものにこらふる面持おももちをせり」などの無言の哀惜の念がにじむ歌も遺している。

この二首は「玉音放送」を聞いたときのもの。一首目、終戦の詔書に「朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ、忠良ナル爾臣民ノ赤誠（まごころ）ニ信倚（しんい）シ、常ニ爾臣民ト共ニ在リ」とある一節に呼応している。悲しき敗戦ではあったが、「爾等と侶にしあり」と、陛下とわが身の間が、ますますぐに通い合うかたじけなさの極みを歌っている。

二首目、「慈いつくしんで育ててくれた親を措いて、今日ほど慈みのお言葉『いづくしみ言』をかけたに違いないことはなかった」の意。天皇のお言葉を、肉親以外からは耳にしたことのない慈愛あふれる声として受けとめた人がいたのである。日本においては君臣の情とはまさに肉親の情で

あつた。天皇の慈しみのみ心と、それを仰ぎ尊ぶ国民の心が通い合う国が日本なのである。

おおがたく
大鹿卓

しろたへのおん手袋をみめにあてなみだたびきときくはまことか

たかみ
高見檜吉

父母の泣けば幼き子等までがラジオの前に声あげて泣く

さいま
斎間万

戦はつひに敗れて止みにけり榎の高木に蝉しきり鳴く

きくちけん
菊地剣

おんで
御手づから賜ひし軍旗火もて焼くかかる悲しき日に会ひにけり

この四首は、敗戦時の思いを詠んだ名も無き民の歌。はじめの三首は『昭和萬葉集』（講談社より抄出）。

一首目、「しろたへの」は白い、「みめ」は御目、「なみだたびき」は涙賜びきで、涙をお流しになって私たちまでそそいでくださったという意。「聖断を下されるときに陛下の白い手袋の指はしばしば眼鏡を拭われ、ほおをなでられたが、その場にいる者は正視するに堪えない」（前出『終戦秘録』）。作者は「さく（聞く）はまことか」とそのお姿をお惚びし、驚愕しつつ恐れかこむのである。

二首目、昭和二十年（一九四五）八月十五日正午、昭和天皇は自ら「終戦ノ詔書」を録音され、ラジオを通じて全国民に訴えかけられた。それは「玉音放送」といわれ、そのときぎれとぎれの「玉音」を国民はつつしんで聴いた。そのとき父母たちのただならぬ号泣に、何もわからないであらう幼な子たちも声あげて泣くのである。

三首目、じりじりと照りつける真夏日のもと、「玉音放送」に一瞬深い静寂が全土を覆った。「止みにけり」と上の句を言い切ったところに敗北という冷厳な事実が迫り、続く下の句、鳴きしきる蟬の声との対比にその静寂が鮮やかによみがえる。「槻」はケヤキの古名。

四首目、菊地剣は福岡県出身、当時和歌山県連隊区司令官として終戦を迎える。この歌は菊地の歌集『芥火』からのもの。敗戦にともなって、各部隊では軍旗の焼却が行なわれた。軍旗は天皇が手づからご下賜になるものであるが、それは天皇と直結する君臣の絆の象徴であり、したがってまた、軍隊の団結の神聖な象徴であった。終戦後には内地外地あわせて四百五十旒（りゅう）の軍旗が

焼かれたといわれる。その悲劇的な体験が惻々として胸を打つ。

保田與重郎

見しまゝに国原かはらず足らひたりしづ心なく泪あふれつ

大前に幕内の力士みなならび手を拍ちにけり山にひびきつ

保田與重郎は明治四十三年（一九一〇）に記紀万葉のふるさと、奈良県桜井市に生まれる。戦前戦後を通じて一貫して思想を堅持し、日本の古典への鑽仰を文章に託しつつけた、日本浪漫派を代表する文人批評家である。保田は日本が滅亡するかもしれないと思われた時期に、国の成り立ちに思いを致し、「鳥見のひかり」を執筆する。鳥見とは、初代の神武天皇が大嘗祭の始まりであると言われる祭りを行なわれた山で、保田の生家はその麓にある。その中で、保田は祭政一致とは、「まつり」と「くらし」が一つである米作りの生活の中にあること、天壤無窮とは、その米作りが永遠に続くことへの感謝と実感であることを述べ、祖国の不滅を信じ昭和二十年（一九四五）三月に出征する。

一首目は、応召した北支戦線から郷里に帰還した、昭和二十一年の歌である。「昔、少年の日に見たままと変わりのない、何の不足もなく満ち足りたふるさとに、万感の思いがこみ上げ、

『しづ心なく（心がさわいで）』泪があふれた」というのである。そこはまた、記紀万葉の昔に天皇が国見（本書32頁参照）をされた国原である。この歌には戦いに敗れたとはいえ、稲作りの神勅のままの、古から変わらぬ暮らしがそのまま息づいていることへの安堵と、日本は滅びずという確信と感動がこめられている。

二首目は、昭和三十八年に相撲発祥の地、大和卷向穴師大兵主神社に時津風理事長を齋主として幕の内力士および行司が参拝したときの歌である。「大前」とは神の御前。「山」は古代信仰の山、三輪山に続く巻向山である。大勢の力士が揃って打つ柏手の音が記紀万葉の古代の山に響きわたるという力強い歌である。

本間雅晴

かくありて許さるべきや密林のかなたに消えし戦友をおもへば

本間雅晴は明治二十一年（一八八八）、佐渡生まれの陸軍中将。大東亜戦争開戦を前に台湾軍司令官から第十四軍司令官へと転じ、フィリピン攻略を指揮した。マッカーサーが率いる米比（アメリカ、フィリピン）軍は、ジャングルと峻険な地形のバターン半島要塞で激しく抵抗したが、その掃討戦に本間は前任地台湾の原住民、高砂族を起用し、募集に殺到した五千名の中から選抜した精鋭により「高砂義勇隊」を編成した。彼らは山岳民族の特性を發揮し、戦場の密林をもとの

もせず物資運搬や道路・橋の整備に献身的な働きを見せて、日本軍の勝利に寄与した。

戦後に詠まれたこの歌は、日本兵として志願した台湾青年を「戦友」と呼び、「名も無き彼らが文字どおり密林に消えゆくように命を捧げたことを思うと、自分だけ生き延びることは許されない」と強い自責の念を表白している。台北の南、烏来ウライには現在「高砂義勇隊戦没英霊記念碑」が建っているが、かたわらに本間の遺詠としてこの歌が刻まれている。

バターンの戦場で投降した米比軍捕虜は飢えと病に消耗しており、炎天下の長距離移送は困難を極めて、多くの死者を出す結果となった。これが連合国によって「バターン死の行進」と喧伝され、昭和二十一年（一九四六）、フィリピンの軍事法廷で本間は当時の最高責任者として一方的に処刑された。

坂根庸子さかねようこ

野遊びにほうけし吾子あこが寝姿ねすがたのかなしきばかり君にかも肖にる

丹野きみ子たんの

この果てに君あるごとく思はれて春の渚なみさきにしばしたたずむ

いずれも大東亜戦争で夫を亡くした若き妻たちの歌である。この二首は戦後出版された『この果てに君あるごとく——全国未亡人の短歌・手記』に収められている。

一首目、坂根庸子は鹿児島市の農家の主婦。農家の主婦が作業を終えて、野遊びに疲れて寝入っている子供の寝顔を見ると、悲しいばかりに亡き夫に似ている。そのわが子の寝姿に、夫の面影を偲ぶ作者の切ない思いが迫ってくる。「かなし」は悲し、愛しに通じるが、この一語にこめられた夫への限りない思慕の深さが偲ばれる。

二首目、丹野きみ子は宮城県としかわからない。大東亜戦争における二百数十万の戦没者の圧倒的多数が海のかなたの遠い南の島々、あるいは海の中に散っていった。『この果てに君あるごとく』という書名はこの一首からとられたものである。太平洋の見える渚に立ち、遠い水平線のかなたにふたたび帰ることなき夫を偲ぶ人々の慟哭の思いがこの一語に凝縮されている。

斎藤茂吉

かりがねも既にわたらずあまの原かぎりも知らに雪ふりみだる

最上川逆白波の立つまでにふぶくゆふべとなりけるかも

斎藤茂吉は明治十五年（一八八二）、山形に生まれる。第一高等学校の学生時代に正岡子規の

『竹の里歌』に感動し、明治三十九年に伊藤左千夫に師事。左千夫によって運営されていた月刊『馬酔木』が明治四十一年一月に終刊となったあとをうけて創刊された『アララギ』の編集を明治四十四年以降担当、大正二年（一九一三）、『赤光』で注目を浴び、とりわけ五十九首にわたる連作「死にたまふ母」で絶賛を博した。その後、島木赤彦とともに、ほぼ半世紀にわたって、実作、理論の両面で終始歌壇をリードした。昭和二十八年（一九五三）、七十二歳で没す。

この歌はいずれも茂吉が終戦の翌年、昭和二十二年二月から翌年にかけて、山形県大石田村（現大石田町）の最上川岸辺の離れ屋に一人住んでいたときの歌。茂吉の第十六歌集『白き山』に収められた中の五首連作「逆白波」の中の二首。

一首目は連作最初の歌。「かりがね」は雁のこと。「かぎりも知らに」は無限に。「雁がわたつてゆく季節もすぎて、今は大空をこめて、限りもなく雪がふりみだれている」という壮大な情景が詠まれている。

二首目では滔々と流れる急流最上川には、上流に向かって吹きつける強風のため、逆白波が立つという、すさまじい夕べの吹雪を一気に詠んでいる。大東亜戦争に敗れ、決定的な衝撃を受けたと思われる茂吉が、吹雪の最上川の岸辺に立ちつくしている。その寂寥感と孤独感が伝わってくる。いずれも彼の生涯の絶唱といえよう。

(米國) 高柳勝平 たかやなぎ かつへい

あけぼのの大地しっかと踏みしめて遠くわれは呼ぶ祖国よ起てと

(ブラジル) 村岡虎雄 むらおか とらお

此の波のはてに祖国の美しと孫に語らひよはひかさねる

明治から昭和にかけて、多くの日本人が新天地に活路を開くべく、夢を抱いて海外に移住した。気候風土や言語、文化の異なる海外での生活は苦難に満ちたものであったが、遠く海を隔てた祖国日本への思いと日本人としての誇りを決して忘れることはなかった。この二首はいずれも天皇が、年の始めに宮中で催される「歌会始」うたのかいのはじめに詠進えいしんされたものである。

一首目は昭和二十二年（一九四七）の歌会始（お題は「あけぼの」）に選ばれた歌で、作者は日系人でロサンゼルスに在住。夜が白白と明けはじめたアメリカの大地にしっかりと足を踏みしめて、敗戦に打ちひしがれた祖国の行く末を思い、「祖国よ、立ち上がれ」と同胞を励ます歌。遠くアメリカの地にあっても、祖国への深い信頼と誇りを胸に秘めて、力強く生きている日系人たちの思いが偲しのばれる。

昭和天皇が、この終戦直後二年目の歌会始のお題に、「あけぼの」という言葉を選ばれたこと

は意義深い。新しい日本の再建をひたすら祈られるお気持ちからであろうと拝察される。その折の天皇の御製は、「たのもしくよはあけそめぬ水戸の町うつつちのおともたかくきこえて」であった。「つち」は「槌」。

二首目も平成六年（二九九四）の歌会始（お題は「波」）に選ばれた歌で、作者はブラジル日系人。「この波のはるかかなたには、自分たち日本人の祖先が守り続けてきた祖国がある。その祖国は、自然も、そこに住む人々の心もどんなに美しいことか。その美しい祖国に誇りをもって生きていけよと孫に語り続けてきた」という感慨を詠んだ歌。ブラジル社会では、「ジャポネーズ・ガラシード」（日本人なら大丈夫だ）と言われるように、日系人への信頼は強い。それは、日系人の心の中に日本人としての矜持きやうじと自覚をもつて、力強く生きていこうとする生き方が脈々と受け継がれているからであろう。作者はこの歌が宮中で披露される前に、その生涯をブラジルの地で終えられたとのことである。

井上字磨いのうえかまろ

すめろぎの宣のりらすみ憲あまたぞみ民らが革あらため得うべきのりならなくに

この見ゆる雲のはたてに君ありと思ふ心はたのしかりけり

井上孚麿は明治二十四年（一八九二）、長崎県平戸の生まれ、東京帝国大学法学部を卒業した憲法学者であり、歌人である。井上は一貫して、主権不在の中で成立した、人類普遍の原理にも反する現憲法の無効と帝国憲法の復原を説く。

一首目の「すめろぎの宣らすみ憲」とは、明治二十二年に発布された明治の欽定憲法のこと。井上は、憲法は「『発明』でできるものではなく『発見』せねばならぬもの」とする。つまり憲法というものは国民民生の伝統に内在する規範意識を発見し、それをいかに法として記述するかにあるという。

この歌に続いて「うつせみの人のたくみしものに非ず神ながらなるのりと聞くものを」と詠んでいる。「うつせみ」は現世、「たくみ」は企てる。帝国憲法は神代ながらの伝統にもとづく「のり」であり、日本は万世一系の天皇の統治する国である。権威の由来もそこにある。そうした、内面的な権威を備えた憲法でこそ、政治も円滑に行なわれ、個人の真の自由も保障され、国の統一もゆるがぬものになる。そのような根本規範にもとづく憲法は「み民らが革め得べきのり（憲）ならなくに」、国民が勝手に改めうるものではないという、昭和二十一年（一九四六）の憲法変革の動きに対する警世の歌である。

二首目は昭和三十三年の新年歌会始のお題「雲」の詠進歌で、選に預かった歌。「雲のはたて」とは、雲のはるかかなたのこと、「その雲のかなたに心知る友を思うと心たのしくなる」という、朋友相信じるよろこびの歌である。

白井傳しらいつたう

われこそはにひさきもりよ二十余年じふねんふりし軍靴ぐんぐつにあぶらぬりをり

ひとつばたごみづえさやかにもえいでてみかどのよきひちかくしなりぬ

白井傳は大正五年（一九一六）、長崎県対馬に生まれる。昭和十三年（一九三八）に教師となり、二十年、大東亜戦争に応召、同年復員、五十二年に定年退職するまで対馬の小学校、中学校の教師、校長をつとめ、退職後も公民館館長として、郷土対馬ですごす。剣道五段。平成五年交通事故にて不慮の事故死。白井傳歌集『艸莽戀闕』そうもうれんけつには二千余首が収められている。「艸」は草、「莽」は草むら。「艸莽」で名もなき民の意。「闕」は宮中の門。「艸莽戀闕」は名もなき民がひたすらにみかどを恋慕うの意。

一首目、昭和四十八年の終戦記念日、八月十五日に「にひさきもり」と題して詠まれた歌。隠岐の島に配流された後鳥羽上皇の「我こそは新島守よ隠岐の海のあらしなみかぜこころして吹け（本書96頁参照）」の御製を拝して詠まれた二十一首の中の一首。上の句は上皇の「われこそは新島守よ」を「われこそはにひさきもり（新防人）よ（防人は本書67頁参照）」と改め、二十一首すべて「われこそはにひさきもりよ」から始まっている。戦後二十八年を経て、六十近い齡よわいにもかかわらず白井は、「一旦緩急在レバ」（「教育勅語」の中の一節で「いったん非常事態が起これば」の意）、

いつでも出征できるようと、大東亜戦争に出征したときに履いた軍靴を毎日みがいていた。「ふりし」は古くなったの意。海を隔てて朝鮮と向き合う対馬は長い歴史の中で、国境の島ゆえに、幾度となく外敵の影響を受けた。元の大軍に真っ先に襲われ、日本海海戦も対馬沖で行なわれた。郷土の子弟を教育する仕事で生涯の大部分を対馬で終えた白井は、一日として国を思う心を忘れたことのない、まさに昭和の防人であった。

二首目、昭和五十八年新春に発表された、昭和天皇御製「わが庭のひとつばたごを見つつ思ふ海のかなたの対馬の春を」に深い感動を覚えて、彼は「ひとつばたご頌」連作短歌二十六首を詠んだ。「頌」はほめ称えるの意。これはその冒頭の歌。「ひとつばたご」は対馬に多く、晩春に小枝の先に白い多数の花をつける落葉樹。「みづえ」は「瑞枝（みずみずしい若枝）」。「みかどのよきひ」は四月二十九日、昭和天皇御誕生日。「ちかくしなりぬ」の「し」は強意。「ひとつばたご」の花を媒介として、君臣唱和の世界が広がっている。

白井には「ゆふばえ（夕映え）のにはふ（匂う）おかべ（岡辺）のののきくの（野の菊の）くがね（金色）にそまるさきもり（防人）のしま」という美しい歌もある。

第百二十四代・昭和天皇

〔即位より大東亜戦争終結まで〕

ゆめさめてわが世を思ふあかつきに長なきどりの声ぞきこゆる

峰つづきおほふむら雲ふく風のはやくはらへとただいのるなり

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

よるべなき幼子をさなごどももうれしげに遊ぶ声きこゆ松の木の間に

昭和天皇、御名は裕仁ひろひと、大正天皇の第一皇子として明治三十四年（一九〇二）四月二十九日、ご生誕。一首目は、昭和七年（一九三三）の「暁あかつき鶏けい声」というお題の歌会始にお詠みになった御製。昭和三年には張作霖爆殺事件、昭和六年九月、満州事変勃発とご心痛の尽きない御世のはじめであった。お目覚めになったとき、長なき鶏どりの声こゑが聞こえる。御世の行く末を祈り、明けゆく夜に世の平安を願いつつ、一人その鶏声を聞くというお歌である。「古事記」では天照大御神あまてらすおおみかみが天石屋戸あめのいわやとにおこもりになったとき、「常世とこよの長鳴鶏ながなきどりを集へて鳴かしめた」とあるが、大御神おおみかみが岩戸からお出になったときは「高天原たかまがはらも葦原中国あしはらのなかつくにも（天上の世界もこの現し世うつしよも）自づから照り明あかりき」と記されている。天皇は声長く鳴きつづける鶏の声を、御世の夜明けを祈るお気持ちでお聞きになっておられたのであろう。

二首目は昭和十七年、年頭の御製。前年十二月八日、ついに対英米戦争を余儀なくされたが、

緒戦のハワイ空襲、マレー沖海戦は全国民、全世界を驚倒させた。しかしこのお歌はその戦果に呼応された、戦意昂揚のお歌ではない。ご即位以来の年頭にお詠みになられた御製に「ふる雪にころきよめて安らげき世をこそいのれ神のひろまへ」（昭和六年）、「天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を」（昭和八年）と一貫して祈り願われたことも空しく今はただ「はやくはらへとただいのる」ばかりであるとお詠みになっているのである。

三首目は、昭和二十年、終戦時の御製四首の中の最初のお歌、「爆撃にたふれゆく民の上をおもひ」と、はじめからあふれるような思いを、字余りのままに書き留め、捨身のご仁愛をそのままお詠みになったお歌である。それに続く御製は「身はいかにならむともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて」と一首目の激情と拝されるようなお言葉をそのまま繰り返してお詠みになってはいるが、「身はいかならむとも」というお言葉づかいを拝するのは天皇御製の長い歴史の中でも希有のことであり、当時の侍従次長、木下道雄の言葉を借りれば、「猛鳥の襲来に對して雛鳥を守る親鳥のような」捨身のお心であった。なおそれに続く二首は「国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり」「海の外の陸に小島にのこる民の上やすかれとただいのるなり」であった。

四首目は昭和二十四年、九州地方ご巡幸の折、福岡市の郊外の、和白村青松園（児童施設）に賜わった御製。陛下は敗戦直後より「全国焦土を隈なく歩いて、国民を慰め励ましたい」とのご決意をお漏らしになり、二十一年二月からご巡幸の第一歩が踏み出されることになった。「よるべなき幼子ども」は頼みとする親を失った満州朝鮮からの引揚孤児たちである（『筑紫路を埋めた

日の丸」による。「うれしげに遊ぶ声きこゆ」木の間に聞こえる子供たちの声に耳を傾けておられる陛下のお姿が目に見えるようなお歌である。

同じ九州ご巡幸のとき、熊本県の開拓地では「かくのごと荒野が原に鎌をとる引揚びとをわれはわすれじ」と引揚者と苦悩を分かち合うお気持ち強いお言葉でうたわれた。どん底から湧き起こる祖国復興の息吹きは、この天皇のみ心と、それをお迎えする民のよろこびとの強いふれあいから起こったのである。

〔平和条約発効より崩御に至るまで〕

風さゆるみ冬は過ぎてまちにまちし八重桜咲く春となりけり

戦ひのいたでをうけし外国のをさをむかふるゆふぐれさむし

母宮のひろひたまへるまてばしひ焼きていただけり秋のみそのに

あかげらの叩く音するあさまだき音をさびしうつりしならむ

一首目は「平和条約発効の日を迎へて五首」と詞書がある御製の第一首。次いで「国の春と今

こそはなれ霜こほる冬にたへこし民のちからに」と詠まれたその日は昭和二十七年（一九五二）四月二十八日であった。昭和の御世は開けて以来の国難、戦争、敗戦、降伏、占領とまことにあらゆるまじき多難の歩みであった。先に拝した終戦のお歌のように、「身はいかならむとも」と文字どおり捨身のご決意によって、ようやく平和条約締結発効、独立の日を迎えることができた。「風さゆるみ冬は過ぎて」と、その年月を顧みられるお言葉に逆境の中の澄みきったご心境と、「まちにまちし」というお言葉に、ご心中に響きわたる国家回復のおよろこびが偲ばれる。

二首目は「比国のガルシア大統領および夫人を迎へて三首」と詞書にある昭和三十三年の御製。「外国のをさ」の「をさ」は「長」、フィリピン大統領である。大東亜戦争開戦直後、わが国は比島の米軍を駆逐し、のち米軍の反攻により比島は苛烈な戦場となった。戦後十一年にして国交が回復、かつての盟邦の「戦ひのいたで（戦争の痛手）」を顧みられる天皇のみ心は、すでに戦争終結の詔書に率直にお述べになったところであるが、戦火をこうむった比島国民にも、わが国民によせられるのとまったく同質のお心配りをお詠みになっている。

その二年前、エチオピア皇帝をお迎えになったときは「外国の君をむかへて空港にむつみかはしつ手をばにぎりて」とお詠みになっている。「手をばにぎりて」の一語が心にしみる。明治天皇の御製（本書212頁参照）にあるように、陛下にとつて「よものうみ」は、お言葉どおり「みなはらから」なのである。

三首目、昭和五十三年、歌会始のお題「母」で詠まれた御製。天皇が母君、貞明皇后をお詠みになった御製は多いが、とりわけこの一首は忘れがたい。「馬手葉椎」は「つぶら椎」と異なっ

てその実は長檜田のどんぐりで食用となる。「母宮のひろひたまへる」と、ご生前母宮をかたわらにいますがごとくお俵びになっているが、とりわけ「焼きていただけり」の「いただく」という敬語的なご表現に俥ばれる母宮への追慕のみ心は深い。

天皇は昭和六十四年一月七日、崩御なされたが、四首目はその前年の秋、那須での御作。「あかげら」はわが国ではもっとも普通の啄木鳥。雄は頭が赤い。「あさまだき」は夜の明けきらない頃。あかげらが木を叩く音が絶えた、よその森に移ったのだろう。「音絶えてさびし」というのが歌の中心である。

那須といえは昭和三十年の御製「八月十五日那須にて、夢さめて旅寝の床に十とせてふむかし思へばむねせまりくる」が思い出される。昭和三十年八月十五日の「十とせのむかし」は終戦の日。未曾有の波乱に激動する国運をご一身に背負われたご生涯であられた。「音たえてさびし」から「うつりしならむ」と歌は静かに収められる。確かなご意志を静かに吐露されたもののように拝される。陛下最晩年の御製である。

香淳皇后
こうじゆんこうごう

樺太につゆと消えたる少女らのみたまやすかれとただにいのりぬ

おだやかに冬たつこの日みともして伊勢の宮居にまうでけるかな

雨やみてはれゆく伊豆の海原に色さえざえと虹のかかれり

香淳皇后は久邇宮邦彦王の第一王女、御名は良子ながこ。大正十三年（一九二四）、皇太子裕仁親王とご成婚。昭和天皇の皇后である。平成十二年（二〇〇〇）六月十六日崩御、御年九十七歳。

一首目は天皇皇后両陛下御歌集『あけぼの』に「北海道にみともして 氷雪の門二首」と詞書して収められている。昭和二十年（一九四五）八月九日、ソ連軍は日ソ中立条約を破って満州、南樺太、千島列島に侵攻し、十五日の終戦後も攻撃は中止されるどころかますます熾烈を加え、八月二十日には樺太真岡まおがにおいてはソ連上陸軍を寡兵かへいをもつて迎え撃つことになった。その死闘直前、真岡郵便局の女子電話交換手九人が「皆さん、これが最後です さようなら さようなら」の最後の言葉を打電して自決した。はるかに樺太を望む北海道の最北端、稚内わかないに建つ樺太島民慰霊碑「氷雪の門」のかたわらに「九人の乙女の像」がある。昭和四十二年九月二日、札幌で開かれた北海道開道百年記念式典にご臨席になられた両陛下はこの地にお出でになられたが、その折、皇后は「乙女やすかれ」とこの歌をお詠みになったのである。天皇陛下の御製は「樺太に命をすてしたをやめのこころを思へばむねせまりくる」であった。

二首目は昭和四十九年十一月八日両陛下お揃いで伊勢神宮にご参拝された折のお歌。前年のご遷宮後のご参拝であった。「冬立つこの日」十一月八日頃がだいたい立冬にあたる。「みともして」は天皇陛下のお伴をして。その折の天皇陛下の御製は「冬ながら朝暖あたたかかししづかなる五十鈴

の宮にまうできつれば」であった。両陛下がお心を一つにしてご参拝されている。皇后さまのお言葉のお優しいリズム感が心にしみる。わが国の歴史の中でもとくに険しい時の山坂を越えてゆかれる天皇陛下とともに歩まれた皇后さまのご心境が仰がれる。

三首目は昭和五十年の御作。詞書に「春、須崎で」とある。須崎御用邸は伊豆半島の突端、下田の東、須崎にある。やや離れて伊豆の大島が見える。毎年冬または春の時期に、両陛下はご滞在になる。「さえずさえず」は「冴え冴え」、さえわたったさま。海といい、虹といい、皇后さまが絵筆を嗜まれるご趣味を思えば、お言葉の中から美しい風景が目には浮かぶようである。

昭和五十二年の歌会始の天皇陛下の御製は須崎でお詠みになった、「はるばると利島のみゆる海原の朱にかがやく日ののぼりきて」である。利島は伊豆大島の南方の小島。

九——『いのちささげて』

『いのちささげて』は本書を企画した「国民文化研究会」の前身、「日本学生協会」（全国の大学・

高等学校・専門学校）の学生により、日本における学問の真のありかたを求めて展開された学生運動。昭和十五年「一九四〇」発足）の中で研鑽を積んだ同人学徒で、出征後、戦陣に散華された方々の遺文、遺詠を正統二冊に編集したものです。ここにその中から若干の遺詠を選んで本書の末尾に加えさせていただきます。

よしだ ふさお
吉田房雄

山桜花もろともに散り果てしみ祖おやのいのちなつかしきかな

吉田房雄は茨城県土浦市出身。昭和十六年（一九四二）秋、東京帝国大学法学部中退。十七年二月、応召、十九年三月十七日、ニューギニア北方アドミラルティ諸島において戦死。陸軍中尉、二十九歳。

歌は宇都宮部隊に入隊直前の十七年一月二十九日、先輩に宛てた手紙の中の一首。日米開戦の直後である。風に吹かれて山桜が一斉に散る、そのように、「散り果てしみ祖のいのち」は楠木正成が一族を挙げてことごとく戦死したことをいっているのかもしれないし、日米開戦直後であれば、当時誰しもが心惹かれたハワイ真珠湾で散華さんげした九人の潜航艇の艇長、艇員のことを偲んだのであろうか。「散る」という言葉にはわが祖国の歴史に参加し共感するという思いがこもる。「なつかしきかな」は、そのみ祖おやの命に帰ってゆくことは懐かしいとさえ思われることだの意。その手紙はこう結ばれている。「万感交々胸中こももを去来しまして言葉もございませぬ。元気にやってきます」。内地に残って、戦陣に立つ以上のご苦労をなさるであらう先輩に、祈りをこめて遺した歌である。

和多山儀平わだやまぎへい

黒の瀬戸の名に負ふ速潮はやしほ突き出でし岬みさきをめぐり空に散るかも

和多山儀平は熊本県八代市出身。昭和十八年（一九四三）九月、旧制熊本高等工業学校採鉱冶金科を卒業と同時に海軍予備学生。十九年十一月十七日特設空母「神鷹しんよう」に乗り組みシンガポールに向け東シナ海を航海中、深夜済州島西方海面で敵潜水艦の雷撃を受け沈没、戦死した。海軍中尉、二十二歳。

歌はその学生の頃、十八年三月の作。「黒の瀬戸」と題する九首連作の第一首。黒の瀬戸は鹿児島出水市西方の岬と長島の水道、八代海から外海に出る急流の瀬戸である。「われて碎けて裂けて散るかも」とうたったのは源実朝（本書94頁参照）であるが、その歌の調べに自ずと惹かれながら、作者の故郷に近い、狭い水道を傾く船の上から近々と見てうたった。日に灼けた顔、大きい声で歌を歌う青年で、国難の日々ながら豊かなふるさとの海に遊ぶ、そういう青春であった。母を恋うる歌、友を思う歌などわずかの間に九百首の歌を遺して死んだ。

石綿一郎いしわたいちろう

天皇の一の御楯みたてと召され来てはてしも知らぬ海原をゆく

石綿一郎は神奈川県小田原市出身。昭和十六年（一九四一）三月、神奈川師範学校卒業後、国民学校訓導、十七年四月、横須賀海兵団入団、十九年十月二十四日、レイテ沖海戦において敵魚雷を受け乗艦の巡洋艦「摩耶」が沈没、戦死。海軍上等兵曹、二十五歳。

歌は十七年から十九年暮れまでの軍務二年半の比較的早い時期の作か。戦場の歌である。「天皇の一の御楯」天皇をお護りする第一の楯として召されたことは、作者にとって至上の誇りである。いま行くのは「はてしも知らぬ海原」、これはまさに実感であろう。作者は一兵卒として駆逐艦、巡洋艦に乗り組んでいたが、その歌から拾われる航跡は、横須賀からソロモン海（ガダルカナル）、アリュウシャン（キスカ）、レイテ沖と西太平洋全域に及んでいる。この戦争の最中に優しかった父を亡くした。「すでにして死を決したるその夜さの夢に出できし父母のみ姿」の歌がある。戦場で歌を詠みつづけた勇士であった。

いちじょうつう
一條浩通

楽しきは母の賜ひし小包をためつすがめつひもとくとき

一條浩通は盛岡市出身、「満州電業」に奉職中、昭和十四年（一九三九）、同社派遣学生として旧制山口高等商業学校に入り、十六年十二月、繰り上げ卒業して陸軍に応召。二十年一月十八日、

ルソン島にて上陸米軍を迎撃中、艦砲射撃の直撃弾を受けて戦死。陸軍中尉、二十七歳。

歌は十五年、山口に在学中、数名の友人とともに寮をつくって共同生活をしていた頃の作。「故郷の母より菓子送り来る」と詞書にある三首連作の一。上から見たり、横から見たり「ためつがめつ」して、ゆっくりと紐をとく、その笑顔が見える。家族の誰からも慕われ誰よりも母を気づかした人だったのだろう。大柄で寡黙、微笑を絶やさぬ東北人であった。他人を樂しませよるこばすことを自らのよろこびとするような、接しているだけで心の安らぐような人柄であった。軍隊でもそうだったにちがいない。学生時代に愛唱した行進曲「進めこの道」(三井甲之作詞)を部下の兵隊に教え、ともに相親しんだと伝えられる。

ちゆたにたけし
茶谷武

大君のまけのまにまに生き死なむ時ぞ近づき吾が胸はるる

茶谷武は神奈川県小田原市出身。東京府立夜間中学を経て鉄道省等勤務、昭和十八年(二九四三)四月、中央大学専門部経済学科(夜間部)に入学、同年十二月、学徒出陣。陸軍に入隊、二十年四月二十三日、ルソン島タラボにおいて戦死。陸軍伍長、二十四歳。

歌はその死後三十二年を経て(昭和五十二年)世に出たもの。妹さんが宝として保存しておられた戦地からの遺書、父上母上宛てに認められた最後の言葉のあとの連作短歌七首の内一首で

ある。「今ノ私ノ氣持ハ吉田松陰先生ノ『親思フ心ニマサル親心ケフノ音ヅレ何トキクラム（本書154頁参照）』ト歌ハレタ氣持ソノママデアリマス」と言い、「ドウゾ私ノコトヲ笑ツテホメテ下サイ。武モ笑ツテ散リマス。デハ父上母上、オ身体ヲ大切ニシテ下サイ」とある。「大君のまけのまにまに」は天皇陛下のご命令を受けた、その仰せのままに、「生き死なむ時ぞ近づき吾が胸はるる」と歌ったその心はまことに晴れ晴れとした美しい声である。比島における戦闘はわが兵士において苦戦惨憺の極みであったと聞くが、それを超えて「国家」は在る。安らかに鎮まりませと祈るのみである。

まつよしまさし
松吉正資

ゆく身にはひとしほしむるふるさとの人のなさけのあたたかきかな

松吉正資は山口県大島郡安下庄町出身。あげのしやう昭和十七年（一九四二）九月、東京帝国大学法学部に進み、十八年十二月、学徒出陣。二十年五月十一日、ことひら琴平飛行隊 魁隊（特攻隊）偵察員として鹿兒島県指宿を発進して沖繩に向かう途中、故障して波上に跳躍、ころおん転覆。轟音とともに爆砕戦死した。海軍中尉、二十二歳。

歌は出征前、十八年秋十一月、「述懐」と題して残した三首連作の一。故郷、すおう周防大島の蜜柑畑にかこまれた山中の自宅での作。心知る多くの先輩、友人にここから「なつかしきふるさとの

浦船出してみたてとゆく日近づきにけり」などの歌を送った。いま祖国の命ずるままに「ゆく身」にとつて、ふるさとの人々の寄せてくれる心は「あたたかい」、その実感をまず述べたかつたと思われる。田舎育ちの健康な身体、明るい双眸そうぼう、充実した四肢にも頭脳にも不足ない平衡がある。心をこめて歌を遺そうとしたと思われる。続く二首はこうであった。「数ならぬ身にはあれども吾を送る人の思ひにこたへざらめや」「うつそみはよし砕くともはらからのなさけ忘れじ常世とこよ行くまで」。「うつそみ」は現世の身。うたつたとおりの最期となった。

加藤信克かとうのぶかつ

すなほなる幼心を一すぢに守りて生きむと友よ思はずや

加藤信克は新潟市出身。昭和十八年（一九四三）九月、東北帝国大学を卒業し、陸軍軍医として入隊。二十年六月十三日、ルソン島オリオン峠の激戦に際し、高熱の部隊長看護のため兵二名とともに残留して連絡が絶え、戦死と認定された。陸軍軍医少佐、二十七歳。

歌は十七年、学生時代の作。歌のしおりとして作者が日夜親しんだ明治天皇の御製「すなほなるをさな心をいつとなく忘れはつるが惜しくもあるかな」が心にあつたのだろう。歌をつくるにつけても、日常、事を判断するにつけても、と天皇はご自身を省みられているのだ。「すなほなるをさな心」と聞くだけで人生を共感する多くの友を私たちは友としてきた。そんな幼な心を、

一筋に守って生きたい、「友よ思はずや」お前もそう思わないか——。その呼びかけ、語りかけの語調は聞くだに清い。作者の童心がほとばしっているように思われる。

高瀬伸一
たかせ しんいち

荒れ狂ふ海のはたてはますらをのいのちのすてどいさぎよくゆけ

高瀬伸一は北支那、天津に生まれ、早く両親を失って長崎に育つ。昭和十九年（一九四四）、東京帝国大学文学部入学、二十年七月二十八日、呉軍港内において敵空爆により、乗艦「伊勢」が沈没し、運命をともにした。海軍中尉、二十二歳。

歌は旧制佐賀高等学校在学中より導きを得た先輩、同友が先に次々に出征するのを、わが征く戦場もかくあるべしと思いながら詠んだ送別の歌であろう。「荒れ狂ふ海のはたて」今太平洋のはるかかなた、日夜激戦に怒濤逆巻く海原のはては、われら日本男児のいのちの「すてど」捨てどころではないか、いさぎよく征けよ、友よと、わが身を真向に据えて歌っている。その死後、同輩の小林国男がこれに曲を附し譜面に残した。高瀬の遺詠の中に「思はずも足どり軽く歩くな今日友どちと会ひし嬉しさ」がある。友に親しむその笑顔は、柔和な表情の中にひめられた堅信を偲ばせる。

ひやくたけれいし
百武禮之

大空をさわたる月のくまもなきこよひは友もいねがてぬらむ

百武禮之は佐賀市出身、昭和十七年（一九四二）四月、東京帝国大学文学部倫理学科に入学、十八年十二月、学徒出陣して久留米に入隊。インドネシアのジャワにあった南方総軍の予備士官学校を首席で卒業後、二十年八月七日、シンガポールからビルマへ向かおうとする途中、タイ国パンサイパイヤにて敵機の銃撃を受けて戦死。陸軍少尉、二十五歳。

歌は旧制佐賀高等学校在学中の十六年の作。作者は校内においても、他校の同志からも信望される熱烈の人柄であった。「大空をさわたる」の「さ」は接頭語。隠れる陰もない満月の夜、わが国の来し方行く末、その永遠を思つて心に尽きないものがある。「こよひは友もいねがてぬらむ」友もまた同じ思いに眠られない一夜を過ごしていることだろう——。心通う友とともに、万世を貫く人の信（こころ）を求めてきた、その友が、「こよひは」俣ばれてならぬ、という歌意であらう。

てらおひろゆき
寺尾博之

倒れたる友を嘆かずいつの日かあもたどりゆく道と思へば

寺尾博之は京都市出身。昭和十七年（一九四二）四月、東京帝国大学農学部に入學。十八年十二月、學徒出陣、海軍予備學生、航空本部より九州軍需管理部に所屬して終戦を迎えたが、その直後八月二十日未明、福岡市南郊、油山の中腹、東方に真向かう草原に座して上官、長島秀男海軍技術中佐とともに自決した。海軍少尉、二十五歳。

遺書の一節に「大言葉ノマケノマニマニ国家再建ノ微力ヲ致スベケレドソノ確信ナク、一死以テ臣ガ罪ヲ謝シ奉リ、併せて帝國軍人タルノ榮譽ヲ保タムトス、願ハクハ魂魄トコシヘニ祖国ニ留メテ、玉體ヲ守護シ奉ラム」とある。

歌は出征前に遺した述懐の歌。いま身を死地に置こうと出立するとき、面影に立つ「倒れたる友」とは病に倒れ、私たちに後事を託して、昭和十八年三月若くして逝った友、旧制高校・大学時代ともに学んだ江頭俊一であった。友よ、もう君の死を嘆くことはやめよう。「あもたどりゆく道と思へば」私もこれから君のあとを追って戦場に赴く日を迎えたのだから——。作者が自らを遂げたその年の三月二十九日、弟尚之はすでに陸軍特攻機で沖縄海面の敵艦艇群に突入して戦死していた（早稲田大学出身、陸軍見習い士官、二十三歳）。母君の歌がある。「君のためささげし命とこしへに花とひらきて万代までも（昭和二十一年）」

昭和三十一年（一九五六）に発足した私どもの「国民文化研究会」五十年の節目を迎えるこの秋に、長年の夢であった本書が出版されることはまことによろこばしい限りです。

昭和三十一年当時のわが国といえ、昭和二十七年四月の講和条約発効（主権回復）から四年後ですが、日本弱体化を狙った占領政策の余波が、教育界、労働界、学界、マスコミ界などを広く覆っており、伝統的な「精神的遺産」を破棄しようとする動き一色に染められ、その結果、学生と年長者との間に価値判断の基準の違いが生じ、話の通じ合わない苛立ちが痛感される時代でした。この「断層」を何とか打開できないものかとの思いで発足したのが小田村寅二郎先生を理事長とする「国民文化研究会」です。この年、九州の霧島の地で「第一回全国青年合宿教室」という名の宿泊研修が開催されました。以来今日に至っており、今年で「第五十回」となりますが、その合宿教室における他に類を見ない特色は、これまで、歴史に残された、すぐれた短歌を読み味わう講義がなされ、さらに参加者は、少なくとも一首の歌をつくり、さらに自分のつくった短歌を他の合宿参加者と相互に批評しあうという得がたい経験を積み重ねてきたことでした。

こうして私たちはわが国の古来の名歌に、奮い立つほど感動し、お互いに心を開いて、自分の感動を「五七五七七」の詩型に表現しようと努力を重ねながら、日本人として生きるよろこびと

大切さを学んでまいりました。この本はそのような経験の中から、天皇のお歌をはじめ古来の有名無名の人々の歌を集成してつくられたものです。したがってこの一冊はこれまで五十年の歩みを重ねてきた私どものささやかな記念ではありますが、願わくはこの書物によって古くから歌い継がれてきた「日本の心」を感じとっていただき、それを契機に、美しい「日本」がよみがえり、ひいては混迷の日本を救う一石いっせきになるのであれば、編者一同これに勝るよろこびはありません。

この本でとりあげた歌（四百三十六首）および作者（百八十七人）の解説は、編著者の小柳陽太郎氏（元九州造形短期大学教授）他、当会会員十三名（別掲）の諸氏が分担執筆し、全体の編集は、同じく会員の磯貝保博（音羽建物（株）顧問）と今林賢郁（日鐵プラント設計（株）顧問）が担当しました。終わりに、今回の出版企画にご賛同いただき、心をこめて出版の作業を推進していただきました草思社の碓高明氏に衷心より謝意を捧げます。

平成十七年六月四日 小田村寅二郎先生七回忌の日に

今林賢郁

分担執筆者

宝辺 正久（大正十一年生まれ。懶宝辺商店 相談役）

長内 俊平（大正十一年生まれ。元電源開発環境立地本部 本部部长代理）

澤部 寿孫（昭和十六年生まれ。元日商岩井 エネルギ―本部副本部長）

山内 健生（昭和十九年生まれ。拓殖大学日本文化研究所 客員教授）

岩越 豊雄（昭和十九年生まれ。元小田原市立矢作小学校長）

大岡 弘（昭和二十二年生まれ。元新潟工科大学教授、國學院大學大学院在学）

小柳 左門（昭和二十三年生まれ。独立行政法人国立病院機構 都城病院院長）

山口 秀範（昭和二十三年生まれ。懶寺子屋モデル 代表世話役社長）

青山 直幸（昭和二十四年生まれ。戸田建設懶東京支店 開発営業部長）

宝辺矢太郎（昭和二十八年生まれ。山口県立下松高等学校教諭）

鏡 信弘（昭和二十八年生まれ。防衛庁契約実施本部東京支部 主任検査官）

小柳志乃夫（昭和三十年生まれ。懶みずほコーポレート銀行 資本市場部長）

山根 清（昭和三十年生まれ。東京防衛施設局 施設調整官）

名歌でたどる日本の心

2005 © Kokuminbunkakenkyukai



編著者との申し合わせにより検印廃止

2005年8月30日 第1刷発行

編著者 国民文化研究会・小柳陽太郎

ブック
デザイン Push-up (清水良洋・佐野佳子)

発行者 木谷東男

発行所 株式会社 草思社

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-33-8

電話 営業 03(3470)6565 編集 03(3470)6566

振替 00170-9-23552

印刷 株式会社精興社

製本 加藤製本株式会社

ISBN4-7942-1426-X

Printed in Japan

草思社刊

声に出して読みたい

日本語 ㊦ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴

齋藤 孝

歌舞伎の名セリフ、漢詩、和歌、古文、近代詩など、覚えて声に出すと心地よい日本語の美文、名句をあつめた本。暗誦・朗読は、身体に活力を与え、心の力につながると説く。

定価 ㊦ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ 1260円
㊱ ㊲ ㊳ ㊴ 1365円

子供に語ってみたい

日本の古典怪談

野火 迅

怖い話で子供は育つ。「耳なし芳一」「牡丹灯籠」をはじめ、知っていそうで意外と知らない名作怪談を多数紹介。イマジネーション溢れる物語世界が子供の豊かな感受性を伸ばす。

定価1260円

芭蕉の孤高、蕪村の自在

雲英末雄

芭蕉の俳諧を同時代の俳人たちと比較し、その俳諧の成立過程から、芭蕉の俳諧のどこがすぐれているかを示す。蕪村については俳諧と絵画の関係を語る。実作者必携の一冊。

定価2520円

教室から消えた

「物を見る目」、「歴史を見る目」

小柳陽太郎

学校は個性尊重を言うまえに、まず古典教育を大切にせよ！福岡県で国語教師として長年にわたって教鞭をとった著者が、軽視されつつける日本の伝統文化の復権を説く。

定価1680円

定価は本体価格に消費税5%を加えた金額です。

